

ISSN 1348-8384



拓殖大学
語学研究

Takushoku Language Studies

2015.12

No. 133

拓殖大学 語学研究

2015 年 12 月

第 133 号

目 次

〈論 文〉

現代モンゴル語「VP+байх」構文の意味と機能

— 5 種のモンゴル語教材から — ……………浅井 澄民 (1)

日本語学習者のための工学系専門用語の発音指導

— 中国語母語話者における縦断的研究 — ……………木村 政康 (25)

「動詞＋形容詞」のコロケーションに関する考察…………小池 和良 (61)

国楽改進黨幹事社員 — その功績と限界 — ……………久米井敦子 (87)

中国語の介詞フレーズ状語を巡る

語順原則について ……………平山 邦彦 (111)

文化的反義語の試案

— 第 4 のカテゴリーとして — ……………山田 政通 (149)

〈調査報告〉

岩国英国語学所教師 H. A. Stevens に関する研究

— 先行研究での疑問点の解明に焦点を当てて — ……保坂 芳男 (173)

〈資 料〉

ファン・デル・エンシーナの戯曲における文法的特徴の考察

(『我らが贖い主の受難と死の上演』(1496))(下)…………廣澤 明彦 (187)

拓殖大学 研究所紀要投稿規則 …………… (231)

拓殖大学言語文化研究所 『拓殖大学 語学研究』執筆要領 …… (234)

Takushoku Language Studies

No. 133

Contents

〈Articles〉

- Semantic Function of “VP байх” Constructions
in Mongolian LanguageASAI Sumitami (1)
- Longitudinal Study on Teaching Pronunciation
of Technical Terms to a Chinese Learner
of Japanese Language.....KIMURA Masayasu (25)
- Reflexiones sobre las
colocaciones verboadjetivalesKOIKE Kazumi (61)
- A Study on Secretaries of the Association
of Innovation of Chinese Music:
their Achievements and LimitsKUMEI Atsuko (87)
- The Principles of Word Order
regarding Prepositional-Phrase Adverbials
in ChineseHIRAYAMA Kunihiko (111)
- A Proposal for Cultural Antonyms
as a Fourth CategoryYAMADA Masamichi (149)

〈Research〉

- A Study on H. A. Stevens, an English teacher
at Iwakuni English School:
Exploring mysteries in the previous literature.....HOSAKA Yoshio (173)

〈Material〉

- Estudio sobre las características gramaticales
de una obra teatral de Juan del Encina
(“Representación a la Pasión y muerte de Nuestro Redentor”)
(segunda parte)HIROSAWA Akihiko (187)
- Submission of Manuscript (231)
- Instructions for Contributors..... (234)

〈論文〉

現代モンゴル語「VP+байх」構文の 意味と機能

— 5 種のモンゴル語教材から —

浅井 澄 民

要 旨

本稿では『(旧本) 老乞大』句末の“有”と現代モンゴル語の句末助動詞“байх”の類似性について検討する一環として、5 種のモンゴル語教材における、現代モンゴル語の「VP (動詞述語文)+байх」構文の意味と機能について考察する。

0. はじめに

筆者は浅井 2015 において、『(旧本) 老乞大』句末の“有”と現代モンゴル語句末助動詞 байх⁽¹⁾ の類似性について指摘し、特に現代モンゴル語の存在動詞 байх とその文法化用法である「NP・AP (名詞・形容詞述語文)+байх」構文における байх の意味と機能がチベット語に類似した「言語主体位相の叙述；話し手が現に関知している主観的叙述」であることを検証した。本稿では、現代モンゴル語存在動詞 байх のもう一つの文法化用法である「VP (動詞述語文)+байх」構文の意味と機能について考察する。

1. 現代モンゴル語の「VP+байх」構文

筆者が調査した5種のモンゴル語教材における「VP（動詞述語文）+ байх」構文の各用法とその出現数を表すと下の表1ようになる。

表1 5種のモンゴル語教材における「VP+байх」構文

	VP	байхР	意味	N ₁	N ₂	H	Y	K	計
1	V-ж・ч+	бай-на	現在進行（※目前） 「～している」	15	26	30	17	30	126
		л бай-на						2	
		бай-на даа					1		
		бай-на л даа						1	
		бай-на аа			2				
		бай-на шүү					1		
		яваа юм шиг бай-на						1	
	V-ж・ч+	бай-гаа	現在進行（※目前以外） 「～している」			1		4	10
		бай-гаа даг шүү					1		
		бай-гаа янзтай					1		
		бай-гаа бизээ						1	
		бай-гаа-гүй	したことがない	1					
		л бай-даг	してばかりいる				1		
	V-ж・ч+	бай-сан	過去進行 「～していた / したことがある」	2			10	6	21
		бай-сан уяаатай					1		
		бай-лаа					1		
		бай-х жишээтэй	～の事例がある				1		
	V-ж・ч+	бай-гаарай	命令 「～していて下さい」		2		2	2	12
	V-эна ⁴ -ж	бай-гаарай						2	
	V-ж・ч+	бай-гаач						1	
	V-ж・ч+	бай-гтун						1	
	V-эна ⁴ -ж	бай						1	
	V-ж・ч+	бай-я						1	
2	V-аад ⁴ +	бай-на	現在の状態 「～してある / している」		1	1	1	4	10
		л бай-на					1		
	-чих-аад ⁴	бай-на						1	
	-чих-аад ⁴	бай-сан	過去完了					1	

3	V-саар ⁴ +	бай-на	現在の継続状態 「～続けている」				2	1	9
		л бай-на					1	2	
		л бай-даг					1		
		бай-жээ	伝聞過去 「～続けていた」				1		
		л бай-жээ					1		
4	V-даг ⁴ +	юм бай-на	～の状態である				1		3
		бай-сан	～していた				2		
5	V-сан ⁴ +	бай-на	現在の継続状態 「～の状態である (ようだ)」			2		2	12
		шцг бай-на					1		
		юм шцг бай-на		2			1	1	
		бай-гаа						2	
		бай-хаа	過去の推量					1	
6	V-аа ⁴ +	л бай-на	～し続けている				1		10
	V-аа ⁴ -гүй	бай-на	現在進行の否定 「～していない」			1		4	
		юм бай-на					1		
		бай-гаа						2	
		бай-ж уу	していないの？				1		
7	V-аастай ⁴	бай-на	～の状態である					4	4
8	V-маар ⁴ +	бай-на	希望	9	7	6	2	2	32
		бай-на шүү яээ	「～したい」					1	
	-маар ⁴ -гүй	бай-на	～したくない		2				
	-ж үзмээр	бай-на	～してみたい		1	2			
9	V-x+	бай-х	推量					1	6
		бай-хаа	「～するだろう」		2	1		2	
	V-x+	бай-сан	過去の条件 「～していたのに」				3	1	7
		бай-сан-сан					1		
		бай-гаа					2		
	V-x+	юм бай-на	確実に起こる未来 「～のようだ」					1	4
		юм шцг бай-на						1	
		нь бай-на						2	
	V-x+	гэж бай-на	～するつもりだ		1			6	10
		гэж бай-сан	～するつもりだった /しようとしていた				1		
		гэж бай-сан юм					1		
		гэж бай-жээ					1		
	V-x-гүй+	бай-х аа	推量				1		10
		бай-хаа	「～しないだろう」		1			1	
		бай-сан	過去の条件				1	3	
		бай-гаа	「～しなかったのに」				1	1	
		нь шцг бай-на	～しそもない					1	
計				27	47	44	67	101	286

(※表中の背景色ありは、否定を表す)

上の表からわかるように、この構文を形態上分類すると、大きく9種に分けることが可能である。ここでは便宜上構文1、構文2～7、構文8～9の三種に分けて論じる⁽²⁾。

2. 「V-ж・ч+байх」構文；構文1

この構文は「動词语幹＋連用形接尾辞 -ж・ч+байх」の形式で表され、筆者が調査した5種のテキスト中では総計169例現れ、全体の6割弱を占めており、最も多用される構文である。山越康裕2012(p.122)によると「不完了を表す動詞の連用形 -ж・ч に「いる/ある」を意味する動詞 байх が接続すると「動作が進行中である状態」もしくは「動作の結果状態」を表し、日本語の「～している」におおよそ対応している」とある。

この構文を更に分類すると、-ж бай-на/-ж бай-гаа に代表される「現在進行形」、-ж бай-сан/-ж бай-лаа に代表される「過去進行形」、-ж бай-гаарай に代表される「(持続を要求する) 命令形」の3種に分類することが可能である。以下それぞれの用法を見ていく。

2.1. 現在進行形；-ж бай-на (126例)、-ж бай-гаа (9例)、-ж бай-даг (1例)

現在進行形を表す -ж бай-на は総計126例現れ、全体の44%を占めている。бай-на の -на⁴ は現在時制を表す終止形接尾辞である。

- 1) Дорж идэж байна. (N₁75)

ドルジ 食べて いる；ドルジは食べている。

德尔叽 吃 有；德尔叽在吃呢。

- 2) Чи юу хийж байна? — Захиа бичиж байна. (N₂77)

君 何 して いる(の)? — 手紙 書いて いる；手紙を書いています。

你 什么 做 有；你在做什么呢？— 信 写 有；我在写信呢。

- 3) Би сууж байна. (N₁64)

私 座って いる；私は座っている。

我 坐 有；我坐着呢。

- 4) Одоо хэдэн цаг болж байна? — Арван цаг болж байна. (N₁126)

今 いくつの 時 なって いる；今何時？

— 10 時 なって いる；10時です。

现在 几 点 是 有；现在几点了？— 10 点 是 有；10点了。

- 5) Гал асаж байна уу? (K62)

火 燃えて いる か；火は燃えていますか？

火 燃烧 有 吗；火燃烧着吗？

例文 1) 2) は継続動詞「食べる」「書く」に接続し、「動作の進行中である状態」を表し、例文 3) は瞬間動詞「座る」に接続し、「動作の結果状態」を表していると考えられる。例文 4) は時刻を表す表現に現れ、やはり「なる」という瞬間動詞に接続した「動作の結果状態」を表したものと考えることが可能である。対応訳である現代中国語の変化を表す語気助詞“了₂”はほぼ同様の意味を表していると考えられ興味深い。例文 5) は文末に疑問小詞を用いた疑問形式である⁽³⁾。

もう一つの現在進行形を表す -ж бай-гаа は 9 例現れる。бай-гаа の -гаа は不完了を表す（山越康裕 2012 参照）連用形接尾辞 -aa⁴ が音韻変化したものである。ではこの -ж бай-гаа 文は前述の -ж байна 文とどのような違いがあるのだろうか。これについて金岡秀朗 2009 (p. 66) では「-ж байна がまさに今、目の前で進行することを述べるのに対し、-ж байгаа は目の前以外で進行している事実を表し、しかも話者は他所で起きているその事実を知っている」と、次の例を示し説明している。

6) Ариун бага сургуульдаа явж **байна/байгаа**. (K66)

アリオン 小学校に 行って いる；アリオンは小学校に行っている。

啊利嗯 小学 去 有 ；啊利嗯上小学去呢。

7) Одоо би монгол хэл сурч **байна/байгаа**. (K66)

今 私 モンゴル語 勉強して いる；

今私はモンゴル語を勉強している。

现在 我 蒙古语 学习 有 ；现在我正在学习蒙古语呢。

8) Тэр унтаж **байгаа**. (K66)

彼 寝て いる；彼は寝ている。

他 睡觉 有 ；他在睡觉呢。

すなわち、例文 6) の -ж байна 文ではアリオンが今話者の目前で小学校に向かって歩いているのに対し、-ж байгаа 文ではアリオンが今小学生として学校に在学していることを表している。また例文 7) の -ж байна 文では話者が今まさに机に向かって勉強しているのに対し、-ж байгаа 文では話者の目前で進行しているのではないことを表している。例文 8) も話者は彼が寝ていることは事実として知っているものの、目前に彼はおらず、話者の見えないどこかで今現在寝ていることを表している。

この現在進行形の否定は後述する「V -аа⁴-гүй+байна (～していない)」構文で表されるが、ここではもう一つの否定形「V -ж・ч+бай-гаа-гүй (～したことがない)」が 1 例現れている。

9) Өмнө тэнд очиж **бай-гаагүй**. (N₁71)

以前 そこに 行って いない；これまでそこに行ったことがない。

以前 在那儿 去 没有 ；曾经没去过那儿。

この否定形は、意味上次に述べる過去進行（経験）を表す「V -ж・ч+

бай-сан（～したことがある）」の否定形と考えられる。

V -ж・ч で始まる現在進行形にはもう 1 例 -ж бай-даг が現れる。

10) Өдөр бүр гэртээ идэж л байдаг. (Y197)

毎日 自宅で 食べて ばかり いる。

每天 在家 吃 只 有；每天在家总吃着。

ここでは -ж と бай-даг の間に強調を示す限定小詞 л が現れる（山越康裕 2012 参照）が、全体の意味としてはやはり現在進行を表している。бай-даг の -даг⁴ は習慣を表す連体形接尾辞であり、現在の習慣の状態を表していると考えられる。

以上 3 種の「現在進行形」について見てきたが、-ж бай-на と -ж бай-гаа にはその他の小詞等が付いた例が数例ずつ現れている（表 1 参照）。

2. 2. 過去進行形；-ж бай-сан（19 例），-ж бай-лаа（1 例）

モンゴル語にはテンス（時制）を示す文法形式が発達しており、この点中国語とは対照的である。同じ進行形でも過去を表す -ж бай-сан が 19 例、-ж бай-лаа が 1 例現れる。бай-сан の -сан⁴ は完了を表す連体形接尾辞だが、叙述用法では過去を表す。また бай-лаа の -лаа⁴ は過去を表す終止形接尾辞である。

11) Гал асаж байна (уу?) / Гал асаж байсан (уу?) (K62)

火 燃えて いる (か?) / 火 燃えて いた (か?)

火 燃烧 有 (吗?) / 火 燃烧 有过 (吗?)；火燃烧着 (吗?)。

12) Радио соносч байсан уу? — Тийм, сая соносч байсан. (K63)

ラジオ 聴いて いた か? — はい、さっき 聴いて いた。

收音机 听 有过 吗；你听着收音机吗？

— 对, 刚才 听 有过 ; 我刚才听着呢。

13) Өмнө тэнд очиж байсан (уу?) (N₁70)

以前 そこに 行って いた (か?);

以前そこに行ったことがある (か?)

以前 在那儿 去 有过 (吗?);

以前我去过那儿 / 以前你去过那儿吗?

14) Тэр үед манай улс түргэн хөгжиж байлаа. (Y123)

あの 時期に 我々の 国 速く 発展して いた;

当時我が国は急速に発展していた。

例文 11) は -ж байна を用いた現在進行形と -ж байсан を用いた過去進行形を表している。また文末に疑問小詞 уу を用いて疑問文を作ることができる。例文 12) 13) は同じ -ж бай-сан を用いた過去進行形を表すが訳語に違いがでている。13) はむしろ経験を表しているが、過去の事柄のとらえ方の違いであろうか。ただ、温品廉三 2009 (p. 70) に「経験を表す形は過ぎ去った進行形と言える」とあり、現代中国語の経験を表すアスペクト助詞“过”の性格を考える上で示唆的である。例文 14) は -ж бай-лаа を用いた例である。経験の否定については前述の例文 9) で述べた通りである。

2. 3. (持続を表す) 命令形; -ж бай-гаарай (10 例), -ж бай-гаач (1 例),
-ж бай-ггун (1 例), -ж бай (1 例), бай-я (1 例)

最後に「V -ж・ч+бай-на」構文の 3 つ目の意味を表す「(持続を表す) 命令形」について見ていく。この表現は今までの「現在進行形」や「過去進行形」に比べると些か趣を異にしている。但し、やはり「動作の進行・結果状態」の意味を保持している点で、上記 2 種と共通点がある。また、現代中国語の持続を表すアスペクト助詞“着”がしばしば命令形で使われる用法があり、興味深い⁽⁴⁾。この表現で現れる接尾辞 -гаарай⁴「依頼」,

-гаач⁴「軽い命令」, -гтун²「願望」, -я「意思・勧誘」, また接尾辞ゼロ「命令」はいずれも命令を表す終止形語尾である。

- 15) Хүлээж байгаарай. / Сууж байгаарай. / Сууж байгаач. (K124)
 待って いて下さい。 / 座って いて下さい。 / 座って いて。
 等 有 ; 请等一下。 / 坐 有 ; 请坐。 / 坐 有 ; 坐会儿。
- 16) Сайн сууж байгаарай. (N₂94)
 元気で 暮らして いて下さい ; お元気で。
 好 生活 有 ; 好好儿生活着 / 祝你生活快乐。
- 17) Энд жаахан хүлээнэж байгаарай. / Байзнаж бай. (K154)
 ここで 少し ちょっと待って いて下さい。 /
 ちょっといて いなさい。
 在这儿 稍微 等一下 有 ; 在这儿稍微等一下 /
 在一下 有 ; 等一下 / 等等。
- 18) Та нар гадаа гарч байгтун. (K125)
 あなたたち 外に 出て いて下さい。
 你们 在外面 出去 有 ; 你们给我出去吧 / 你们在外面等着我吧。
- 19) Би хүлээж байя. (K152)
 私 待って いましょう。
 我 等 有 ; 我等着吧。

例文 15) 16) で現れる接尾辞 -гаарай⁴, -гаач⁴ は丁寧な命令形を表している⁽⁵⁾。例文 16) は遠方に出かける人が残る人に対して言う決まり文句である⁽⁶⁾。例文 17) は動詞と接尾辞 -ж の間に短時間を表す接尾辞 -зана⁴ が挟まった形で、「ちょっと」の意味を表す。例文 18) の接尾辞 -гтун² は古めかしい言い方で、おごそかで丁寧な語調がある⁽⁷⁾。例文 19) は「待つ」という持続の意思を表している。これらの表現はいずれも

「ある動作の状態のままでいる」ことを表していると考えられる。

3. その他の「動作の進行・結果の状態」を表す構文；構文 2～7

次に、前述した「V-ж・ч+бай-x」構文以外で、やはり「動作の進行・結果の状態」を表すと考えられる 6 種の表現について見ていくことにする。ここでは形態上、大きく動詞連用形接尾辞と動詞連体形接尾辞に分けることが可能である。

動詞連用形接尾辞としては「V-аад⁴+бай-x」構文（10 例）と「V-саар⁴+бай-x」構文（9 例）の 2 種類がある。また動詞連体形接尾辞としては「V-даг⁴+бай-x」構文（3 例）、「V-сан⁴+бай-x」構文（11 例）、「V-аа⁴+бай-x」構文（10 例）の、「V-аастай⁴+бай-x」構文（4 例）の 4 種がある。総計 43 例現れ、全体の 15%を占めている。以下、それぞれの構文について詳しく見ていく。

3. 1. 「V-аад⁴+бай-x」構文；-аад⁴ бай-на（9 例）、-аад⁴ бай-сан（1 例）

この構文で現れる接尾辞 -аад⁴ は「完了」を示す動詞連用形接尾辞である。金岡秀朗 2009（p. 111）では「完了を示す -аад⁴ は、現状を示す байнаとともに用いて、過去におこった出来事が今もつづいている「状態」を表す」と説明している。また前述の -ж бай-на 用法「現在進行形」との違いを次の例文 20) 21) を示して説明している。

20) Самбарт үсэг бичиж байна./ Самбарт үсэг бичээд байна. (K111)

黑板に 字 (を) 書いて いる；進行。/

黑板に 字 (が) 書いて ある；状態。

黑板上 字 写 有；(他) 正在黑板上写字呢。/

黑板上 字 写 有；黑板上写着字呢。

- 21) Талбайд хүмүүс ирж байна. / Талбайд хүмүүс ирээд байна. (K111)

広場に 人々（が）来つつ ある；進行。/

広場に 人々（が）来て いる；状態。

广场上 人们 来 有；广场上正在来一些人呢。有一些人正在到广场来。/

广场上 人们 来 有；广场上来了一些人。

- 22) Гэдэс өлсөж байна. Ам цангаж байна. / Толгой өвдөөд байна. (N₂45)

おなか すいて いる。のど かわいて いる。/

（ずっと）頭 痛んで いる。

肚子 饿 有；肚子饿了。口 渴 有；口渴了。/

头 疼 有；（一直）头疼着。

例文 22) では -ж байна より -аад⁴ байна の方が時間の経過が感じられる。

また、動詞と -аад⁴ の間に完了接尾辞 -чих- を挟み完全完了「～してしまふ」を表す用例が現れている。

- 23) Намайг ирэхэд тэр нэвтрүүлэг дуусчихаад байна. (K108)

私（が）来る時 その 番組（は）終わってしまつて いる。

我 来时 那个 节目 完了 有；我来的时候，那个节目已经播送完了。

この文の最後を дуусчихаад байсан とすると「（私が来た時）終わってしまっていた」の意味になり、英語の過去完了に近いとある⁽⁸⁾。

3. 2. 「V-саар⁴+бай-х」構文；-саар⁴ бай-на (6 例), -саар⁴ бай-даг (1 例), -саар⁴ бай-жээ (2 例)

この構文で現れる接尾辞 -саар⁴ は「継続」を示す動詞連用形接尾辞である。山越康裕 2012 (p. 132) では「-саар⁴ は動作が継続中「～しつつけて」であることを示す。継続的な動作をあらわす動詞に接続することが多い

が、一方で瞬間的な動作をあらわす動詞に接続する例も見られ、この場合「複数の動作主が次々と～して」という意味になる。多く直後に бай-х が置かれる。」とある。また金岡秀朗 2009 (p. 155) では「-саар⁴ (л) бай-на「ずっと～している」は行為を継続している状態を示す。日本語の副詞「ずっと」の機能がモンゴル語では接尾辞に包含されている」と説明している。

24) Түүний тухай бодсоор байна. (K155)

それ について ずっと考えて いる。

那个 对于 一直想 有；对于那件事我一直想。/ 我一直想那件事。

25) Гадаа бороо орсоор л байна. (K155)

外に 雨 降り続けて ばかり いる；外はまだ雨が降っている。

外面 雨 下着 总 有；外面还下着雨呢。

26) Амьдрал явсаар л цаг урссаар л байдаг. (Y197)

生活 移ろい続けて ばかり 時 流れ続けて ばかり いる；

日々の暮らしは移ろい、時は流れ続ける。

生活 走着 总 时间 流动着 总 有；生活过下去，时间过下去。

27) Хачи хүлээсээр л байжээ. (Y196)

ハチ 待ち続けて ばかり いた；

ハチは（ずっと）待ち続けていた（そうだ）。

哈齐 一直等 总 有；哈齐一直等着。

上記例文の動詞「考える」「(雨が) 降る」「移ろう」「流れる」「待つ」はいずれも継続動詞と考えられる。例文 25) 26) 27) で -саар⁴ のあとに現れる л は強調を示す限定小詞で、この表現によく用いられる。例文 26) байдаг の -даг⁴ は習慣を表す連体形接尾辞であり、例文 27) байжээ の -жээ は伝聞過去を表す終止形接尾辞である。

3. 3. 「V-сан⁴+бай-х」構文；-сан⁴ бай-на（9 例）、-сан⁴ бай-гаа（2 例）、 -сан⁴ бай-хаа（1 例）

この構文の接尾辞 -сан⁴ は「完了 / 過去」を表す連体形接尾辞である。金岡秀朗 2009（p. 57）では「-сан⁴ は過去のある一点の出来事を示す。-сан⁴ は現在の状態を表す байна とともに用いると、過去に起きたことが現在もつづいていることを表す。これは完了形の接尾辞を用いた -аад байна の意味に近く、過去から現在にいたる時間のはばを有する表現になる」とある。

28) Тэр сүм байсан байна / байгаа. (K57)

その 寺院 あって ある；そのお寺は（かつて）あって（今も）ある。
那个 庙 有过 有；那座庙（一直）在（这儿）。

29) Хүнбиш тэнд ирсэн байна / байгаа. (K57)

フンビシ そこに 来て いる；フンビシはそこに来て（今も）いる。
鞏比西 在那儿 来了 有；混比西来到那儿了。

30) Халуунтай байна. 38.2 хүрсэн байна. (H120)

熱あり です。38.2 達して いる；熱があります。38度2分あります。
发烧 有。38.2 达到 有；有点儿发烧。有 38 度 2。

31) Ханиад хүрсэн юм шиг байна. (N₂42)

風邪 ひいた の ようで ある；風邪をひいたようだ。
感冒了 的 好像 有；可能感冒了。

32) явсан байхаа. (K119)

行った だろう。
去了 有；去了吧。

例文 28) 29) ではいずれも現在の状態を述べているが、байна 文は話者

が目撃している出来事であるのに対し、байгаа文は話者が目撃していないところでの出来事を叙述している⁽⁹⁾。例文 30) も 38 度 2 分に達した結果後の現在の状態であり、過去の結果から現在にいたる時間のはばを有した表現である。例文 31) の юм шиг байнаで「～のようだ」の意味を表す。例文 32) の байхааは推量を表す。

3. 4. 「V-даг⁴+бай-х」構文と「V-аастай⁴+бай-х」構文；-даг⁴ бай-на (1 例), -даг⁴ бай-сан (2 例), -аастай⁴ бай-ха (4 例)

次に少数例の「V-даг⁴+бай-х」構文と「V-аастай⁴+бай-х」構文について見ていく。前者の -даг⁴ は「習慣」を表す連体形接尾辞である。後者の -аастай⁴ は前述の「完了」を示す -аад⁴ に似た状態接尾辞である⁽¹⁰⁾。

33) Тэр их завгүй байдаг юм байна. (Y210)

彼 とても 暇なし である の だ；彼はとても忙しいんだ。

他 非常 忙 有 的 有；他是很忙的。

34) Японд байхдаа өдөр бүр цагаан будаа иддэг байсан. (Y138)

日本で いる時 毎日 白い 穀物 食べて いた；

(自分が) 日本にいる時毎日米を食べていた。

在日本 在时 每天 白 米饭 吃 有过；(我) 在日本时每天吃着米饭。

35) Ширээн дээр тавиастай байна. (K178)

机の 上に 置いて ある。

桌子的 上面 放着 有；桌子上放着 / 放在桌子上。

36) Самбарт дээр үсэг бичээстэй байна. (K179)

黑板に 上に 字 書いて ある；黑板の上に字が書いてある。

黑板上 上面 字 写着 有；黑板上写着字呢。

例文 33) 34) は接尾辞 -даг⁴ の例であり、「忙しい」「毎日食べる」習慣

（継続）を表している。これは前述の「継続」を示す -саар^d に類似していると言えよう。また例文 34) は байсан を用い前述の過去進行形「～していた」に近い表現である。例文 35) 36) は -аастай^d の例であり、動作の結果「完了」の状態を表していると言える。例文 36) は -аад^d を用いた例文 20) と同じ意味を表している。

**3. 5. 「V-аа^d+бай-х」 と 「V-аа^d-гүй+бай-х」 構文； -аа^d бай-на (1 例),
-аа^d-гүй бай-на (6 例), -аа^d-гүй бай-гаа (2 例), -аа^d-гүй бай-ж (1 例)**

最後に「V-аа^d+бай-х」構文と否定形の「V-аа^d-гүй+бай-х」構文を見ていく。この構文の -аа^d は「不完了 / 継続」を示す連体形接尾辞である。山越康裕 2012 (p. 114) では「-аа^d の叙述用法も「いま現在その状態にある」ことを示すが、平叙文で用いられるケースはあまりなく、疑問文・否定文で用いられるケースがほとんどである」とある。また金岡秀朗 2009 (p. 57, p. 62) には「-аагүй は -сан^d の否定に使われ、ある過去の時点で出来事が起きなかったことを意味する。これに完了的な意味、すなわち過去のある時点から現在まで起きていない「ずっと～していない」ことを表すには文末に байна を置く。この -аагүй байна は同時に現在進行形を否定することにもなる。」とある。

37) Гал унтраагүй байна. (K58)

火 消えないで いる；火は（まだ）消えていない。

火 没熄灭 有 ；火还没熄灭。

38) Тэр ирээгүй байна. (K58)

彼 来ないで いる；彼は（まだ）きていない。

他 没来 有 ；他还没来。

39) Радио асаж байна уу? — Үгүй, асаагүй байна. (K63)

ラジオ ついて いる か？ — いいえ，つかないで いる；

ついていない。

收音机 开着 有 吗；收音机开着没有？ — 没有，没开着 有；没开着。

40) Пэрлээ тусалж байна. Баатар туслаагүй байна. (K63)

ペルレー 手伝って いる。バートル 手伝わないで いる；

バートルは手伝っていない。

培儿雷 帮忙 有；培儿雷正在帮我的忙。巴塔儿 没帮忙 有；

巴塔儿没帮我的忙。

41) Тэр унтаагүй байгаа. (K67)

彼 寝ないで いる；彼は寝ていない。

他 没睡觉 有；他没睡着

42) Нэг хуудас ч бичээгүй байж уу? (Y163)

1 ページ も 書かないで いた の；1 ページも書かずにいたの？

1 页 也 没写 有过；1 页也没写吗？

例文 37) 38) は「完了」の否定，例文 39) 40) は「現在進行」の否定と考えられる。また例文 41) も「現在進行」の否定だが，話者の見えないところでの事実を表している。例文 42) の байж は байжээ「伝聞過去」の短縮形である。

以上，「動作の進行状態」及び「動作の結果状態」の表現を見てきたが，これまでの表現を意味上大きくこの二つに分類することが可能であるようだ。また否定を含めると大雑把に次のように整理できる。

1) 「動作の進行状態」；「-ж, -саар⁴, -даг⁴」+ бай-х

2) 「動作の結果状態」；「-ж, -аад⁴, -сан⁴, -аастай⁴」+ бай-х

3) 「動作の進行・結果状態の否定」；「-аагүй」+ бай-х

4. 「V-маар⁴+бай-х」構文と「V-х+бай-х」構文；構文 8～9

これまで見てきた「VP+бай-х」構文が「動作の進行・結果状態」を表していたのに対し、ここで見る「V-маар⁴+бай-х」「V-х+бай-х」構文は些か性格が異なる。「V-маар⁴+бай-х」構文は「希望（～したい）」を「V-х+бай-х」構文は「推量・未来（～だろう・のようだ）」を表す。前者 32 例、後者 40 例の計 72 例が現れ、全体の 25%を占める。以下、それぞれの用法について見ていく。

4.1. 「V-маар⁴+бай-х」構文；-маар⁴ бай-на (27 例), -маар⁴-гүй бай-на (2 例), -ж үзмээр бай-на (3 例)

この構文の-маар⁴は「願望」を表す連用形接尾辞である。山越康裕 2012 (p. 133) では「もっぱら -маар⁴ байна の形で「～したい」という意味を表す」とある。また金岡秀朗 2009 (p. 121) では「この語法は話者の気持ちを伝えるからほとんどの場合は би (私) や бид (私たち) が主語になる」とある。

43) Би унтмаар байна. (N₁66) / (Би)унтмааргүй байна. (N₁67)

私 寝たい です。 / (私) 寝たくない です。

我 要睡觉 有；我要睡觉。 / (我) 不想睡觉 有；我不想睡觉。

44) Би амармаар байна. (N₁67) / (Би)Амармааргүй байна. (N₁67)

私 休みたい です。 / (私) 休みたたくない です。

我 要休息 有；我要休息。 / (我) 不想休息 有；我不想休息。

45) Монгол дээл өмсөж үзмээр байна. (N₂57)

モンゴル 服 着て みたい です；モンゴル服を着てみたい。

蒙古 衣服 穿 要看 有；(我) 要试穿蒙古衣服。

例文 43) 44) はこの表現の肯定形「～したい」と否定形「～したくない」を表している。例文 45) の -ж үзмээр байна は「～してみたい」という意味を表す。主語は省略されているが一般に一人称を指すと考えられる。

4. 2. 「V-x+бай-x」構文；-x бай-на (4 例), -x бай-x (aa) (6 例), -x бай-сан (-сан) (5 例), -x бай-лаа (2 例)

この構文の -x は「未来」を表す連体形接尾辞である。山越康裕 2012 (p. 110) では「叙述用法において、未来形は否定文や疑問文では用いられるが、平叙文ではあまり用いられない。平叙文で用いられるときは、さまざまな状況から確実に実現しそうな事態に対して用いられる」とある。ここでは後述する「V-x-гүй+бай-x」「V-x+гэж бай-x」構文を除いた狭義の「V-x+бай-x」構文について見ていく。

46) Тэр унтах юм **байна**. (K54)

彼 寝る ので ある；彼は(もう)寝る。

他 睡 的 有；他快要睡了。

47) Тэр явах юм шиг **байна**. (K146)

彼 行く のだ ようで ある；彼は行くようだ。

他 去 的 好像 有；他快要走了。

48) Амжих байхаа. (N₂34) Маргааш тэр ирэх байхаа. (H90)

間に合う だろう。 明日 彼 来る だろう；明日彼は来るだろう。

来得及 吧。 明天 他 来 吧。

49) Өчигдөр бороо ороогүйсэн бол, би хөлбөмбөг тоглох **байлаа / байсан**. (Y146)

昨日 雨 降らなかった ら、私 サッカーで 遊んで いた(はずだ)。

昨天 雨 不下 的话、我 踢足球 玩儿 有过；

昨天雨不下的话，我踢足球玩儿。

46) 47) の юм は断定を表し、-х юм で確実に起こる未来の出来事を表す。байна は現在の状態を表し、-х юм байна で今これから～しそうな様子を示している⁽¹¹⁾。この形式が表す意味は、現代中国語のアスペクト形式のひとつ「将然相」「快要～了」に類似している。例文 48) の байхаа は推量「～だろう」を表すが、未来時制を表していると考えられる。例文 49) は過去の条件「反実仮想」「假定法過去」を示しており、-х байлаа, -х байсан で「こうなるはずだった」のニュアンスをとまなう⁽¹²⁾。байлаа, байсан はいずれも過去の状態を表す。

4. 3. 「V-х-гүй+бай-х」構文；-х-гүй бай-на (1 例), -х-гүй бай-х (аа) (3 例), -х-гүй бай-сан (4 例), -х-гүй бай-гаа (2 例)

この構文の -гүй は否定接尾辞であり、「V-х-гүй+бай-х」構文は上記「V-х+бай-х」構文の否定形と考えられる。

50) Мөнгө байхгүй тул авч чадахгүй нь шиг байна. (K146)

お金 ない ので 買って できない ことの ようで ある；

お金がないので買えそうもない。

钱 没有 因为 买 不能 好像 有过；因为（我）没钱，可能买不起。

51) Арай амжихгүй байхаа. (N₂36)

ちょっと 間に合わない だろう。

几乎 来不及 吧。

52) Чи намайг таньсансан бол, манайх руу утасдахгүй байлаа/байсан.

(Y146)

君 私を 知っていた なら、私たちの家 の方へ 電話しないで いた；

君が私のことを知っていたのなら、うちに電話してこなかっただろうに。

你 我 认识过 的话，我们家 向 不打电话 有过；

你认得我的话，不给我家打电话。

4. 4. 「V-x+ гэж бай-х」構文；-х гэж бай-на (7 例)，-х гэж бай-сан (2 例)，-х гэж бай-жээ (1 例)

この構文の гэж は動詞 гэх 「～しようとする」の連用形であり，-х гэж байх の形で「～しようとしている / ～するつもりである」意味を表す⁽¹³⁾。

53) Хэдийд явах гэж байна? (N₂94)

いつ 出かける つもり です (か)。

什么时候 走 打算 有；(你) 打算什么时候走？

54) Маргааш номын санд очих гэж байна. (K163)

明日 図書館に 行く つもり だ。

明天 到图书馆 去 打算 有；明天(我) 想要到图书馆去。

55) Аа, би одоо очих гэж байсан юм. (Y129)

ああ、私 今 行く つもり だった のだ；

今行こうとしたところなんです。

阿，我 现在 去 打算 有过；我正要去呢。

56) Тэр мангас хүүхдийг идэх гэж байжээ. (Y129)

その 怪物 子供を 食べる つもり だった；

その化け物は子供を食べようとしていた。

那个 妖怪 小孩子 吃 打算 有过；那个妖怪打算把小孩子吃掉了。

5. 現代モンゴル語「VP+бай-х」構文の意味と機能

以上，モンゴル語の「VP(動詞述語文)+бай-х」構文について見てきたが，この構文が表す重要な文法機能を帰納することができる。それは，各テンス（時制）におけるさまざまなアスペクトを表している点である。「VP+бай-х」構文を更に詳しく図式化すると次のように表すことが

できる。

「V-（接尾辞 A）+бай-（接尾辞 B）」

ここでの V は動詞語幹を表している。接尾辞 A ではアスペクトの種類（進行・持続相，完了相，将来相等）を表し，接尾辞 B でテンス（現在，過去，未来）を表している。すなわち，この形式「V-（接尾辞 A）+бай-（接尾辞 B）」で各テンスにおける各種のアスペクトを表していると言える。

6. おわりに

現代モンゴル語の「VP（動詞述語文）+бай-x」構文が表す文法機能の一つに「各テンスにおけるアスペクト性」が指摘できた。ではこれらの機能と浅井 2015 で指摘した「言語主体位相の叙述」とはどのような関連性があるのだろうか。

本稿では触れられなかったが，実はチベット語の「VP（動詞述語文）+存在動詞」構文とアスペクトとの関わりについてはすでに論じられている。今回は，これらチベット語の表現と比較しつつ，モンゴル語の「VP（動詞述語文）+бай-x」構文と「言語主体位相の叙述」の関わりについて考察していきたい。また，同時に『(旧本) 老乞大』における「VP+有」構文のアスペクト性についても検討していきたい。

《注》

- (1) 浅井 2014/2015 では байна と記述したが，本稿では байна とその変化形式をすべてこの辞書形である байх で代表させることにする。
- (2) ここで構文を 3 種に分けて論じるのは，あくまでも便宜上であり，形態的特徴からではない。むしろ意味上は，構文 1～7「動作の進行・結果の状態」

と、構文 8～9「希望・推量および確実に起こる未来」の二つに分けることが可能である。構文 1 の出現数が際立っている（全体の 60%を占めている）ことから、ここでは構文 1 を独立させて論じる。

- (3) この疑問形式も байна 文に含めている。
- (4) 伊地智善継 2002 に「動詞・形容詞＋“着（点儿）”の形で命令文に用い、相手に対して現在の状態のままでいるよう要求する」とある。
- (5) 金岡秀朗 2009 (p. 125) 参照。
- (6) 温品廉三 2006 (p. 95) 参照。
- (7) 金岡秀朗 2009 (p. 125) 参照；例文はある物語で貴族が来客にいうセリフとある。
- (8) 金岡秀朗 2009 (p. 108) 参照。
- (9) 金岡秀朗 2009 (p. 57) 参照。
- (10) 金岡秀朗 2009 (p. 178) 参照。
- (11) 金岡秀朗 2009 (p. 54) 参照。
- (12) 山越康裕 2012 (p. 146) 参照。
- (13) 温品廉三 2006 (p. 95) 参照。

使用テキスト ※引用例文の記号・番号 ex (Y56) は使用テキストとページ数を表す
N₁: 温品廉三 2009 『モンゴル語のしくみ』三修社
N₂: 温品廉三 2006 『ゼロから話せるモンゴル語』三修社
H: 橋本勝 2010 『ニューエクスプレス モンゴル語』白水社
Y: 山越康裕 2012 『詳しくわかるモンゴル語文法』白水社
K: 金岡秀朗 2009 『実用リアル・モンゴル語 ― わかりやすい文法ナビ』明石書店

参考文献

- 浅井澄民 2014; 『(旧本) 老乞大』句末の“有”とチベット語の句末助動詞 ཡོད་པོ་འདྲི་ཐུ་ の類似性 ― 存在動詞の文法化と言語主体位相の叙述」拓殖大学語学研究 130。
- 浅井澄民 2015; 『(旧本) 老乞大』句末の“有”と現代モンゴル語句末助動詞 “байна” の類似性 I ― 存在動詞の文法化と言語主体位相の叙述」拓殖大学語学研究 132。
- 伊地智善継 2002; 『白水社中国語辞典』白水社。
- 小沢重男 1986/1994; 『増補モンゴル語四週間』大学書林。
- 1997; 『蒙古語文語文法講義』大学書林。

- 金岡秀朗 2000/2012；『モンゴルを知るための 65 章 [第二版]』明石書店。
- 金文京他 2002；『老乞大—朝鮮中世の中国語会話読本』東洋文庫 699，平凡社。
- 塩谷茂樹・E プレブジャブ 2001；『初級モンゴル語』大学書林。
- 塩谷・中嶋 2011；塩谷茂樹・中嶋善輝『モンゴル語——大阪大学世界言語研究センター 世界の言語シリーズ 3』大阪大学出版会。
- 橋本勝 2012；『ニューエクスプレス モンゴル語単語集』白水社。
- フフバートル 1993/1997；『モンゴル語基礎文法』インターブックス。
- 山口瑞鳳 2002；『概説チベット語文語文典』春秋社。
- 《新蒙汉词典》编委会 2011；『新蒙汉词典』商务印书馆。

（原稿受付 2015 年 10 月 1 日）

〈論文〉

日本語学習者のための 工学系専門用語の発音指導

— 中国語母語話者における縦断的研究 —

木 村 政 康

要 旨

工学系専門用語には漢字だけでなく、カタカナ、数字などが混在する音韻構造の複雑な語彙が多くあり、日本語学習者にとり正しい聴き取り、生成の妨げとなっている。本稿は、本学工学研究科の中国人留学生に対して行った工学系専門用語の VT 法による発音指導の実際をまとめたもので、指導・矯正を通して観察、考察した結果、以下の点が明らかとなった。

- ・工学系留学生に対する音声指導法、手順は、基本的には文系留学生に対するものと違いはなく、VT 法が主張するプロソディの指導を優先させ、次に単音の指導に移行させるという考え方は有効である。
- ・リズムの指導には、フットではなく、話速を考慮したリズムグループという単位を導入することが有効であることが、指導・矯正を通して実証された。
- ・被験者の発音上の誤りには中国語の母語干渉が見られる。その誤りは個別に存在するのではなく、それぞれの音声要素が有機的に影響し合い、誤りの特徴を際立たせていると考えられる。
- ・振動器を用いて発音が劇的に変化する場面が多く見られた。音声を身体に直接伝達するというのは理にかなっている。
- ・リズムグループは、意味的に、或いは文法的に区切られるとは限らないということが、指導・矯正を通して実証された。これは、リズム単位をバランスよく配分させてリズム構造をまとめていこうとするサーボ機構が働いたことを意味し、リズム単位をどこに設定するかが発音指導の鍵となる。

キーワード：リズム単位、振動器、わらべうたリズム、身体リズム運動、緊張度

0. はじめに

日本語教育の現場において、発音教指導・矯正は、日本語の授業内の一部として実施されるのが一般的である。本学においても、各学部 of 日本語担当の先生方が、拍感覚、アクセント、無声／有声の弁別など、その都度必要に応じて行っているようである。

学部留学生は、3年生に進級するとほとんどが専門科目を履修することになり、専門教科を日本語で聴き取りノートをとる聴解力、レポート作成のための作文力、日本語によるディベートや発表におけるスピーチ力など、より高度な日本語のスキルが要求されるようになる。こういった日本語運用能力の基礎となるのは、やはり聴き取る力、話す力であり、とりわけ発音教育の重要性は言うまでもないであろう。筆者は、2013年5月～同年12月にかけての計16回、本学工学研究科の留学生に発音指導を行ったが、本稿は、指導期間中の活動記録をまとめたものである。

工学研究科の留学生の中には、専門分野では優秀な成績を修めているにも関わらず、発音に多々問題があり、口頭発表では、聴き手が発表内容をよく理解出来ない、また講義中における質疑応答に支障をきたす者がいるといった話を、工学研究科の指導教員の先生から伺った。こういった発音の問題は、就職活動期に入る学部4年生、他研究科の院生にも大なり小なり同様の傾向として見られるが、工学研究科の講義では、専門性の高い工学系用語が多く使われるだけでなく、その中に漢字、カタカナ、数字、数式などが混在するものもある。そのため、語彙の音韻構造が複雑化して、正しい発音の習得が妨げられ、母語干渉による、いわゆる化石化が起きてしまうのである。

学生の修士論文中間報告会及び修士論文発表会（言語教育研究科の修士論文最終口述試験に相当する）、会社面接などが控えていることもあり、

限られた時間ではあるが、発音指導を引き受けることにした。これが発音指導に至った経緯である。

本稿は、被験者 1 名を対象にした縦断的研究調査であり、結果を一般化することはできないが、指導を通して、学生の発音がどのように改善されて行くのか、リズム単位としてフット⁽¹⁾は音声指導に有効か、或いはリズムグループ⁽²⁾という考え方が実践的な単位なのか、また、対照言語学で明らかにされてきた母語干渉に新たな発見があるのかについて、VT 法⁽³⁾による実践指導・矯正を通して考察していく。

1. 被験者

管見によれば、工学系専門用語の発音指導に関する先行研究は見当たらない。筆者が試行錯誤の上、指導方法、指導手順など準備を進めることとなった。まず、被験者の日本語歴、日本語運用能力、発音指導の手順、方法、内容から述べることにする。

1.1. 言語的背景

被験者は、年齢 27 歳（2013 年当時）、中国語母語話者で日本語歴は、来日前に半年間、その後、日本語学校で 1 年間、拓殖大学学部では週 3 時間、大学院では週 5 時間であり、日本語の学習歴は長いが、指導初日に行ったインタビューでは、特殊拍（促音拍、長音拍、撥音拍）、イントネーション、アクセントといった、いわゆる「日本語らしさ」に関わるプロソディ、また無声子音／有声音の弁別に問題がみられた。被験者には、問題ある自己の日本語の発音を矯正して、会社面接や修士論文発表会に臨みたいという高いモチベーションがあり、このような動機付けが発音指導・矯正に効果的に働くのではないかと考える。

1.2. 指導手順

発音指導は、2013年5月ゴールデンウィーク明けから同年12月初旬まで、夏休みを挟んで前期、後期に2分割し行った。筆者は、現在までの発音指導経験から、工学系留学生においても文系留学生においても、日本語の発音指導法、指導手順に関して大きな違いはないと考え、以下の要領で発音指導・矯正を実施した。

前期は、日本語らしさを獲得し定着させること、すなわち、特殊拍、等時拍、イントネーション、語アクセントなどプロソディの指導を中心に、後期は、前期で定着を図ったプロソディの復習練習を交えながら、専門用語の発音指導・矯正を行った。最終段階では、修士論文レジュメの読み練習を行うと共に、レジュメに含まれる指導対象外の用語についても発音練習を行い、一連の指導を終了した。

指導回数および指導時間は、5月～7月が8回、9月～12月が8回、各回45分～60分であった。修士論文発表会用のレジュメから抜き出した専門用語（フレーズを含む）23項目を指導対象としたが、必要に応じて専門用語を挿入した短文の練習も行った。

前期では最初の2回と前期定期試験前の2回、そして後期では全回筆者が発音指導を行ったが、それ以外、すなわち前期4回は、本学言語教育研究科博士後期課程修了者、中野二郎氏に指導を任せ、筆者はモニタリングするという形式をとった。その都度、指導方法・技術などを指示し、VT法の指導者育成という側面も兼ねることにした。夏休みはCD-Rに焼き付けた課題の音声データとプリント、指導期間中に休んだ場合は、課題をプリントして自習するよう指示した。

1.3. 指導方法

筆者は、VT法による発音指導を教育現場に取り入れその効果を実感し

ており、今回の工学研究科の留学生に対しても、VT 法を用いた発音指導を実践していくことにした。

指導方法は、指導項目、改善状況などにより、わらべうたリズム⁽⁴⁾を中心に、振動器⁽⁵⁾と身体リズム運動⁽⁶⁾を組み合わせを行い、専門用語の指導・矯正では、電子フィルター SUVAG 機器⁽⁷⁾を加えて指導にあたった。発音指導で用いる動きに関しては、手狭な研究室ということもあり、腕や手の動きのみを使い座ったままで行った。

2. 発音指導にむけて

VT 法が主張する「プロソディの指導を優先させる」という考えから、まず、リズム、続いてイントネーション、そして語アクセントの順に実施し、無声音／有声音の弁別や他の単音の指導に関しては、その都度適宜に行った。どのような指導方法を用いるのかについては被験者との適合性を考慮するとともに、また、リズム単位をどのように設定するかについても考察することにする。なお、全ての活動を紹介するには紙面が足りないため、いくつかにまとめて紹介したい。

2.1. 被験者と指導法の適合性

指導初日は、筆者、TA として参加した中野氏、そして被験者との 3 名がお互いの自己紹介を行った。また、被験者の修士論文の概要、会社面接についても質問し、その会話の中で見られた被験者の発音の問題点を観察し、発音指導・矯正の手順、方法の参考とした。

長年、VT 法を発音指導に導入して見えてくるのは、学習者により、指導法に対する得手不得手、好みがそれぞれあるということである。指導法の種類に関わらず、短期間で学習者の精神的緊張を和らげ、自発性と積極性を引き出すことが指導を効果的に実施する鍵であることは言うまでもな

い。音楽好きでリズム感のいい者はわらべうたリズムが適しているであろうし、積極的で体を動かすことに抵抗感を持たない者は身体リズムが適しているようである。そのどちらでもなく、体を動かすのが苦手な学習者はSUVAG 機器か振動器が適している。SUVAG 機器は、個々の音の最も聴き取りやすい周波数を選定し、直接聴覚に介入して聴き取り方を最適な方向へ導くもので、機器に繋がれたヘッドホンを装着し聴き取りに集中させる方法である。また、手に持って振動を体感できる振動器は、SUVAG と同様、いわば受け身的方法であるが、聴き取るのとほとんど同時に音声フィードバックでき、学習者の抵抗感もない。

今回の被験者は、VT 法による指導を受けるのは初めてであり、指導法に不慣れであること、初日で精神的に緊張していることも考えられた。そこで、機器使用に際しての精神的圧迫感がなく、リズムや聴取・生成、無声音／有声音の弁別に効果が期待できる振動器の使用から試みた。

振動器を手の平に持たせ、筆者がマイクを通して発音する特殊拍を含むリズム文「河童の歌」（谷川俊太郎）、創作わらべうたリズム「困った困った困ったな、困った遅れて困ったな」を振動で体感させ、繰り返し発音してもらった。「河童かっぱらった」、「困った困った困ったな」に含まれる促音の特徴が体感できたよう発音全体も改善された。ただし、振動器を介さずに練習すると再度誤りが見られたため、振動器と身体リズム運動を併用した。その結果、提示文に関しては定着度が増した。

2.2. インタビューにおける発話音の観察

発音指導に先立ち、被験者が就職を予定している会社の社長面談の内容、被験者の出身地、趣味などについてインタビュー形式で質問を行い、被験者の会話力、発音のスキルを調べることにした。質問文、回答文と、そこに見いだされた音声上の問題点は以下の通りである。

○「昨日の面接はどうでしたか」→「昨日の面接は長かったです」

「ながかった」では「ながかた」のように促音の脱落が見られた。

○「どのくらいかかりましたか」→「1 時間半かかりました」:

「イチジカン」(以後、発音に関する場合はカタカナ表記とする)は問題なく発音できるが、「イチジカンハン」のように撥音が2 度続くと、撥音拍は両方とも短くなる傾向が見られた。

○「どんな話をしました」→「人事課の人たちが来て、基本的な質問をしました。また、中国で同じ仕事をしている人材について訊かれました」:
撥音「ン」の持続時間が短くなった。

○「好きなスポーツは何ですか」→「サッカーが好きです。高校の時、サッカーをやっていました。今は見るだけです。」:

「こうこう」では最終拍の長音が、「サッカー」では「サカー」のように促音がそれぞれ脱落し、「カー」の長音の長さも不十分であった。「サッカー」は中国語においても外来語であり、「足蹴」(拼音で zúqiú) と書くが、この中国語音が少なからず影響していると思われる。アクセントに関しては、特に問題は見られなかった。

○「趣味は何ですか」→「趣味はビリヤードと中華料理です」「ビリヤードは中学校の時からやっています」:

「ビリヤード」では「ビリヤド」のように長音が脱落した。リズム構造のバランスからすれば、「ビリ | ヤド」のように2 拍・2 拍にした方が発音しやすいからであろう。やはり中国語音の干渉が見られる「チューカリョーリ」では、「チューカリョリ」のように2 つ目の長音が脱落した。構造の安定化から考えると、長音拍が均等に配分され比較的生成しやすいはずであるが、最初の長音拍に注意が向いてしまい、2 つ目の長音を発音するまでのエネルギーが持続しなかったと思われる。

○「中華料理は何を作りますか」→「中華料理は、マーボー豆腐を作ります」:

「マーボー」では「マーボ」のように2つ目の長音が、「トーフ」では「トフ」のように長音が脱落した。

以上観察した通り、被験者にも中国語母語話者に見られる促音拍、長音拍生成の問題が顕著に現れている。

2.3. リズム単位

筆者は「言語リズムとは、音連続において、聞こえの頂点がそれぞれ等時的に繰り返す、その時間的間隔」であると、また「その時間的間隔の繰り返しにリズムがあると感じ、生理的な心地良さを覚える」と考えている。

リズムの定義は様々にされてきているが、リズムの単位をどこに設定すれば、リズムの指導に直接結びついて行くのだろうか。日本語のリズムの最小単位を拍と捉えた場合、例えば、「こんにちは」は「コ | ン | ニ | チ | ハ」と5拍であり、音節という観点から見れば、「コン | ニ | チ | ハ」と4音節である。日本語学習者が「コニチハ」のように撥音拍「ン」を脱落させて発音してしまう誤りは、等時性という拍感覚が欠如しているためであり、音節という考えでは指導に際しての説明としては不十分である。

「コンニチハ」は5つの拍から成り立っているが、5拍という捉え方をそのまま発音指導に取り入れても、正しいリズムが定着するとは限らない。実際の発話、特にノーマルスピードでは、「コ・ン・ニ・チ・ハ」とはっきり区切って発音することはないのである。

1980年代後半から、日本語音韻論においても、フットという単位が知られるようになり、日本語のリズムは、2拍（2モーラ）を基本的なまとまりとする1フットであるという考えが一般化してきている。この考え方は、日本語では韻律的に2モーラでまとめることが非常に多いという事実を反映していると言えよう。「こんにちは」は「コン | ニチ | ハ#」（#は1拍分の休みと捉える）で3フットであり、「おはよう」は「オハ | ヨー」で2フットである。言葉を省略する場合も、「拓殖大学」は「拓大」、すな

わち「タク | ダイ」のように省略し、4 拍 2 フットになる。「ファミリーレストラン」も「ファミレス」のように省略し、4 拍 2 フットになる。このように、フットは日本語のリズムや語形成と密接に関連していると思われる。

それでは、長い語彙、フレーズにおいて、フットはリズムの知覚という観点からすると、リズム単位として有効なのだろうか。例えば、「拓殖大学」は「タク | ショク | ダイ | ガク」のように 4 フットになる。しかし、実際の発話では、むしろ「タクショク | ダイガク」のように 4 拍と 4 拍との二つに分割した方が合理的である。また、速く発音すれば、「タクショクダイガク」のように 8 拍で一つのまとまりとして知覚され分割されない。

また、リズムの切れ目は、必ずしも意味の切れ目と同じであるとは限らない。例えば、「東南アジア諸国連盟」という語は、意味的には「東南アジア諸国／連盟」であるが、実際に発音してみると違和感を覚えるはずである。リズム単位、切れ目という観点からすれば、東南アジア／諸国連盟となり、7 拍目で 2 分割し区切って発音するのが自然である。拍数の多い音連続を幾つかのリズムグループに分割する基準は、必ずしも意味的切れ目ではなく、リズムグループの構造全体における拍（又はフット）の配置バランスが大きなウェイトを占められる。リズムの単位をリズムグループ、フット、拍のどれで捉えるかは、発話におけるテンポが大きく関わっているのではないだろうか。すなわち、リズム単位とテンポには一種の相関関係が存在しているということである。本稿では、このリズムグループという考え方、リズム単位とテンポとの相関関係を考慮した発音指導を試み、指導・矯正への有効性を検証していく。

3. 発音指導の実際

本章では、リズム、長音、イントネーション、語アクセントの指導を中

心に述べていく。その他、撥音⁽⁸⁾、無声音／有声音⁽⁹⁾の発音指導も行ったが、指導・矯正の優先順位、紙面の関係などから本稿の対象項目から外した。

3.1. リズムの指導

リズムは、音声言語全体を一つにまとめる役割を担う音声要素である。無声音／有声音の弁別、個別音の音声特徴の習得も重要な課題であるが、音声言語の根源であるという考えから、まずリズムの指導・矯正から始めることにした。指導項目は、特殊拍の促音拍「ッ」、長音拍「ー」、撥音拍「ン」（指導内容に関しては割愛）を中心に、拍の等時性を考慮して指導に向けた。また、適宜、問題が見られた時にのみ、無声子音／有声子音の弁別練習も行った。指導方法は、リズムが言語音の記憶に関わっているという考えに基づき、わらべうたリズムを利用して、リズムパターンの適切な聴取・生成の定着を図ることにした。わらべうたリズムを中心とする指導は、前期の7月までであるが、後期においても専門用語の指導・矯正と平行して、適宜、リズム定着のためのフォローアップとした。

わらべうたリズムを導入するにあたり、指導を迅速に効果的に進めるために、振動器を利用して、ログトム（無意味音節）[ta]「タ」をリズムに乗せて繰り返し、目標とするリズムを誘導した。同じ音の音節を繰り返せば、個々の音や言葉の意味を気にすることなくリズムに注意が向くという考えで作り出した指導法である。例えば、「かわった」は「タタッタ」、「こんにちば」は「タンタタタ」、「がっこう」は「タッター」、「りゅうがくせい」は「タータタター」のようなログトムに変えて練習する方法である。

両唇破裂音 [p] で始まる「パ」を連続して発音するには高い緊張度を持続させなければならず、例えば「かわった」を「パパッパ」に変えて練習すると、両唇の疲労度が増してしまい、発声と調音運動が同期しない。また「りゅうがくせい」を両唇鼻音 [m] で始まる「マ」を用いると「マー

マママー」になり、明瞭度が落ちてリズムの切れ目が分かりづらく、テンポよくリズムを刻むことは難しい。

それに対して、[ta] は何度も唇を開閉させる必要がなく、速いテンポにも対応できリズムを刻みやすい。母音 [a] を組み合わせるのは、調音器官を緊張させることもなく自然に発音できるからである。

3.1.1. 促音の指導

促音の指導には谷川俊太郎の「河童の歌」（下記参照）を学習課題とし、それに創作わらべうたを平行させた。このわらべうたは、学部留学生の日本語の授業（2014 年度まで実施）において、また、言語教育研究科の「発音指導法」の授業において実践指導しているものである。緊張度の高い促音を含む「タッタ」のパターンが規則正しく何度も繰り返されており、指導・矯正だけでなく、学習者の発音の定着度、評価にも利用することができる。以下に詩文を示し、指導手順、音声上の誤り、実際の発音指導について述べることにする。なお、「#」は休止を表すこととする。

「河童の歌」：

かっぱ | かっぱ | らった | かっぱ | ラッパ | かっぱ | らった |

とって | ちって | た #

かっぱ | なっぱ | かった | かっぱ | なっぱ | いっぱ | かった |

かって | きって | くった #

指導に際して、1 行目は「カッパカッパラッタ | カッパラッパカッパラッタ | トッテチッテタ」のように 3 分割し、2 行目も「カッパナッパカッタ | カッパナッパイッパカッタ | カッテキッテクッタ」のように 3 分割して、それぞれ行ごとに練習しリズムの定着を図った。

練習を通して見えてきたのは、「カッパカッパラッタ」の後半部「ラッ

タ」の促音が「ラタ」のように脱落する、語頭の「カッパ」が「カーパ」のように長音化するといった傾向である。また、2行目でも語頭の「カッパ」が「カーパ」、文中の「ナッパ」が「ナーパ」のように長音化する、最終句の「カッテキッテクッタ」が「カテキテクタ」又は「カッテキテクッタ」「カッテキッテクタ」のように促音が脱落する、といった傾向が見られた。促音の脱落は調音時の緊張不足が原因であり、「カーパ」のように長音化するのも緊張度の不足が原因である。また、文末で促音が脱落するのは、文末では呼気が弱くなり、結果的に調音の緊張度も低くなる生理的な理由によるものであると考えられる。

振動器を用いて「|」で区切ったリズムグループごとに練習し、1行目が終わった後は、2行目の指導を行い、最終的には、1行目、2行目を続けて練習し定着を図った。最後は、振動器を使わずに、タクトを振るような動作でリズム取りをしながら発音させた。定着度を見るため、振動器を使用しない練習に移ったが、促音の脱落が見られたので、再度、振動器を使いフィードバックさせた。

促音の指導では、「河童の歌」以外に、創作わらべうたも使用したが、紙面の関係で、本稿ではいくつか紹介するに留めたい。休止「#」までの各リズムグループ毎に、1行目を通して練習し、続いて2行目も同様に行い、最後は全体を通して練習した。誤りの傾向も、「河童の歌」と同様に、促音の脱落が見られたため、素早く拳を作る動作をさせながら、振動器を併用して定着を図った。なお、以下に示すわらべうたは、自習、復習用として課したものである。

○促音が3拍目にある「タタッタ」のパターン：

おわった|おわった|おわったよ#|おわった|しけんが|おわったよ#

○促音が2拍と4拍目にある「タッタッタ」のパターン：

かっちゃった#|かっちゃった#|テレビに|パソコン|かっちゃった#

○促音が4拍目にある「タタタッタ」のパターン：

たべたって# | たべたって# | ごはんを | さんばい | たべたって#

○促音が2拍目にある「タッタタタ」のパターン：

ほっとした# | ほっとした# | しけんに | ごうかく | ほっとした#

○促音が3拍目と5拍目にある「タタタッタ」のパターン：

はしったって# | はしったって# | えきまで | いそいで | はしたって#

なお、「タタタッタ」は、促音を含む語の中では、最も習得の難しいリズムパターンの一つであり、「タタタッタ」になる傾向が見られた。

3.1.2. 長音の指導

長音は促音と比べると調音時の緊張度は低いが、2拍分の長さを持続する緊張度を有するのが特徴であり、この緊張度を体感させることが重要である。今回は、「河童の歌」と同様、大学院の発音指導において使用している創作わらべうた「寝坊学生」を用いて指導に当たった。わらべうた文は以下の通りである。

「寝坊学生」（長音リズムのための創作わらべうた）：

がくせい | がくせい | りゅうがくせい#

べんきょう | バイトに | いそがしい#

ねぼうで | ちこくだ | さあたいへん#

きょうしつ | へんこう | どうしょう#

エーかん | ビーかん | どこだろう#

とうとう | みつけた | きょうしつで#

ノートも | とらずに | グーグーグー#

せんせい | しつもん | ノーアンサー#

上記の通り「|」で区切ったリズムグループ毎に、腕を体前から体側に流すような動きでリズム取りをして各行毎に練習した。問題になった箇所は、2行目の「いそがしい」が「イソガーシ」、3行目の「ねぼうで」が「ネーボデ」、5行目の「どこだろう」が「ドコダーロ」のように、長音拍の位置が前後にずれてしまうことである。「イソガーシ」「ドコダーロ」は、「がくせい」「りゅうがくせい」「べんきょう」など4拍目に長音の来る言葉が続き、長音を4拍目に置いてしまうリズム感覚が身についてしまったためと思われる。また、「ネーボデ」は、句頭の高い緊張度の影響で母音が伸びたためと考えられる。語頭は緊張度が高いという傾向は「タッタタ」が「タタッタ」のリズムパターンより生成しやすいという現象と共通している。

長音指導では、以下のようなわらべうたを身体リズム運動、振動器を用いて、同様の手順で行ったが、紙面の関係で創作わらべうたの例を挙げるに留めたい。

○長音が2拍目と4拍目にある「タータータ」のパターン：

とうきょうと# | とうきょうと# | はねだも | たかおも | とうきょうと#

○長音が2拍目にある「タータタタ」のパターン：

しょうせつか# | しょうせつか# | むらかみ | みしまも | しょうせつか#

○長音が2拍目と5拍目にある「タータター」のパターン：

こうじちゅう# | こうじちゅう# | まちじゅう | あちこち | こうじちゅう#

○長音が5拍目（最終拍）にある「タタタター」のパターン：

こどもよう# | こどもよう# | ちいさい | このいす | こどもよう#

○長音が3拍目にある「タタータタ」のパターン：

していせき# | じゅうせき# | やっぱり | わたしは | していせき#

○長音が4拍目にある「タタタター」のパターン：

がくせい# | がくせい# | ふんしつ | とどけは | がくせい#

「河童の歌」,「寝坊学生」は,後期においても毎回ではないが,練習冒頭にリズムを取らせながら暗唱させた。自由発話において完全に定着したとは言いがたいが,一旦教師が指摘すれば,比較的スムーズにフィードバックし,自己矯正できるようになった。これは,振動器を併用してリズムを体感するという,聴覚以外の感覚を利用したことも有効に働いたからであろう。

3.1.3. 対話形式のわらべうた

リズム指導の最終段階として,促音,長音のわらべうたを対話という形で交互に練習した。また,指導項目の促音,長音を含む言葉を会話文に取り入れ定着度を確認した。例として「焼き肉」(仮称)を紹介し簡単に解説することにする。

- A. おいしそう# | おいしそう# | やきにく | やけるよ | おいしそう#
 B. おいしかったよ# | おいしかったよ# | カルビ | ロース |
 うまく | やけて | おいしかったよ#

A 文は長音指導を前提に,焼き肉を食べる前の話として作成したもので, B 文は促音指導を前提に,焼き肉を食べた感想を内容として作成したものである。長音を中心とした A 文と促音を中心とした B 文を交互に連続して発音させ,リズムパターンの異なる文を瞬時に言い換えられるようにする練習である。この練習でも,振動器を併用している。

生成音の問題点を観察すると, A 文では,「オイシソー」が「オイシーソ」のように長音拍の位置が前にずれる傾向があるため,最終拍が長音になるように矯正した。また,「～シソー」の「シ」で無声化母音が聴き取れないためか,「オイソー」のように「シ」を省略する傾向も見られた。B 文では「カルビ | ロース | ウマク | ヤケテ」は,休止を挟まず続けて発音

するのでテンポが速くなり、リズム取りが難しかったようだ。

次第に、リズム取りの動きと発音が同期するようになり、テンポも速くなった。最後に、以下のような対話形式で定着度を確認した。

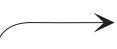
- A. 食道園の焼き肉どうだった？
B. カルビもロースも、おいしかったよ。

3.2. イントネーションの指導

日本語らしさの音声的特徴として、リズムと並び重要な要素はイントネーションであろう。イントネーションはアクセントのような語境界の弁別や意味弁別機能は持たないが、喜怒哀楽などの情緒性を伝える役割を持っており、意思疎通を円滑に行う上でなくてはならない音声要素である。また、読解の授業で文章に情緒性イントネーションを入れて読むと、内容の理解度が上がるという報告もある。指導項目としては、まず、日本語イントネーションの6パターン（木村 2002）を導入し、定着させることである。

イントネーションの指導・矯正、定着には、身体リズム運動を用いる。腕を体前から外側に向けて、指導項目の文を発音しながら、下記の例で示すように、それぞれのパターンに従って軌跡をなぞっていく。

日本語イントネーションの6パターン（VTS 入門 2002）

パターン	例文と動きの軌跡	パターン	例文と動きの軌跡
下降①型	 きょうとです	上昇①型	 いくらですか？
下降②型	 しんかんせんです	上昇②型	 おいくらですか？
平板型	 これからいく	平板上昇型	 まけてくれる？

前項に示したイントネーションパターンに従い、以下のような文を提示し指導・矯正した。

1. 下降①型：本を読んだ。雨が降っています。

○「ホンヲヨンダ」：

まず、「ホンヲ | ヨンダ」のように2分割して練習し、次に一つにして練習を行った。「ン」で握り拳を作り「ン」を同時に発音して撥音を定着させる。次にノーマルスピードで一氣に腕を下げると同時に発音する。「ヨン」が「ヨーン」のように長音化し、同時に母音 [o] も鼻母音化したため、撥音「ン」が弛緩する傾向が見られた。振動器を使い、素早く握り拳を作りながら発音させると緊張度が上がり改善された。

○「アメガフッテイマス」：

「アメガ | フッテイマス」のように2分割して練習し、次に分けず一つにして発音させた。下降①型なので腕を斜め下に下げていく動作を併用してイントネーションパターンを維持した。「フッテ」では促音を正確に発音させるために、発音と同時に握り拳を作り発音させた。

2. 下降②型（山型）：教科書を読みます。もうすぐお昼です。

○「キョーカショヲヨミマス」：

「キョーカ | ショヲ | ヨミマス」のように2分割して練習し、次に一つにして山型の身振りをういながら練習を行った。「キョーカ | ショヲ」のように長音化する傾向があったので、小さく速い動きで矯正した。

○「モウスグオヒルデス」：

まず、「モウス | グ | オヒルデス」のように2分割して練習し、次に一つにまとめ、山型カーブの身振りと同時に一氣に発音させたが、特

に問題は見られなかった。

3. 平板型：中央線で新宿に行った。

○「チューオーセンデシンジュクニイッタ」：

「チューオーセンデ | シンジュクニイッタ」に2分割して練習し、次に一つにまとめて、一気に一文をイントネーションカーブの身振りと共に発音させた。イントネーション生成には問題は見られなかったが、「イッタ」の促音が脱落して直音化したため、素早く拳を作ると同時に発音させ、促音拍の緊張度を高める指導を行った。

4. 上昇①型：本はどこにありますか？ 雨が降っていますね。

○「ホンハドコニアリマスカ」：

「ホンハ | ドコニアリマスカ」に2分割して練習し、次に一つにまとめ上昇①型の身振りと共に発音させたが、イントネーションも単音も問題なく発音できた。イントネーション生成が不安定な場合は、「ホンハ | ドコニ | アリマスカ」のように2つの下降型と1つの上昇②型にするか、「ホンハドコニ | アリマスカ」のように分割位置を変えて、下降①型と上昇②型の2分割にして練習すると安定しやすい。

○「アメガフッテイマスネ」：

「アメガ | フッテイマスネ」のように2分割し、次に一つにまとめて身振りをういて一気に発音させたが、問題なく生成できた。

5. 上昇②型：日曜日、アルバイトはありますか？

○「ニチヨービアルバイトハアリマスカ」：

「ニチヨービ」は5拍語で後に休止があるので分割せず、一気に山型の下降2型の身振りを併用して練習したが、問題は見られなかった。「アルバイトハアリマスカ」は「アルバイトハ | アリマスカ」のように2分割し、次に一つにまとめて身振りと共に一気に発音させた。イントネーションの生成には問題はなかったが、「アルバイトハ」の「バイト」が3拍の等時拍にならず、連母音が速く発音されるため、

「アルバイトハ」全体のリズムバランスが崩れている。そこで、「バイ
バイ | バイト# | アルバイト# | アルバイトは | ありますか」のよう
にリズムに乗せて、ゆっくりした動きで矯正した。

6. 平板上昇型：地下鉄に乗る？友達と一緒に？

○「チカテツニノル」：

「チカテツニノル」は文が短いので分割せずに、一気に身振りと共に発音させた。特に問題はなかったが、「のる↗ のる↗ ちかてつ
にのる↗」のようなわらべうたを用いて文末の上昇を定着させることもできる。

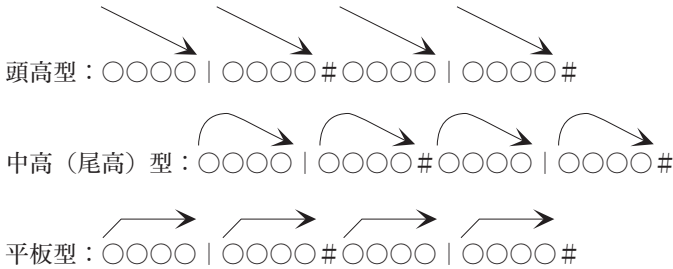
○「トモダチトイッショ」：

「トモダチト | イッショ」の2分割にし、次に一つにまとめて身振りと一緒に発音させた。「チ」でピッチが下がるので、横へ伸ばす平板型の動きを、上昇気味に誇張して発音させると改善された。「イッ
ショ」の促音が脱落する可能性もあるので、その場合は「いっしょ↗
| いっしょ↗# | ともだち | いっしょ↗」のようにリズムを繰り返すとよいであろう。

以上、イントネーションの指導を行い考察したが、ピッチの指導は身体リズム運動を利用して緊張度を体感させる方法が有効であった。

3.3. 語アクセントの指導・矯正

アクセントは、語境界、意味弁別機能と言った役割以外にも、イントネーションパターンを決定するのに重要な要素である。まず、各アクセント型に従いわらべうたを作成して練習を行った。その際、各パターンを誘導する動きの軌跡は次項の通りである。なお、○は拍を表し、4拍ひとまとまりの2拍子リズムを基本とするわらべうた文を作成する。



「**頭高型**」：「カミヤハ | トマトガ | ダイスキデ # | サトーハ | レタスガ
| ダイキライ」

上記のように前半，後半ともに3分割し，それぞれに頭高型を誘導する動きを併用して発音させた。「サトー」が「サットー」のように促音化，長音化が同時に起き，2拍+2拍のまとまりにしてリズムバランスを取ろうとする傾向が出た。頭高型アクセントは聴取・生成が比較的容易なためか問題はみられなかった。

「**中高型・尾高型**」：フクオカ | ナガサキ | チカクナル #
モースグ | ハシルヨ | シンカンセン #

「ナガサキ」は，本来下がるべき「サ」ではなく「キ」でピッチが下がったので，山型の動きは緩やかではなく，鋭角に下がる動きで「サ」で下がるよう指導した。1行目は全て2拍目で下がる中高型であり，記憶という観点から見れば，誤りは起きにくいはずである。偶然なのか理由があるのかは今のところ説明がつかない。今後の課題としたい。

「**平板型**」：シンジュク | カイモノ | トモダチト #

ケーオー | イセタン | タカシマヤ #

サンガイ | ヨンカイ | ナナカイト #

カウモノ | ナカナカ | ミツカラナイ #

ケッキョク | カワズニ | サヨーナラ #

「ナナカイト」のピッチが語末の「イ」で下がってしまう。中国語を母語とする日本語学習者は、最後まで平板型を維持するのが難しく、この傾向が被験者にも見られた。平板型の基本型である横へ平行に流す動きを、むしろ斜め上に向けて腕を伸ばすことで緊張度が高まり、平板型のアクセントが維持された。

3.4. 工学系専門用語の発音指導

筆者は工学系専門用語に不慣れなため、発音指導を実施する前に、専門用語の簡単な意味を調べ、同時に読み方を確認した。先に述べたように、今回対象とした工学系専門用語は全部で23語である。各用語の音声的特徴とリズムパターンにそれぞれ従い、被験者の発音の問題点を分析し指導・矯正を試みた。工学系専門用語の中には、漢字、カタカナ、数字などが混在するものも多く、音韻構造が複雑化し、音声的に一つのまとまりとして捉えるのは容易ではない。特に、特殊拍が入ると発音が乱れ、ポーズなしで1語として言い切るのは難しい。

発音指導に際しては、各専門用語を一度で記憶できる最長の単位に分け、そのリズムグループのリズムパターンとアクセント型を練習し定着させることを中心課題とした。前期で行ってきたリズムパターン、特殊拍、イントネーション、アクセント、無声／有声の弁別練習が、後期における専門用語の発音指導に役立っているかについても考察していきたい。指導法は、前期と同様、振動器とSUVAG機器を中心に、わらべうたリズムと身体リズムを併用したものである。

① 修士論文タイトル

修士論文のタイトルは、「弾性表面波を用いた超音波金属接合に関する研究」であり、流暢に「日本語らしく」発音するのは決して容易ではない。聴き手が論文タイトルを理解するには、どこに切れ目を入れるのか、どこ

に休止を入れて読むのが肝心であり、その点が発音指導上のポイントにもなる。意味の切れ目と息継ぎという生理的理由から、少なくとも「弾性表面波を用いた | 超音波金属接合に関する研究」のように2分割するのが一般的である。しかし、「弾性表面波を用いた」は「ダンサーヒーローメンハヨモチータ」となり14拍、「超音波金属接合に関する研究」は「チョーオンパキンゾクセツゴーニカンスルケンキュー」となり22拍もあり、各音やプロソディの特徴を的確な音声情報として瞬時に処理するのは容易ではない。

人間の脳が一度で正確に聴取できる音連続は10音節程度、3秒以内と言われている（友寄1988）。それも母語話者においてである。日本語学習者にとっては、このように長い音連続を一度に聴取、生成するのは困難である。日本語母語話者であれば、「ダンサーヒーローメンハヨモチータ | チョーオンパキンゾクセツゴー | ニカンスルケンキュー」の3分割にして理解するであろう。

また、意味的、文法的に区切ると確かに「セツゴーニ」のように助詞「ニ」を含めて一つのリズムグループとなるが、実際の指導に際しては、リズム全体のバランスを考えると、むしろ、助詞「ニ」は、後半の「カンスルケンキュー」に含み、「ニカンスルケンキュー」とした方が、少なくとも、今回の指導では効率よく指導できたのである。

日本語学習者にとり、リズム・イントネーションの総体的特徴を崩さないという条件をクリアできる長さは、アクセント型やイントネーションを考慮すると、「ダンサーヒーローメンハ | ヨモチータ」（又は「ダンサーヒーローメンハヨ | モチータ」）の2分割、「チョーオンパ | キンゾクセツゴーニ | カンスルケンキュー」（又は「チョーオンパ | キンゾクセツゴー | ニカンスルケンキュー」）の3分割にそれぞれ分けて指導するのが合理的である。

学習者の発音を観察すると、「ヒーローメンハ」、「チョーオンパ」の撥音「ン」がそれぞれ短くなり、「オンパ」が「オンバー」のように[p]が有

声化 [b] し、母音 [a] が長音化する傾向が見られた。

「弾性表面波を用いた超音波金属接合に関する研究」のイントネーションは、山型が繰り返されるパターンが特徴である。修士論文中間発表会、口頭試問において意味内容が正しく理解されることが前提である。そのためには、「弾性表面波」→「弾性表面波を用いた」→次に、「金属接合」の練習に移り、最終的には、「弾性表面波を用いた | 金属接合」のように、二つのリズムグループに分けて練習を行った。この過程で、前述の問題点は改善され、各語彙、フレーズも日本語らしく発音できるようになった。

② 「基板間」(きばんかん)

指導上のポイントは、平板型アクセント、撥音拍を含む「タ | タン | タン」のリズムパターンを定着させることである。後半で「タン」を2回繰り返す安定したリズム構造のためか、リズム、アクセントともに誤りは見られなかった。若干であるが「カン」の発音に中国語音声の干渉が見受けられたため、握り拳を作る動作と同時に「カン」と発音させ矯正した。

③ 「突起状」(とっきじょう)

指導上のポイントは、平板型アクセント、促音拍と長音拍が混在した「タッ | タ | ター」のリズムパターンの定着であるが、「タッタ | ター」の2分割に分けて指導した。初めは促音が欠落して「トキジョー」になったが、アクセントの誤りは見られなかった。促音部の適切な発音を誘導するために、素早く拳を作ると同時に「トッキ」と発音する。次に、「トッキ | トッキ | トッキジョー」とリズムに乗せて練習を行った。リズムを体感させるために、腕を体側から横方向に伸ばすと同時に「ジョー」と発音させた。これにより促音、長音両方の拍を的確に発音させることができた。

④ 「フリップチップ」

中国語母語話者の日本語学習に共通してみられる傾向として、カタカナ語の聴取・生成が苦手なことである。漢字熟語に関しては、実際には、中国語と日本語の音韻構造が異なるため、正確な聴取・生成は決して容易では

ないが、漢字音からの類推ができるため、音声上の手がかりとなる。

指導上のポイントは、中高型アクセント、促音拍が2カ所ある「タ | タッタ | タッタ」のリズムパターンである。意味的にも対応する「フリップ | チップ」のように分け、「フリップ」、「チップ」を別々に指導するとほとんど問題なく生成できたが、一つにして発音させると、「フリースチープ」「フリースチップ」「フリプチープ」のように、促音の欠落、促音の長音化が起きた。「フリップ」が「フリップチップ」において正しく生成されなかったのは、リズムの再構造化が成されていないからであろう。

リズム構造は、「タタッタ | タッタ」の前半が4拍、後半が3拍である。前半部、後半部を同じ長さによってバランスを取ろうとするサーボ機構⁽¹⁰⁾が働いたために、リズムに誤りが出たものと考えられる。「タッタ」というパターンが連続するので、この点を強調して指導すると発音が安定し、再度聞かせるだけで自己矯正ができるようになった。

⑤ 「伝搬経路」(でんぱんけいろ)

指導上のポイントは、中高型アクセント、撥音拍と長音拍が混在する「タン | タン | ター | タ」のリズムパターンである。指導に際しては「デンパン | ケーロ」のように2分割して練習を行った。漢字2語の組み合わせからなる比較的安定したリズム構造のため、問題なく生成できた。

⑥ 「二端子対共振子」(にたんしついきょうしんし)

意味境界から「ニタンシツイ | キョーシンシ」のように2分割できる。最初のリズムフレーズ「ニタンシツイ」、続く「キョーシンシ」の中高型アクセント、また、撥音拍と長音拍が混在するリズムパターンの2項目を指導し定着させることである。2分割して練習したこともあり問題なく生成できた。

⑦ 駆動信号自重(くどうしんごうじじゅう)

この用語は、「駆動信号」「自重」がそれぞれ1語として独立しており、アクセント型は二つあり、リズムも「クドーシンゴー | ジジュー」のように

2分割する。「クドーシンゴー」の中高型アクセント、「ジジャー」の平板型アクセント、また、長音拍と撥音拍が混在するリズムパターンを定着させることが指導上のポイントとなる。被験者に見られた発音の問題点は、「シンゴー」の「ゴー」の長音が脱落して、「シンゴ」のように短音化することであったが、振動器を用いて長音の緊張度を体感させるとすぐに反応して改善が見られた。

⑧ 溶着試料（ようちゃくしりょう）

「ヨーチャク | シリョー」のように2分割する。指導上のポイントは、中高型アクセント、二つの長音拍からなるリズムパターンの定着である。前半、後半のパターンが「タータタ」、「タター」のように異なるため、誤りの可能性を想定したが、問題は見られなかった。

⑨ 接合結果（せつごうけっか）

「セツゴー | ケッカ」のように2分割する。指導上のポイントは、中高型アクセント、長音拍と促音拍が混在するリズムパターンの定着である。前半、後半のパターンが「タタター」、「タッタ」とそれぞれ異なるため、指導に注意を要する。実際の発音では、「ケッカ」のアクセントが平板型になったため、中高型になるよう山型の動きを使い矯正した。

⑩ 電極指配置（でんきょくしはいち）

指導上のポイントは、複合語ではなく、独立した2語と考え「デンキョクシ | ハイチ」のように2分割すること、「デンキョクシ」における中高型アクセント、「ハイチ」における平板型アクセント、撥音拍と長音拍を含むリズムパターンの定着であるが、特に問題は見られなかった。

⑪ 電子顕微鏡（でんしけんびきょう）

「デンシ | ケンビキョー」のように前半3拍、後半5拍に2分割できるが、複合語なので、分割せずに8拍の平板型アクセントと、撥音拍と長音拍を含む8拍語として、動きを併用した指導を行った。特に、問題は見られなかった。

⑫ アルミ蒸着（アルミじょうちゃく）

意味的には「アルミ | ジョーチャク」に2分割できるが、複合語となるので、分割せずに後ろから3拍目で下がる中高型アクセント、長音拍を含む7拍語として指導したが、特に問題は見られなかった。

⑬ 電子ビーム露光（でんしビームろこう）

意味的には「デンシビーム | ロコー」のように2分割するが、1語の複合語として使われるため、アクセント型は、後ろから2拍目で下がる中高型である。また、撥音拍と長音拍が混在するリズムパターンである。この2項目を指導したが、特に問題はなかった。

⑭ 加圧工具（かあつこうぐ）

意味的には「カアツ | コーグ」のように2分割するが、実際には、1語になる複合語である。後ろから2拍目で下がる中高型アクセント、長音拍を含むリズムパターンを指導し定着を図った。リズム構造が「タータ | タータ」でリズムバランスのいい言葉なので、発音の問題点は見られなかった。

⑮ 接合治具（せつごうやく）

意味的には「セツゴー | ヤグ」のように2分割されるが、複合語になるため1語として扱った。最終拍で下がる中高型アクセント、長音拍を含むリズムパターンの定着を図った。2拍1フットが3回繰り返される安定したリズム構造のためか、プロソディに問題はなかったが、語末の「グ」が無声化したため、拳を作り強く空間を叩く動作を用いて発音を緊張させ矯正した。

⑯ デバイスシミュレーション

日本語学習者には聴取も生成も苦手とする外来語である。意味的には「デバイス | シミュレーション」のように2分割できるが、1語の複合語として、後ろから3拍目で下がる中高型アクセント、「デバイス」における連母音、「シミュレーション」における長音拍、撥音拍を含むリズムパターンの定着を図った。日本語母語話者にとっても簡単な発音ではないが、

「デバイスシミュレーション」の「ス」の無声母音を除けば、問題は見られなかった。無声母音の部分では、[s] の摩擦音を長く強く発音することで矯正された。

⑰ 振動速度振幅（しんどうそくとしんぶく）

この用語は、複合語にはならないため、「シンドーソクド | シンプク」のように2分割して指導した。「シンドーソクド」は後ろから2拍目で下がる中高型アクセント、「シンプク」は平板型アクセント、撥音拍と長音拍の混在したリズムパターンである。これら3項目の定着を図ったが、特に問題は見られなかった。

⑱ 電極指幅（でんきょくしはば）

意味的には「デンキョクシ | ハバ」のように2分割するが、複合語になるため1語として扱う。後ろから2拍目下がる中高型アクセント、撥音拍を含むリズムパターンの2項目を指導し定着を図った。この用語も特に問題は見られなかった。

⑲ 回転YカットX伝搬のLiNbO₃（ニオブ酸リチウム）基板

23語の中で最も指導の難しい用語であった。LiNbO₃は、「ニオブ酸リチウム」と読み、筆者も指導前に「ニオブサンリチウム」→「ニオブサンリチウムキバン」の順で発音を試みた。リズムグループの拍数はそれぞれ多くなるが、被験者は練習を重ねて来ているので、「カイテンワイカット | エックスデンパンノ | ニオブサンリチウムキバン」のように3分割して指導に当たった。連母音、促音拍、撥音拍が混在する複雑なリズム構造を有しており、他の用語と比べ指導・矯正に時間を要したが、アクセント型が全て中高型であるため、かなり正確に発音できるようになった。

⑳ 共振点（きょうしんてん）

意味的には「キョーシン | テン」のように2分割されるが、複合語となるので1語として扱った。後ろから3拍目で下がる中高型アクセント、長音拍、撥音拍が混在するリズムパターンの指導を行ったが、問題は見られ

なかった。

㊸ すだれ状電極（すだれじょうでんきよく）

意味的には「スダレジョー | デンキョク」のように2分割するが、複合語になるので1語として指導した。9拍からなる長い用語であるが、後ろから3拍目で下がる中高型アクセントの発音に関して問題は見られなかった。長音拍と撥音拍を含むリズムパターンの定着が課題で、最初の発音では、「スダレジョー」のように「レ」が長音化、同時に本来の長音部「ジョー」が短音化してしまった。また、「デンキョク」の「ン」が短くなる傾向が見られたが、3回の練習で改善された。やはり、異なる特殊拍が混在すると生成が難しくなるようだ。

㊸ ファブリ・ペローモデル

この用語は「・」で区切られているので、「ファブリ | ペローモデル」のように2分割し2語として扱った。アクセント型としては「ファブリ」の頭高型、「ペローモデル」の中高型の2種類、また、長音拍があるリズムパターンの定着を図った。長音拍は「ペロモデル」のように脱落する傾向が見られたため、長音を誘導する身振りをを用い指導した。

㊸ 接合結果（せつごうけっか）

意味的には「セツゴー | ケッカ」のように2分割されるが、複合語になるので1語として扱い、後ろから2拍目で下がる中高型アクセント、長音拍、促音拍を含むリズムパターンの練習で定着を図った。特に問題は見られなかった。

以上、23語の発音指導を行った。漢字で構成された専門用語は漢字音からの類推もあり、正しい発音が比較的容易に定着したが、拍数が多く、漢字、数字、カタカナの混在する言葉の発音を定着させるには時間を要した。全体的に見ると、前期で行った発音指導・矯正が、後期の専門用語の発音指導にかなり有効に働いたと実感している。最後は、被験者が論文発表で使用する論文のレジュメ全文を読む練習を行い、今回の指導は終了した。

4. 最後に

以上、前期はプロソディを中心とした発音指導・矯正について、後期は工学系専門用語の発音指導・矯正について述べた。これら一連の指導過程において、どの音声要素に問題が多く見られ、またそれに対してどのような発音指導・矯正をしたのかについて、再度考察してみる。また、リズム単位の捉え方、設定方法についても私見を述べることにする。

1. 被験者の発音で特に目立つ誤りは、促音拍、長音拍の脱落、撥音の拍としての長さが短くなる、無声子音／有声子音の弁別が上手く出来ない、母音の無声化が起きない、中高型アクセント、山型イントネーションの生成が難しい、といった点である。これは中国語を母語とする日本語学習者によく見られる誤りの傾向で、中国語の母語干渉が大きく影響しているからである。特に、拍数が長く、漢字、カタカナ、数字が混在する専門用語では、発音が乱れ、ポーズなしで1語として言い切るのが容易ではなかった。

音声上の誤りは、個々の誤りが別々に存在するのではなく、それらが有機的に影響し合い全体構造的に誤りの特徴を際立たせていると考えられる。

2. 特殊拍が2つ以上含まれる語に音声上の誤りが増える傾向が見られた。特に種類の異なる拍が混在すると誤りが増える傾向にある。これは、リズム構造が複雑になり、リズムバランスを取るためのサーボ機構が上手く働かなかったからだと思われる。
3. わらべうたのリズムパターンは、「タタッタ」（「こまった」など）を連続させるより、「タタタッタ#」（例「こまったな#」）のように休止を入れた方が早く習得された。これは、休止を置くことにより、リズムパターンの記憶が迅速に行われるからである。

中野（2014）も指摘しているように、語頭は緊張度が高いため、緊張度の高い促音は発音しやすい。また、2 モーラ 1 フットの考えから分析すると、「タ | タッ | タ」は 1 拍・2 拍・1 拍であるが、「タッ | タタ」は 2 拍・2 拍となり、リズムバランスが安定していて習得しやすいからだと思われる。

4. 難しいリズムパターンも振動器の利用により、劇的に改善されることがある。“聴かせ方”を変える「わらべうた」や「SUVAG 機器」だけでなく、聴覚以外の感覚（振動感覚）を利用することの有効性が示唆された。音声は音波、すなわち振動である。身体は音声を振動として知覚するという事実を考えれば、音声を身体に直接伝達するというのは理にかなっている。
5. 今回指導した被験者は、発音矯正に対してモチベーションが高く、身振りをういた指導に問題なくついてきてくれた。自由発話において学習項目が完全に定着したわけではないが、自己モニター、フィードバックをする習慣が養われた。発音指導・矯正における教師の役割は、学習者の自己モニター、フィードバック、自己矯正の能力をいかに養っていくかであろう。
6. 筆者は、リズムの単位をどこまで細分化すべきなのか、また、ある音連続においてリズムをどこで区切るのかと言った問題は、話し手の話速と密接な関係があると考えている。意味的切れ目、場合によっては文法的切れ目が、リズムグループの切れ目になるとは限らないということ、今回の指導・矯正を通して実感した。恐らく、リズムグループにおいて、リズム単位をバランスよく配分させてリズム構造をまとめていこうとする機能が働くからだと思われる。リズム構造をまとめようとする言語感覚は、2 足歩行、心臓の鼓動など人間本来の生理的リズム感覚に起因しているのではないだろうか。フットと捉えるのか、または、より大きな単位のリズムグループを設定し、発音指導・矯正

に役立ていくのかを今後の研究課題としたい。

発音指導・矯正は、単音、単語といった短い音連続から始める傾向になりがちである。特に、工学系専門用語には音韻構造の複雑なものが多いため、単音、単語に指導が偏りやすい。しかし、どのような分野においても、まず、優先させなければならない音声要素は、リズム、イントネーションといったプロソディである。すなわち、言語の「～語らしさ」を担うのはプロソディだからである。この点を考慮して、今回の一連の発音指導では、プロソディの基本的な指導から始め、次に工学系専門用語の指導に移るという手順を踏んだ。

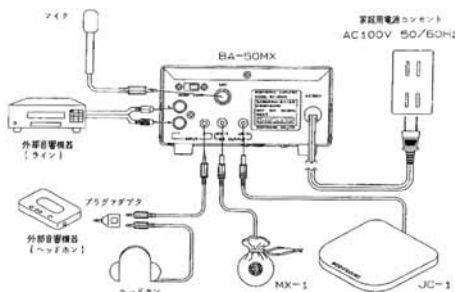
即効性のある発音指導・矯正を教育現場に取り入れていくのは重要な課題であり、日本語教師がその効果を享受するには、豊富な教授経験と長けた技術力が必要とされる。教育現場における発音指導は、限られた時間内で効果をあげなければ意味をなさない。そこで、音声指導に特化した教師養成カリキュラムの作成、また、短期養成であってもそこで得た知識や指導スキルを、すみやかに教育現場に応用できるような実践的マニュアルの、そして、学習者が効率的に自宅学習できる教材の開発が急がれるところである。

《注》

- (1) フット：2モーラ（拍）を1つにまとめてリズムの単位とする考え方。
- (2) リズムグループ：句や文のような意味的なまとまりをもった音節の集まりを指すが、本稿では、意味的なまとまりだけでなく、いくつかの拍が一つのまとまりとなり、そこに切れ目を感じるものを指す。また、必ずしも意味の切れ目とは限らないとする。
- (3) VT法：言調聴覚論（Verbotal System）の原理を応用して考案された音声指導・矯正法で、主に外国語教育、聴覚言語障害者教育の分野で実践されている。
- (4) わらべうたリズム：言葉の記憶にリズムが関与するという考えに基づき作られたVT法の音声指導技術。本来の伝承わらべうたを活用したもの、伝

承わらべうたでは補いきれない要素を考慮して創作したものがある。

- (5) 振動器：音声は振動であり，身体は音声を振動として知覚するという事実に基づき制作された機器で，電気信号を機械的な振動に変換して，手の平，肘，耳の後ろにある乳様突起などを通して音声を体感させるものである。もともと聴覚障害者用に開発された機器であるが，健常者の外国語教育にも応用されている。



ボディソニック BA-50MX 接続図 (VTS 入門より)

- (6) 身体リズム運動：言語の音素的要素と身体の動きの要素とを関連付けて作られた運動。身体を広義の調音器官・聴覚器官と捉え，体（手，腕など）を動かせば局所の動きが誘導されるとする考えに基づいている。
- (7) SUVAG 機器：言調聴覚論の原理に基づき制作された電子フィルターから成る音声聴取訓練機器で，各音の最適周波数の割り出しや検査が可能な帯域フィルターで構成されている。



電子フィルター SUVAG TMS98 と筆者

- (8) 使用した撥音のわらべうた：

○えんえん 続くよ えんえんと でんえん 風景 えんえんと。
○ラーメン たんめん たんたんめん，

どんぶり 頼もう てんしんどん、
ぜんぶで おいくら さんぜんえん、
お腹も まんぶく 来々軒。

(9) 無声子音／有声子音のわらべうた：

とんとん 戸口で とんとんと、誰かが 叩くよ とんとんと、
そのうち どんどん どんどんと、どんどん 叩くの どちら様？
私だ 母さん 開けてくれ、父さん 飲み過ぎ 午前様、
ベッドに 大の字 ばったんきゅう、ゲーゲー ゲーゲー 夢心地。

(10) サーボ機構：「制御の対象の状態を測定し、基準値と比較して、自動的に修正制御する機構」と定義（大辞林第3版）付けられているが、ここでは脳がリズム構造を正しく制御させようと働く仕組みのこと。

参考文献

- 赤木浩文，古市由美子（2010）『毎日練習！リズムで身につく日本語の発音』スリーエーネットワーク
- 石川圭一（2005）『ことばと心理 ― 言語の認知メカニズムを探る ―』くろしお出版
- NHK 放送文化研究所（2000）『NHK 日本語アクセント辞典』
- 小熊利江（2008）『発話リズムと日本語教育』風間書房
- J. W. カード/N. マルティノヴ（1995）「発話の刺激と矯正に用いられる音声リズム」『話しことば指導の技法』第三書房，pp. 1-22
- 鹿島央・橋本慎吾（2000）「日本語韻律の語レベルでの特徴について ― 北京語話者について ―」『日本語・日本文化論集第8号』名古屋大学，pp. 75-90
- 鹿島央（2002）『韻律表示による音声教育試論』「日本語・日本文化論集 第10号」名古屋大学，pp. 70-90
- 河野守夫（1992）「話しことばの認識と生成におけるリズムの役割」
- 河野守夫（1997）「リズムの知覚と心理」『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 木村政康（1992）「ローパスフィルターによるプロソディの知覚」『拓殖大学論集』第200号 拓殖大学研究所，pp. 159-179
- 木村政康（1993）「日本語のイントネーションパターン」『日本語紀要』第3号，pp. 27-41
- 木村政康（1998）「わらべうたリズムを活用した長音指導教材」『拓殖大学語学研究』第88号，拓殖大学言語文化研究所，pp. 211-262

- 木村政康 (1997) 「促音の一指導法 —— わらべうたリズムの活用」『日本語紀要』第 7 号, 拓殖大学留学生別科, pp. 49-69
- 木村政康 (2000) 「わらべうたリズムを活用した撥音の指導法」『拓殖大学日本語紀要』10 号, 拓殖大学留学生別科, pp. 17-28
- 木村政康 (2001) 「振動感覚による音声認識」『拓殖大学語学研究』95 号, pp. 1-26
- 木村政康 (2001) 「音声教育法 —— VT 法の理論を応用して ——」『言語とコミュニケーション』拓殖大学言語文化研究所, pp. 45-64
- 木村政康 (2002) 「VTS 入門」NPO グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会
- 木村政康 (2004) 「中国語母語話者における日本語「ラ」行子音の聴取・生成の問題点と解決法」『日本語・日本文化を核とした異文化接解ならびに交流に関する対照研究』拓殖大学言語文化研究所, pp. 1-11
- 木村政康 (2010) 「わらべうたリズムを活用したアクセントの指導 —— 頭高型アクセントを中心に ——」『拓殖大学言語学研究』122 号, pp. 79-99
- 串田真知子 (1995) 「自然な日本語音声への効果的なアプローチ: プロソディックグラフ —— 中国人学習者のための音声教育教材の開発 ——」『日本語教育』86, pp. 39-51
- ペタル・グベリナ (2012) 『ことばと人間 聴覚リハビリと外国語教育のための言語理論』上智大学出版
- 窪菌晴夫・本間猛 (2002) 『音節とモーラ』研究社
- 国際交流基金『音声を教える』(2009) ひつじ書房
- 社団法人電気設備学会 (2010) 『電気設備用語辞典』(第 2 版) オーム社
- 杉藤美代子 (1994) 『日本人の声 日本語音声の研究』和泉書院
- 杉藤美代子 (1996) 『日本語の音 日本語音声の研究』和泉書院
- 杉藤美代子 (1999) 『教育への提言 日本語音声の研究』和泉書院
- 谷川俊太郎 (2005) 『わらべうた』集英社, 第 16 刷
- 鶴谷千春 (2008) 『第二言語としての日本語の発音とリズム』溪水社
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7 巻 2 号, 日本音声学会, pp. 70-83
- 友寄英哲 (1988) 「記憶面・集中面からみた VT・R 学習法の効果」*Sophia Linguistica* 25 号, 上智大学, pp. 97-104
- 中川千恵子他 (2009) 『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』
- 中野二郎, 大江淳子 (2008) 「リズム学習方法の教師間および教師・学習間における共有による学習効果」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』

2008 年度版

中野二郎（2009）「日本語学習者の漢字の読みに見られる音声の特徴 —— 韓国語母語話者と中国語母語話者を中心に ——」『拓殖大学大学院言語教育研究第 10 号, pp.69-82

中野二郎（2010）「リズム記号の提示による長音の学習効果 —— 韓国語母語話者の漢字語発音を中心に ——」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』2010 年度版

中野二郎（2014）「言語リズムが音声習得に及ぼす影響 —— 中国語母語話者と韓国語母語話者の漢語の発音を通して ——」拓殖大学言語教育研究科博士論文
ヴェスナ・ピンタール（1994）「ヴェルボトナル論における身体リズム運動について」『ヴェルボトナル法入門 —— ことばへのアプローチ ——』pp.139-156

広瀬啓吉（2006）『韻律と音声言語情報処理』丸善

別宮貞徳（2005）『日本語のリズム 四拍子文化論』筑摩書房

ペンギン電子工学事典編集委員会（2010）『電子工学事典朝倉書店』

正高信夫（2006）『子どもはことばをからだで覚える』第 10 版 中公新書

町田章一（1988）「日本語の基本的なリズムの設定方法とリズム・パターン」
SOPHIA LINGUISTICA 25 号, 上智大学, pp.35-43

楊立明（2004）「中国語のリズム（その 1）——「フット」と「持続時間」を中心に」『早稲田大学語学教育研究所紀要』第 59 号, pp.1-20

クロード・ロベルジュ（2002）「ヴェルボトナル法の基礎 —— 身体運動 ——」『言
調聴覚論研究シリーズ第 31 巻』関東学園ヴェルボトナル研究所

（原稿受付 2015 年 10 月 5 日）

〈論文〉

REFLEXIONES SOBRE LAS COLOCACIONES VERBOADJETIVALES*

KOIKE Kazumi

RESUMEN

El presente trabajo tiene por objetivo analizar las características sintácticas y semánticas de aquellas combinaciones frecuentes formadas por un verbo y un adjetivo (p.ej., *salir indemne*, *pasar inadvertido*). Dado el vínculo léxico que se establece entre ambos elementos, creemos que estas combinaciones, aunque no se trata de las típicas colocaciones, podrían formar una clase más de colocaciones léxicas del español (*colocaciones verboadjetivales*).

Palabras clave: colocaciones léxicas, verbos de apoyo, atributos

1. OBJETIVO

En nuestro trabajo (Koike 2001: 46, 54–55) hemos incluido en las colocaciones léxicas del español las colocaciones formadas por un verbo y un adjetivo (*colocaciones verboadjetivales*).

Entendemos por colocaciones verboadjetivales aquellas combina-

* Agradezco muy sinceramente al Prof. Mario García–Page Sánchez su amabilidad de leer el borrador del presente trabajo y hacerme llegar sus valiosas observaciones, aunque me pertenecen en exclusiva todos los errores e imprecisiones que pueda haber en él.

ciones formadas por un verbo y un adjetivo o un participio que presentan las características formales y semánticas señaladas en Koike (2001: 25–29): la coocurrencia frecuente de dos unidades léxicas, las restricciones combinatorias impuestas por el uso tradicional, la composicionalidad formal, el vínculo de dos lexemas, la precisión semántica de la combinación, etc.

Estas combinaciones han sido tratadas desde otro enfoque, en especial, desde el sintáctico (verbos semicopulativos que aparecen con un atributo)¹, pero no han sido estudiadas en virtud del vínculo léxico que se establece entre ambos elementos.

Aunque no es elevado el número de colocaciones del tipo V + A, en comparación, por ejemplo, con las colocaciones verbonominales, es comprobable que ciertos adjetivos tienden a aparecer con un número determinado de verbos; así, por ejemplo, el adjetivo *indemne*² suele combinarse con *salir*, e *inadvertido*, con *pasar*³:

- (1) Es la última prueba de que la Monarquía británica no *ha salido indemne* de sus escándalos (*CREA*).
- (2) Le gusta *pasar inadvertido* entre la gente pero cuando quiere hacerse notar se preocupa de conseguirlo (*CREA*).

En nuestra opinión, estas combinaciones frecuentes de verbo y adjetivo constituyen una clase de colocaciones léxicas. El presente trabajo está destinado al análisis de sus características sintácticas y

1 La bibliografía sobre verbos semicopulativos es abundante. Pueden citarse, entre otros, Fente (1970), Lorenzo (1970), Gutiérrez Ordóñez (1986), Porroche Ballesteros (1988), Alba de Diego y Lunell (1988), Morimoto y Pavón Lucero (2007).

2 El adjetivo *indemne* aparece seis veces en el DP: tres para la definición de otras unidades léxicas o fraseológicas y tres en la ilustración de ejemplos. En todos los casos se coloca con el verbo *salir*.

3 El *CREA* recoge 490 ejemplos de «inadvertido»; en 447 de ellos este adjetivo aparece con el verbo *pasar*.

semánticas.

2. EL CORPUS

El corpus con el que se ha realizado el presente estudio se ha confeccionado a partir de los datos recogidos en el *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo* (DCPEC, en adelante) dirigido por Ignacio Bosque (2006), el cual proporciona combinaciones frecuentes de palabras. Se han recogido unas 3400 combinaciones formadas por un verbo y un adjetivo⁴.

Dada su alta frecuencia, resulta sumamente difícil determinar la restricción léxica que imponen los verbos copulativos *ser* y *estar*, por lo que quedan excluidas de nuestro análisis las combinaciones de estos verbos con adjetivos.

Otro trabajo del que nos hemos servido es la *Nueva gramática de la lengua española* (NGLE, en adelante), publicada en 2009. Esta obra analiza los rasgos semánticos de los atributos (principalmente, adjetivos) que se construyen con verbos semicopulativos (2835–2864, § 38.1– § 38.5).

3. ADJETIVOS Y VERBOS EN LAS COLOCACIONES VERBOADJETIVALES

3.1. Clase de adjetivos

Son adjetivos calificativos los que constituyen colocaciones verboadjetivales, mientras que los adjetivos de relación difícilmente conforman colocaciones del tipo V + A. Además de los adjetivos, hay

4 Según nuestro corpus, unos 190 verbos pueden construirse con los adjetivos recogidos (950 en total). Naturalmente no todas las combinaciones de estos verbos con un adjetivo pueden considerarse como colocaciones. En realidad son pocas las combinaciones de un verbo con un adjetivo que presentan restricciones léxicas propias de las colocaciones.

participios que intervienen en la formación de esta clase de colocaciones, como es el caso de *absuelto* en *salir absuelto*.

En el aspecto morfológico puede señalarse que algunos adjetivos con prefijo negativo tienden a combinarse con determinados verbos. Así, *desapercibido* e *inadvertido* suelen combinarse con *pasar*, e *impávido* e *impertérrito*, con *permanecer*.

- (3) Su sonrisa *pasó desapercibida* (DS, s. v. *desapercibido*).
- (4) No podemos *permanecer impávidos* ante las injusticias (DCPEC, s. v. *impávido*).
- (5) *Permaneció impertérrito* cuando oyó la trágica noticia (DP, s. v. *impertérrito*).

3.2. Función sintáctica del adjetivo

El adjetivo en las colocaciones verboadjetivales cumple la función de atributo cuando el verbo es semicopulativo, y la de complemento predicativo cuando el verbo se usa como pleno. Así, en *salir absuelto* el adjetivo *absuelto* funciona como atributo, mientras que en *salir disparado* el adjetivo *disparado* cumple la función de complemento predicativo:

- (6) Los acusados *salieron absueltos* por falta de pruebas (DCPEC, s. v. *absuelto*).
- (7) Cuando le dijeron que le había tocado la lotería *salió disparado* (DS, s. v. *disparado*).

El adjetivo concuerda en género y número con el sujeto o con el complemento directo cuando el verbo es transitivo.

- (8) Siete personas murieron, dos más resultaron heridas y otras cuatro (personas) *salieron ilesas*, según el comunicado [...] (CREA)

- (9) Esta situación parece estar forzando a Washington a adoptar una diplomacia de “respuesta gradual”, que comenzaría por hacer *efectivas* nuevas sanciones contra Irak [...] (CREA)

3.3. Clases de verbos

El número de verbos que forman colocaciones verboadjetivales es reducido, puesto que son pocos los verbos que pueden colocarse con adjetivos, frente al elevado número de verbos transitivos que constituyen colocaciones verbonominales del tipo V + N_{CD}.

Los principales verbos que se construyen con adjetivos y se usan en las colocaciones verboadjetivales son los llamados verbos semicopulativos o pseudocopulativos (NGLE: 2778, § 37.1n), tales como *hacerse*, *ponerse*, *quedarse*, *volverse*, *salir*, *andar*, *permanecer*, *seguir*, *mostrarse*, *pasar*, etc. Usados como semicopulativos, estos verbos tienden a combinarse con un número muy determinado de adjetivos. Así, el verbo *pasar*, usado como semicopulativo, presenta cierta restricción léxica porque «se construye con atributos que denotan ausencia de atención o falta de repercusión o de alcance de alguna cosa» (NGLE: 2862, § 38.5s). Este verbo, como se ha visto en (2) y (3), se combina preferentemente con adjetivos como *desapercibido* o *inadvertido*. En función de los significados que pueden denotar, los verbos semicopulativos pueden clasificarse en verbos de cambio, verbos de permanencia, persistencia o continuidad, o verbos de manifestación o presencia (NGLE: 2838, § 38.1h)⁵.

-
- 5 Los ejemplos citados en la NGLE (2009: 2838, § 38.1h) son los siguientes:
1. Cambio: *devenir un hecho*, *hacerse rico*, *ponerse enfermas*, *quedarse perplejo*, *salir herido*, *volverse taciturna*.
 2. Permanencia, persistencia o continuidad: *andar preocupado*, *continuar graves*, *permanecer calladas*, *seguir vivo*.
 3. Manifestación o presencia: *aparecer cubierto*, *encontrarse en forma*, *hallarse indispuesta*, *lucir linda*, *mostrarse de acuerdo*, *pasar inadvertidos*, *presentarse favorables*, *revelarse insuficiente*, *verse horrible*.

Además de dichos verbos semicopulativos, existe un reducido número de verbos plenos que aparecen en colocaciones verboadjetivales, como es el caso de *levantarse* o *erguir(se) enhiesto*.

3.4. Cohesión semántica entre verbo y adjetivo

Es gradual la cohesión semántica entre el verbo y el adjetivo de las colocaciones que nos ocupan, como sucede con otros tipos de colocaciones (Koike 2001: 175). Frente a los adjetivos que se combinan con un par de verbos, como es el caso de *inadvertido*, que suele construirse con *pasar* o *permanecer*, hay otros que pueden combinarse con más de dos verbos. Así, el adjetivo *atónito* puede colocarse, entre otros, con *quedar(se)*, *dejar*, *observar*, *mirar*, *contemplar*, *asistir (a)*, etc. (NGLE: 2884, § 38.8n; DCPEC, s. v. *atónito*).

En las colocaciones verboadjetivales, es el adjetivo el que elige el verbo, y no al revés, de manera que no se puede sustituir el verbo por otro sin que se pierda el significado de la colocación. Por ejemplo, el adjetivo *público* solo puede formar una colocación en combinación con *hacer*, pero no con *poner*: *hacer*/**poner público*.

Algunos adjetivos polisémicos pueden formar colocaciones verboadjetivales distintas según el significado que exprese. Así, el adjetivo *absorto* se combina con *permanecer* cuando significa ‘atento’, pero con *quedarse* cuando significa ‘muy admirado o muy asombrado’:

- (10) *Permanece* horas enteras *absorto* (‘atento’) en la contemplación del paisaje (DS, s. v. *absorto*).
- (11) El guardia *se quedó absorto* (‘muy admirado o muy asombrado’) ante un espectáculo tan desagradable (DS, s. v. *absorto*).

Algo parecido sucede con *desapercibido*, que se coloca con *pasar* cuando significa ‘no apercebido’ (*pasar desapercibido*), pero con *coger*

cuando significa ‘desprevenido’ (*coger desapercibido a alguien*):

- (12) Su sonrisa *pasó desapercibida* (DS, s. v. *desapercibido*).
- (13) Su llegada nos *cogió desapercibidos* (DS, s. v. *desapercibido*).

4. TIPOS DE LAS COLOCACIONES VERBOADJETIVALES

Al atender a su significado léxico, el verbo puede funcionar con significado léxico pleno (verbo pleno) o con valor deslexicalizado (verbo semicopulativo o de apoyo).

Las colocaciones verboadjetivales se dividen en dos grupos: el primer grupo lo constituyen aquellas combinaciones de un verbo de apoyo con un adjetivo (funcionan como predicados complejos), forman el segundo grupo las combinaciones de un verbo pleno con un adjetivo con función de complemento predicativo. A las combinaciones del primer grupo las llamaremos *colocaciones funcionales*, y a las del segundo, *colocaciones con verbo pleno*.

4.1. Colocaciones funcionales

Son colocaciones funcionales las formadas por un verbo semicopulativo y un adjetivo, puesto que constituyen un predicado complejo. En estas colocaciones el verbo no conserva su significado originario, funcionando como un verbo semicopulativo (o de apoyo).

Suele existir un verbo simple con significado similar al de la colocación, si bien no todas pueden parafrasearse por un verbo simple equivalente. Por ejemplo, *caer* o *ponerse enfermo* tiene un verbo de la misma base léxica (*enfermar*), pero no ocurre lo mismo con *salir ileso*. Entre las colocaciones que tienen un contraparte léxico figuran *caer/ponerse enfermo* (= *enfermar*), *salir triunfante* (= *triunfar*), *andar ajetreado* (= *ajetrearse*), *quedar(se) viudo* (= *enviudar*), *andar liado* (= *liarse*), etc., y entre las que no lo tienen pueden citarse expresiones como *pasar inadvertido*, *salir malparado*, *salir/resultar ileso (de)*, *salir/*

quedar incólume (de), salir intacto (de), salir airoso, resultar/salir redondo (el negocio), etc.

Otra característica importante es que el peso semántico (lexema principal) de esta construcción está en el adjetivo, el cual elige, a su vez, el sujeto, el complemento y, si la construcción es transitiva, el CD, mientras que el verbo se encarga de la información morfológica (persona, número, tiempo, modo, etc.) y está inhabilitado para seleccionar sus argumentos. Así, en la secuencia *salir incólume* de (14) el elemento que selecciona sus argumentos (el sujeto y el complemento) no es *salir*, sino el adjetivo *incólume*:

- (14) Afortunadamente, los viajeros *salieron incólumes* del accidente (DD, s. v. *incólume*).

Tanto los verbos intransitivos como los transitivos o los pronominales pueden conformar colocaciones funcionales verboadjetivales.

A continuación se muestran los principales verbos que forman este tipo de colocaciones y los adjetivos que se combinan con ellos.

a) con verbo intransitivo

salir

El verbo *salir* puede indicar en su uso semicopulativo ‘cambio de estado’ o ‘experimentación, manifestación o constatación’ (NGLE: 2846, § 38.3d.)⁶. Este verbo suele usarse con adjetivos y participios que expresan daño o perjuicio (*afectado, dañado, malparado*) o beneficio, mejora o ausencia de daño (*airoso, ileso, incólume*) (NGLE: 2847, § 38.3d). El DCPEC registra 44 adjetivos y participios que pueden

6 Morimoto y Pavón Lucero (2007: 26) dividen los verbos pseudo-copulativos aspectuales en dos grupos: los ‘eventivos’ y los ‘estativos’. Pertenecen al primer grupo verbos como *acabar, caer, hacerse, ponerse, resultar, salir* o *volverse*, y al segundo, *andar, conservarse, continuar, encontrarse, hallarse, ir, mantenerse, permanecer*, etc.

combinarse con *salir*, de los cuales los siguientes podrían conformar colocaciones con dicho verbo:

absuelto, afectado, airoso, chamuscado, dañado, galardonado, herido, ileso, incólume, indemne, intacto, malparado, perjudicado, etc.

resultar

El verbo *resultar* es un verbo que puede combinarse con un elevado número de adjetivos y participios⁷, razón que determina que sean realmente pocos los adjetivos que forman colocaciones verboadjetivales con dicho verbo. Entre los principales candidatos están los adjetivos *ileso*, *hiriente* y *chocante*.

- (15) *Resultó ileso* en la pelea (*DS*, s. v. *ileso*).
- (16) Aunque *resulte hiriente* para la diplomacia europea, la sentencia se corresponde con la realidad (*CREA*).
- (17) *Resulta chocante* que los dos hayan aparecido juntos (*DCPEC*, s. v. *chocante*).

El rasgo más destacado del verbo *resultar* es su uso con participios. Según la *NGLE* (2851: § 38.3p, § 38.3q), los participios más proclives a combinarse con *resultar* derivan bien de verbos de cambio de estado (*abaratado, activado, ampliado, atenuado, cambiado*, etc.), bien de verbos que denotan alteraciones relativas a la salud (*contagiado, contaminado, herido*, etc.), o la consecuencia de acciones hostiles contra las personas o las cosas (*anegado, aplastado, apuñalado, arrasado*, etc.).

permanecer

El verbo *permanecer* se utiliza más como verbo semicopulativo de

7 Según el *DCPEC*, son 173 los adjetivos pueden combinarse con *resultar*.

permanencia que como verbo pleno (NGLE: 2858, § 38.5j). Aunque resulta difícil comprobar un posible vínculo léxico entre este verbo y adjetivos combinables con él⁸, parece que algunos, como *impávido*, *impasible*, *impertérrito*, *incomunicado*⁹, etc., tienden a colocarse con *permanecer*:

- (18) No podemos *permanecer impávidos* ante las injusticias (DCPEC, s. v. *impávido*).
- (19) *Permaneció impertérrito* mientras leía la carta (DS, s. v. *impertérrito*).
- (20) Aquí, por el contrario, después de una huelga general secundada de forma masiva, el Ejecutivo *permanece impasible* (CREA).
- (21) El presunto militante de Iparretarrak *permanece incomunicado* en locales de la policía de Dax (CREA).

andar

No son muchos los adjetivos que se combinan con el verbo *andar*¹⁰. Según la NGLE (2856, § 38.5c), los adjetivos o participios que eligen el verbo *andar* se caracterizan por aludir a tareas u ocupaciones (*enredado*, *metido en algo*, *ocupado*, *liado*) o por expresar carencia, ausencia o error (*equivocado*, *despistado*, *falto*, *perdido*, *descaminado*) o diversos estados transitorios físicos (*achacoso*, *débil*, *delicado*) o psíquicos (*ansioso*, *enamorado*, *loco*) que se suelen considerar irregulares en los individuos. Creemos que los que están recogidos tanto en el DCPEC como en la NGLE (*metido en algo*, *equivocado*, *despistado*, *descaminado*, *enamorado*) constituyen colocaciones con *andar*:

8 El DCPEC registra 75 adjetivos combinables con *permanecer* (38 en la entrada de *permanecer* y 37 en otras entradas).

9 Cabe señalar que algunos adjetivos con prefijo negativo muestran preferencia por *permanecer*.

10 El DCPEC recoge 36 adjetivos que se colocan con *andar*.

- (22) Hoy Miquel *anda metido* en negocios de radio y muy tranquilo (CREA).
- (23) El muchacho *anda* un poco *despistado* desde que dejó el colegio (DCPEC, s. v. *andar*).
- (24) No *andaba* muy *descaminado* al afirmar que la crisis estaba remitiendo (DCPEC, s. v. *descaminado*)¹¹.
- (25) Ahora dice que *anda enamorada* de un actor (DCPEC, s. v. *enamorado*).

caer

Dado que el verbo *caer* «se combina con un pequeño número de atributos, casi siempre denotadores de estados carenciales y resultados negativos o desfavorables para el sujeto» (NGLE: 2846, § 38.3a), parece establecer un vínculo léxico con determinados adjetivos o participios. Entre las posibles colocaciones con *caer* con adjetivos, cabría citar *caer enfermo/herido/muerto/preso/prisionero*:

- (26) *Cayó enferma* en el viaje (DS, s. v. *enfermo*).

pasar

El verbo *pasar*, como semicopulativo, se combina con *inadvertido* y *desapercibido*. Estos dos adjetivos muestran una marcada preferencia por *pasar*, aunque el DCPEC indica otras posibilidades combinatorias (*resultar/permanecer inadvertido y permanecer desapercibido*).

quedar(se)

Aunque *quedar(se)* es propiamente un verbo de cambio de estado,

11 El verbo *andar* como verbo pleno también puede aparecer con *descaminado*: *Anduvimos* mucho tiempo ‘descaminados’ hasta que encontramos el sendero que nos llevó a la carretera (DS, s. v. *descaminado*). El CREA recoge 44 ejemplos de «descaminado», en 20 de los cuales este adjetivo se combina con *andar*.

puede usarse como verbo de permanencia según el contexto y el adjetivo con el que se combina (Morimoto y Pavón Lucero 2007: 26; *NGLE*: 2842: § 38.2j). Como verbo de cambio de estado se combina, entre otros, con los adjetivos que siguen:

Estados carenciales o pérdida de algo: *calvo, ciego, cojo, huérfano, mudo, paralítico, solo, soltero, sordo, vacío, viudo*

Los adjetivos que designan ausencia de acción, como *quieto, rígido, inmóvil, cortado, tieso*, se emplean casi siempre con *quedarse* (*NGLE*: 2842–2843, § 38.2k). En cambio, los adjetivos que denotan diversos estados anímicos transitorios como *absorto, atónito, boquiabierto, estupefacto, frío, patidifuso, perplejo, preocupado, sorprendido*, etc. pueden combinarse con *quedar* o *quedarse* (*NGLE*: 2843: § 38.2m).

b) con verbo pronominal

hacerse

El verbo *hacerse* puede aparecer con un buen número de adjetivos¹², por lo que resulta difícil hablar de un vínculo léxico entre *hacerse* y un adjetivo. Pero sí puede hacerlo de los rasgos semánticos del atributo compatible con este verbo. La *NGLE* (2838–2839, § 38.2b–c) señala que «se emplea *hacerse* como verbo semicopulativo con los predicados que expresan cualidades estables o caracterizadoras de personas o cosas». Las combinaciones del verbo *hacerse* con adjetivos como *famoso, célebre, necesario, difícil* o *fácil* podrían considerarse colocaciones funcionales¹³.

12 Según nuestro corpus, *hacerse* puede combinarse con 126 adjetivos.

13 El verbo *hacerse* puede introducir también el sustantivo *realidad* con el mismo significado ('convertirse en'): [...] por el cual se fomentará la construcción de viviendas sociales y en 2012 *se hará realidad* que el derecho a una casa sea exigible ante los tribunales del país (*El País*, 07/01/2007).

- (27) Con 20 años, Judith Mascó *se hizo famosa* la primavera pasada por ser portada de Sports Illustrated (CREA).
- (28) Muchas frases dichas en un momento oportuno *se han hecho célebres* a lo largo de la historia (DP, s. v. *célebre*).

El verbo transitivo *hacer* forma colocaciones funcionales con adjetivos como *efectivo*, *extensivo*, *factible*, *explícito*, *patente*, *público*, etc.:

- (29) La aerolínea Spanair, que preside Gonzalo Pascual, *hizo efectiva* ayer su entrada en la alianza comercial Star Alliance, formada, entre otras, por las compañías Air Canada, SAS y Lufthansa (CREA)¹⁴.
- (30) Quiero *hacer extensiva* mi felicitación a la familia de los novios (DCPEC, s. v. *extensivo*).
- (31) Se han hecho propuestas para *hacer explícita* la obligación por parte de las entidades oficiales internas de los Estados (CREA).

Algunas colocaciones con *hacer* admiten la transformación en pasiva (*pasivización*), como es el caso de *hacer público*:

- (32) Los requisitos a cumplimentar para la realización de los traslados *fueron hechos públicos* hace unos días por dicha Universidad.

volverse

Al igual que *hacerse*, el verbo *volverse* puede combinarse con

14 La expresión *hacer efectivo* tiene otro significado ('pagar') cuando introduce como complemento directo un sustantivo referido a dinero: *Hizo efectiva* 'la cantidad de dos mil pesetas', importe de la multa (DP, s. v. *efectivo*).

numerosos adjetivos¹⁵, puesto que se emplea con adjetivos que se construyen con *ser* (NGLE: 2845, § 38.2p). No obstante, como hace notar la NGLE (2845, § 38.2p), «son particularmente frecuentes con este verbo los adjetivos que denotan cambios notables en la forma de ser o actuar de las personas o de otras entidades, sean de signo negativo — *volverse* {*desconfiado*~*feo*~*tonto*} — o positivo — *volverse* {*bueno*~*considerado*~*metódico*} —».

Consideramos colocación funcional con *volverse* aquella combinación que dispone de un verbo simple de idéntico radical: *volverse loco* (=enloquecer), *volverse soberbio* (=ensoberbecerse), *volverse vanidoso* (=envanecerse), *volverse vil* (=envilecerse), *volverse alcohólico* (=alcoholizarse), etc.:

- (33) Se dice que Don Quijote *se volvió loco* por las novelorías que tenía en la cabeza (DS, s. v. *novelería*).
- (34) A partir de la instauración de la alcoholdependencia es cuando puede decirse que un bebedor *se ha vuelto alcohólico* (CREA).

ponerse

El verbo *ponerse* suele usarse con los adjetivos «que designan propiedades físicas de las personas relativas a su aspecto o su apariencia (*colorado, derecho, elegante, enfermo, guapo, pálido*), su estado anímico (*alegre, celoso, serio, triste, taciturno, contento, nervioso*), su comportamiento con los demás, con más frecuencia si es exigente o poco considerado (*impertinente, insoportable, pesado, severo, tajante*)» (NGLE: 2841-2842, § 38.2i). Combinaciones como *ponerse triste* (=entristecerse), *ponerse borracho* (=emborracharse), *ponerse enfermo* (=enfermar), *ponerse pálido* (=palidecer), que tienen sus correspondientes verbos simples, serían colocaciones funcionales:

15 Según nuestro corpus, *volverse* puede combinarse con 286 adjetivos.

- (35) Cuando el secretario *se puso enfermo*, nombraron a Pedro secretario en funciones (DS, s. v. *función*).

El verbo *poner* es variante causativa no pronominal de *ponerse*. Algunas colocaciones funcionales con *poner* suelen tener un verbo simple morfológicamente asociado que pertenecen a los llamados ‘verbos de cambio gradual’ o ‘de consecución gradual’ (NGLE 1696, § 23.3j). Así, a la colocación funcional *poner nervioso* (a alguien) corresponde el verbo *enervar*:

- (36) No me *pongas nerviosa*, ya te he dicho que no (DS, s. v. *nervioso*).

mostrarse

El verbo *mostrarse* admite adjetivos «que denotan actitud favorable (*amable, complaciente, comprensivo, favorable, partidario, sensible*) o desfavorable (*distante, frío, insensible, vengativo*) hacia las personas o las cosas» (NGLE 2860: § 38.5ñ). De unos 120 adjetivos recogidos en nuestro corpus, formarían colocaciones con *mostrarse* adjetivos como *ambicioso, cauteloso, dubitativo* o *reticente*:

- (37) Ese chico *se ha mostrado* siempre muy *ambicioso* (DCPEC, s. v. *ambicioso*).
- (38) *Se mostró* enormemente *cautelosa* en sus declaraciones (DCPEC, s. v. *cauteloso*).
- (39) Cuando le expuso mi deseo de celebrar una entrevista con Poncio Pilato, José *se mostró dubitativo* (CREA).
- (40) El ministro *se mostró reticente* a nuestras peticiones (DS, s. v. *reticente*).

c) con verbo transitivo

Si se excluyen los verbos *hacer, poner* y *volver*, que se usan en

forma pronominal, pocos verbos transitivos parecen intervenir en este tipo de colocaciones.

Las colocaciones con verbo transitivo constituyen verbos complejos en los que el adjetivo se refiere a un SN en función de CD ajeno a la colocación.

dejar

El verbo *dejar* conforma colocaciones funcionales con valor causativo al combinarse con adjetivos como *malparado*, *maltrecho*, *claro* y *vacante*:

- (41) Cuando eran casi las dos de la madrugada (hora española) una fuerte explosión *dejó malparado* el edificio, ubicado en el barrio de Finchley (*CREA*).
- (42) Los azotes del temporal *dejaron maltrecho* el casco del buque (*DP*, s. v. *azote*).
- (43) Ella *ha dejado claro* que no piensa participar en ese negocio (*DS*, s. v. *claro*).
- (44) Newton ocupó la plaza que *había dejado vacante* su profesor favorito, el agudo y tormentoso matemático Isaac Barrow [...] (*CREA*)

La *NGLE* (2853, § 38.4f.) señala que «el verbo semicopulativo *quedar(se)* parece comportarse como la variante intransitiva de *dejar*»:

- (45) El accidente *lo dejó ciego* (*NGLE*: 2853, § 38.4f.).
- (46) (*Se*) *quedó ciego* por el accidente (*Id.*).

llevar

La *NGLE* (2221, § 28.16r) hace notar que «se emplea *llevar* con participios de verbos transitivos o pronominales que expresan

contacto o vinculación» y cita participios como *asociado*, *emparejado*, *unido* y *aparejado*:

- (47) El tema *lleva asociada* cierta complejidad (ejemplo citado en la *NGLE*).
 (48) Esa decisión *lleva aparejadas* consecuencias muy desagradables (*DS*, s. v. *aparejado*)¹⁶.

coger/pillar

Los verbos *coger* y *pillar* tienden a combinarse con el participio *desprevenido*.

- (49) La insurrección se produjo durante la noche y *cogió desprevenidos* a los dirigentes gubernamentales (*DP*, s. v. *insurrección*).
 (50) La llegada de sus padres lo *ha pillado desprevenido*, jugando y sin estudiar (*DS*, s. v. *desprevenido*)¹⁷.

4.2. Colocaciones con verbo pleno

En las colocaciones con verbo pleno, el verbo conserva su significado léxico y el adjetivo funciona como complemento predicativo orientado al sujeto o al CD.

En comparación con las colocaciones funcionales, parece ser inferior el número de colocaciones que puede formar un verbo pleno con un adjetivo.

La *NGLE* (2884, § 38.8n) señala que ciertos adjetivos que funcionan como complemento predicativo están restringidos a los verbos que denotan determinados rasgos semánticos. Dadas las restricciones

16 *Aparejado* también puede combinarse con *traer*: Los terremotos *traen aparejados* muchos males (*DRAE*, s. v. *aparejado*); Tu llegada *trae aparejada* una gran alegría (*DS*, s. v. *aparejado*).

17 El *DS* registra estas colocaciones como locuciones verbales, junto con *coger* o *pillar de nuevas*.

semánticas que imponen al verbo, estos adjetivos constituyen colocaciones verboadjetivales en las que el verbo conserva su significado léxico. Las combinaciones citadas en la *NGLE* que podrían incluirse en esta clase de colocaciones son las siguientes:

alquilar, comprar, vender, conseguir, obtener — caro, barato
contemplar, mirar, observar, asistir (a), presenciar — atónito,
pasmado, perplejo
aguantar, resistir, soportar, sufrir — impávido
llegar — exhausto
escapar, huir, salir — despavorido

A estas combinaciones pueden añadirse las que siguen:

acudir, atender, ayudar — solícito
ceder, colaborar, cumplir, prestarse (a), responder (a) — gustoso
levantar(se), crecer — enhiesto
llegar — puntual
salir — escopetado, disparado
sonar — disparatado
vagar, caminar — errante
yacer — muerto, inerte

Véanse algunos ejemplos en los que aparecen dichas combinaciones:

- (51) La madre *acude solícita* cuando los hijos la llaman (*DCPEC*, s. v. *solícito*).
- (52) *Respondió gustosa* a su propuesta (*DCPEC*, s. v. *responder*).
- (53) La torre *se levantaba enhiesta* y majestuosa (*DS*, s. v. *enhiesto*).
- (54) Un árbol *crecía enhiesto* en medio del jardín (*DCPEC*, s. v. *enhiesto*).

- (55) El tren, como siempre, *llegaba puntual* (DCPEC, s. v. *puntual*).
- (56) *Salió escopetado* hacia la oficina porque tenía una reunión (DS, s. v. *escopetado*).
- (57) *Salió disparado* a felicitarla (DCPEC, s. v. *disparado*).
- (58) Aunque ahora *suene disparatada*, es una idea bastante interesante (DCPEC, s. v. *disparatado*).
- (59) *Vagó errante* por la ciudad durante horas (DCPEC, s. v. *errante*).
- (60) Cuando llegó la Policía, el cuerpo de la víctima *yacía inerte* en el suelo (DCPEC, s. v. *yacer*).

Entre los verbos con uso semicopulativo, los hay que pueden establecer un vínculo léxico cuando se emplean como verbos plenos con determinados adjetivos o participios. Tal es el caso del verbo *caer*, que, usado como verbo pleno, se combina con *fulminado*, *exhausto*, *desfallecido*, *malherido*, etc. (NGLE 2836: § 38.1d).

Un mismo adjetivo puede aparecer tanto en una colocación funcional como en otra con verbo pleno; así, por ejemplo, el adjetivo *perplejo*, combinado con *quedarse* forma una colocación funcional (*quedarse perplejo*), y, combinado con *mirar*, una colocación con verbo pleno (*mirar perplejo*):

- (61) El entrevistado *se quedó perplejo* ante la pregunta (DCPEC, s. v. *perplejo*).
- (62) La cortesana siguió *mirándola perpleja*, sin saber qué responder (CREA).

Algunos verbos transitivos como *conservar* o *devolver* introducen un complemento predicativo orientado al CD de la oración. Según el DCPEC, el verbo *conservar* se combina, entre otros, con adjetivos como *puro*, *nuevo*, *joven*, *caliente*, *limpio*, *intacto*, etc., y *devolver*, con *intacto*,

completo, roto, etc. Pero estos verbos no parecen establecer vínculo léxico con los adjetivos citados. Así, en *Conservaba fresca la memoria*, ejemplo citado en la *NGLE* (2880, § 38.8b), creemos que el vínculo léxico no está entre el verbo *conservar* y el adjetivo *fresca*, sino entre el sustantivo *memoria* y *fresca*.

Cabe señalar que hay sustantivos que tienden a aparecer con un determinado verbo. Se trata de secuencias como *fallecer/morir víctima de*, *ingresar cadáver*:

- (63) El 5 de agosto de 1962 la actriz *falleció víctima de* una sobredosis de Nembutal (*CREA*).
- (64) Un hombre de 31 años *murió víctima de* una brutal paliza propinada por un grupo de agresores en la madrugada del pasado sábado a la salida de un local nocturno de Barcelona (*CREA*).
- (65) Los médicos José Ángel Rivera y Teresa Álvarez declararon ayer en el juicio del “caso Corroto” que José Fernández Corroto *ingresó cadáver* en el hospital de Móstoles (Madrid) tras un enfrentamiento con policías, con impactos de bala en la cabeza y el cuello (*CREA*).

Estas combinaciones del verbo con un sustantivo presentan las características similares a las de las colocaciones con verbo pleno, puesto que en ambas colocaciones el verbo conserva su significado léxico (verbo pleno) y el sustantivo o el adjetivo funcionan como un tipo de complemento predicativo.

5. OBSERVACIONES

5.1. *Construcción intransitiva y construcción transitiva*

Existen parejas de colocaciones verboadjetivales que tienen

formas transitiva e intransitiva.

a) Verbo pronominal — Verbo transitivo

Hay colocaciones verboadjetivales con verbo pronominal que también pueden emplearse en forma transitiva. Así, los verbos que intervienen en las series *hacerse famoso*, *ponerse nervioso* y *volverse loco*¹⁸ tienen sus usos transitivos:

- (66) El guitarrista abandonó el grupo que *le hizo famoso* en el año 1977 (CREA).
- (67) No *me pongas nerviosa*, ya te he dicho que no (DS, s. v. *nervioso*).
- (68) Tantos años de enclaustramiento *le fueron volviendo paulatinamente loco* (DP, s. v. *loco*).

b) Construcción transitiva y su variante intransitiva

Algunas colocaciones funcionales con *dejar* tienen sus variantes intransitivas. Así, la colocación funcional *dejar malparado* tiene su variante intransitiva con *quedar* o *salir* (*quedar* o *salir malparado*). Adjetivos como *cesante*, *malparado*, *maltrecho*, *satisfecho* o *vacante* forman colocaciones con *dejar* y *quedar*, como puede observarse en los ejemplos siguientes:

dejar malparado > *salir/quedar/resultar malparado*

- (69) Aquella operación *dejó malparada* a la empresa.
- (70) La empresa *resultó muy malparada* de aquella operación financiera (DS, s. v. *malparado*).

dejar maltrecho > *quedar/salir maltrecho*

- (71) El abismo entre escuela privada y estatal *deja maltrecho* el

18 La forma transitiva *volver loco* (a alguien) puede tener otro significado ('gustarle mucho') (NGLE: 2845, § 38.2q).

sistema educativo británico (CREA).

- (72) En este caso es evidente que el futuro político de Benet *quedaría maltrecho* (CREA).

dejar vacante > quedar vacante

- (73) El adiós del brasileño *deja vacante* la plaza de delantero y... (CREA).

- (74) La plaza de delantero *queda vacante* por el adiós del brasileño.

5.2. Cambios de categoría gramatical

Dado que la colocación es un vínculo de dos lexemas, es posible el cambio de categoría gramatical que afecta a algunas colocaciones (Hausmann 1979: 191, n. 9; Koike 2001: 28). En el caso de las colocaciones verboadjetivales, es limitada la posibilidad de este cambio. Sin embargo, hay algunas que admiten la nominalización del adjetivo integrante de la colocación. Así, *salir airoso* tiene su forma nominal *salida airosa*, que conforma, a su vez, varias colocaciones complejas al combinarse con algunos verbos (*buscar/encontrar/lograr/conseguir una salida airosa*):

- (75) Euskadi acababa de acudir a las urnas, según todos los indicios el comando “Zaharra” trataba de *buscar una salida airosa* a la operación... (CREA).

La colocación *salir airoso* tiene, además, como correlato la estructura *salir airosamente* (V + Adv.)¹⁹:

- (76) Me sorprendió lo *airosamente* que *salió* de aquel embrollo (DCPEC, s. v. *airosamente*).

19 Otras colocaciones como *salir triunfante* o *salir ileso* parecen no tolerar el cambio de categoría funcional: **salida triunfante*, **salida ilesa*.

El vínculo que hay entre los lexemas que conforman las series *mirar perplejo*, *resultar palpable* y *quedar impune* se mantiene en *mirada perpleja*, *resultados palpables* y *quedar en la impunidad*, respectivamente.

6. RESUMEN

A modo de conclusiones, vamos a resumir en el siguiente cuadro las características sintácticas y semánticas de las colocaciones verboadjetivales.

			Colocación funcional	Colocación con verbo pleno
a)	Verbo	Función	semicopulativo, de apoyo	pleno
		Significado	deslexicalizado	con significado léxico
b)	Adjetivo	Función	atributo, parte del verbo complejo	complemento predicativo
c)	Peso semántico		en el adjetivo	en el verbo y en el adjetivo

- a) Al atender al significado léxico del verbo, se distinguen dos tipos de colocaciones verboadjetivales: las colocaciones funcionales, en las que el verbo está deslexicalizado, y las colocaciones con verbo pleno, en las que el verbo conserva su significado léxico.
- b) En las colocaciones funcionales el adjetivo forma parte del verbo complejo, por lo que el adjetivo no puede suprimirse, mientras que en las colocaciones con verbo pleno el adjetivo funciona como complemento predicativo orientado al sujeto o al CD, y en la mayor parte de los casos su presencia no es obligatoria.

- c) En las colocaciones funcionales el peso semántico está en el adjetivo, el cual elige el verbo con el que se combina, mientras que en las colocaciones con verbo pleno mantienen sus respectivos significados léxicos tanto el verbo como el adjetivo.

Dadas estas circunstancias, creemos que, aunque no se trata de las típicas colocaciones, podrían formar una clase más de colocaciones léxicas del español las combinaciones preferentes entre verbo y adjetivo que hemos analizado en estas páginas.

REFERENCIAS BIBLIOGRÁFICAS

- Alba de Diego, V. y Lunell, K.-A. (1988), «Verbos de cambio que afectan al sujeto en construcciones atributivas», en *Homenaje a Alfonso Zamora Vicente, I Historia de la lengua: El español contemporáneo*, Madrid: Castalia. 343-359.
- Barrios Rodríguez, M.^a A. (2015), *Las colocaciones del español*, Madrid: Arco Libros.
- Bosque, I. (2006), *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo*, Madrid: SM.
- Demonte, V. y Masullo, P. J. (1999): «La predicación: Los complementos predicativos», en I. Bosque y V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe, cap. 38, 2461-2523.
- Fente, R. (1970), «Sobre los verbos de cambio o “devenir”», *Filología moderna*, 38, 157-172.
- Gutiérrez Ordóñez, S. (1986): *Variaciones sobre la atribución*, León, Universidad de León.
- Hausmann, F. J. (1979), «Un dictionnaire des collocations est-il possible?», *TraLiLi*, 17/1, 187-195.
- Koike, K. (2001), *Colocaciones léxicas en el español actual: estudio formal y léxico-semántico*, Alcalá de Henares/Tokio: Universidad de Alcalá/Takushoku University.
- Lorenzo, E. (1970), «Sobre los verbos de cambio», *Filología moderna*, 38, 173-197.
- Morimoto, Y. y Pavón Lucero, M.^a V. (2007), *Los verbos pseudo-copulativos del español*, Madrid: Arco Libros.
- Porroche Ballesteros, M. (1988), *Ser, estar y verbos de cambio*, Madrid: Arco Libros.

RAE y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009), *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros.

RAE y Asociación de Academias de la Lengua Española (2010), *Nueva gramática de la lengua española: Manual*, Madrid: Espasa Libros.

SIGLAS UTILIZADAS

CREA = Real Academia Española: Banco de datos (*CREA*) [en línea]. *Corpus de Referencia del español actual* <<http://corpus.rae.es>> [2007–2015]

DCPEC = Bosque, I. (2006), *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo*, Madrid: SM.

DD = Maldonado González, C. (1993), *Diccionario didáctico de español. Intermedio*, Madrid: Ediciones SM.

DP = Marsá, F. (dir.) (1982), *Diccionario Planeta de la lengua española usual*, Barcelona: Planeta.

DRAE = Real Academia Española (2001), *Diccionario de la lengua española*, Madrid: Espasa-Calpe.

DS = Gutiérrez Cuadrado, J. (dir.) (1996), *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Madrid: Santillana.

NGLE = RAE y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009), *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros.

(原稿受付 2015 年 9 月 11 日)

〈論 文〉

国楽改進社幹事社員

— その功績と限界 —

久米井 敦 子

要 旨

中国民族音楽の父として知られる劉天華はその後半生を自ら立ち上げた「国楽改進社」の活動に費やした。それは「国楽の改進とその普及」を目指した音楽団体だった。その発起人たちは、ほとんどが北京女子師範大学、北京大学、北京芸術専科学校で劉天華が教えた若者たちであった。彼らは国楽改進社とどのように関わったのであろうか。劉天華の急逝によって国楽改進社が事実上消滅したあと、どのような人生を辿ったのだろうか。

本論は国楽改進社の発起人のうち、主に蕭淑嫻、曹安和、程朱溪の3人の人物を取り上げ、彼らの生平や業績を検証したものである。

蕭淑嫻と曹安和は北京女子師範大学音楽系で劉天華に琵琶を学んだ。卒業後、蕭淑嫻はブリュッセルへ留学し、中華人民共和国建国まで欧州で過ごし、帰国後は中央音楽学院複調教研室で西洋の音楽理論に基づいた中国音楽の理論化、体系化に取り組んだ。曹安和は琵琶の研究家、演奏家として中国民族音楽の発掘や保存、整理に従事した。程朱溪は北京大学の聴講生として劉天華から二胡を学び、国楽改進社機関誌である『音楽雑誌』の編集に貢献した。蕭淑嫻と曹安和は音楽の専門家となり、西洋音楽、中国音楽それぞれの分野で「国楽の改進と普及」という国楽改進社の目指した音楽事業を実践した。しかし国楽改進社の幹事社員には程朱溪のような愛好家レベルのアマチュアも多い。そうした人材の層の薄さは音楽専門団体としての国楽改進社の活動の限界の1つであったと考えられる。

キーワード：国楽改進社、劉天華、蕭淑嫻、曹安和、程朱溪

はじめに

劉天華（1895-1932）は現在「民族音楽の父」と呼ばれ、中国民族音楽の近代化と発展に多大な貢献をした人物と位置付けられている。中でも卑俗な楽器とされていた二胡を芸術の域まで高め、多くの弟子を育成し、現在の二胡音楽の礎を築いたことが高く評価されている。彼が創作した10の二胡独奏曲は、そのすべてが名作として現在も多くの演奏家や愛好家によって弾き続けられている。

しかし、劉天華は生涯のすべてを二胡芸術に捧げたわけではない。劉天華の短い人生の後半の音楽事業は自ら立ち上げた「国楽改進社」の活動が中心であった。二胡芸術への貢献はその事業の一部であったにすぎない。

国楽改進社は「国楽の改進とその普及を模索する」⁽¹⁾ことを宗旨として創立された音楽団体であった。劉天華とともに国楽改進社を立ち上げた発起人たちは、ほとんどが劉天華の若い教え子たちであった。彼らは師である劉天華が立ち上げた国楽改新社とどのように関わったのであろうか。劉天華の急逝によって国楽改進社が事実上消滅したあと、どのような人生を辿ったのだろうか。国楽改進社における経験は、その後の彼らの音楽活動にどのように反映されたのだろうか。本論は国楽改進社の発起人のうち主に3人の人物を取り上げ、彼らの生平や業績を検証し、考察するものである。

1 劉天華と国楽改進社

1-1 劉天華の後半生

1922年4月、劉天華は江蘇省立第五中学の音楽教師の職を辞し、北京大学音楽研究会（以下「音楽研究会」）へ琵琶教師として赴任する。同年7

月、蕭友梅の働きによって音楽研究会が北京大学附設音楽伝習所（以下「伝習所」）へ改編されてからも、引き続き教鞭をとり、琵琶のみならず、通俗的で最高学府で教えるのにふさわしくないと考えられていた二胡を教えた。伝習所の同僚には、蕭友梅のほか、楊仲子、ガルツらがいた。劉天華は彼らとともに、伝習所の他に北京芸術專科学学校音楽科（以下「芸專」）、北京女子高等師範学校音楽系（以下「女高師」、1924年に「北京女子師範大学音楽系」に改称、以下「女師大」）で教鞭をとった。

1927年7月21日、当時北京を支配していた奉系軍閥を率いる張作霖は、教育費を削減するために北京の9つの国立大学を統合して「京師大学校」に改編するという政策を發布した。教育総長に就任した劉哲は自らその校長となり、音楽を「風紀を乱し、社会に無関心である」と断罪、それを理由に伝習所、芸專音楽科、女師大音楽系を廃止する⁽²⁾。翌年6月、国民革命軍が入城して北京の主権は国民政府に移ったが、伝習所は復活を果たせなかった。北京大学の音楽教育は音楽愛好者の学生たちによって創設された「音楽研究会」で課外活動として細々と続けられた。北京大学音楽研究会は1930年に「北京大学音楽学会」と改称し、正式な課外活動団体へ昇格した。楊仲子（ピアノ）、劉天華（ヴァイオリン、琵琶、二胡）、張友鶴（古琴）、趙麗蓮（合唱）が指導に当たった⁽³⁾。また1929年には国立北平大学芸術学院音楽科が創立し⁽⁴⁾、劉天華はそこでも教鞭をとった。劉天華の二胡の直弟子の陳振鐸（1904-1999）や蔣風之（1908-1986）はそこで劉天華に師事した。

1932年6月、劉天華は盛り場の天橋で芸人の音楽を採集中に伝染病にかかって急逝する。享年37歳であった。死後、兄の劉半農が中心となって『劉天華先生記念冊』を発行した。この『劉天華先生記念冊』には各地の100名以上から寄せられた弔文と、劉天華の全作品の楽譜（五線譜、工尺譜）が掲載された。劉天華の全作品を掲載した出版物はこれが初めてとなる。

1-2 国楽改進社

劉天華の実弟でのちに劉天華の主要後継者の一人となる劉北茂（1903-1981）の回想によれば、劉天華は早い時期から国楽の研究や保存を目的とする組織の必要性を感じていたという⁽⁵⁾。国楽改進社はその長年の思いの実現であった。

1927年5月、劉天華は「国楽改進社」を結成した。国楽改進社は「国楽の改良とその普及を模索する」ことを宗旨とした音楽団体である⁽⁶⁾。翌年1月には機関誌『音楽雑誌』を創刊し、経済状況が逼迫した苦しい環境の中4年間で不定期に10期（期は号の意味）を発行し、多くの論説や楽譜を発表した。『音楽雑誌』は国楽改進社の活動を知るうえで唯一の資料と言っても過言ではなく、大変貴重な記録である。

国楽改進社成立の過程を知るうえで参考になるのは、同社の「文書部会務報告」である⁽⁷⁾。

1927年4月15日、女師大で国楽改進社創立のための準備会が開催された。発起人の全員が出席し、以下のことが議論された。

- 一、本社組織大綱
- 二、選挙により社章草記委員として徐義衡、金武斌を選出
- 三、成立大会日程を5月1日に決定（警察が集会を禁止したため、5月15日に延期）

そして5月15日に芸専で成立大会が開催された。この時もやはり全発起人が出席した。内容は以下の通りである。

- 一、劉天華先生を主席として選出
- 二、討論事項：本社社章の承認

三、選挙：以下の 15 人を本社執行役員として選出
（省略）

四、記念撮影

準備会、成立大会の両方に全員が出席した発起人は、「国楽改進黨縁起」によれば以下の 35 人である⁽⁸⁾。

衡徐義 ⁽⁹⁾	周宜	李光涛	廖憲均
徐炳麟	王頤年	熊泌	梅茂鼎
韓樞華	蕭淑嫻	林之棠	鄭志
呉伯超	王同華	程朱溪	郭紹猷
柯政和	謝蘭郁	金式斌	賀青蓮
劉天華	張萃如	蕭從芳	李文淑
張友鶴	潘君方	楊筱蓮	楊慶功
鄭穎蓀	曹安和	邵增昕	張鳳昌
呉益泰	李淑青	廖賛化	

この 35 人全員の経歴はわからないが、劉天華、北京師範大学で教鞭をとっていた柯政和、古琴演奏家の鄭穎蓀以外の者は、おそらく劉天華の教え子と思われる。資料から判断が可能な範囲で所属学校別に列举してみよう⁽¹⁰⁾。

女師大音楽系の学生：周宜、汪頤年、韓樞華、蕭淑嫻、王同華、謝蘭郁、張萃如、潘君方、楊筱蓮、曹安和、李淑青

北京大学の学生：徐義衡、李光涛、徐炳麟、呉伯超、程朱溪、金式斌、蕭從芳（＝蕭伯青、蕭從方とも表記）、張友鶴、林之棠

芸専の学生：廖憲均、郭紹猷、楊慶功、邵增昕、李淑青、廖賛化、熊泌

成立大会で採択された国楽改進社「社章」第5章第18条によれば、この35名の発起人は自動的に「幹事社員」となった。幹事社員とは何か。以下、「社章」を参考に論じてみたい。

「社章」によると、国楽改進社の社員は「社員」、「幹事社員」、「名誉社員」の3種類に分かれ、以下のように規定されている（第2章第4条）。

- 一、社員—本章第3条（「本社社員は国籍を問わず、職業の区別なく、国楽研究に興味を持ち、本社宗旨に賛同し、本社社章を遵守するものはすべて社員となることができる」：引用者補）の規定に合致する者
- 二、幹事社員—本章3条の規定に合致し、かつ国楽または西楽に対してすでに相応の研究を有し、個人の時間、精神の一部を国楽の長期的な探求のため犠牲にすることができ、本社に対して真摯な気持ちで奉仕できる者（下線引用者）
- 三、名誉社員—社会において高い評価を得ている芸術家、あるいは芸術を熱心に提唱する者

幹事社員は組織のために個人の「時間」と「精神」を「犠牲」にすると
いうきわめて強い覚悟が求められている。

幹事社員となる条件を、社章は次のように定めている。

第4章第2項の規定（幹事社員の資格取得後1年以内に基金へ10円を納付すること：引用者補）を満たし、以下の手続きを経て、本社が幹事社員証を発行した者は本社幹事社員となることができる。

一、以下の3項のうち1項を有し、執行委員会の審査により認可を経る。

甲、幹事社員5人の紹介がある。

乙、本社へ音楽に関する作品を提出したことがある。

丙、本社演奏会に出演したことがある。

二、入社費および基金を納付する。ただしすでに社員の資格を取得している者は再び入社費を納付しなくてよいこととする。

三、幹事社員願い書に記入をする。（第5章第18条）

本社発起人は言うまでもなく幹事社員であるが、本章（第5章：引用者補）10条（ママ、18の誤りか：引用者補）第2則の手続きを経なければならない。（第5章第220条、下線引用者）

35人の発起人のうち「本章第10（ママ）条第2則の手続き」を経なかった者がいたかどうかはわからないが、この時点では35人の発起人が幹事社員として、「個人の時間、精神の一部を国楽への長期的な探求の犠牲とする」こととなっていた。

では、国楽改進黨はその宗旨「国楽の改進黨とその普及を模索する」ことを実現するためにどのような事業計画を立てていたのか⁽¹¹⁾。

我々はこの事業を芸術のための大事業であり、少人数でなし得るものではなく、全国の同志と連絡を取り、ともに行わなければならないと考える。流派の垣根を越え、皆で力を合わせることで、この国の音楽を救わなければならない。

我々は各地に存在する模範とすべき大師、現存する楽曲、楽譜、楽器、そして人々がどの楽曲に一番熱い感情を抱くかを調査しなければならない。

我々は経済力が及ぶ限り、国楽に関する図書、古今の楽器各種を収集し、図書館と博物館を組織しなくてはならない。まだ出版されていない古今の楽譜を印刷する方法を考え、楽譜のない楽曲を記録し、音

楽の名演奏を録音機で録音し、現在の国楽がこれ以上徐々に消滅しないようにしなくてはならない。

我々は記譜法を改良し、世界の音楽と統一させる。各種の演奏法をできるだけ記録し、系統的な書籍を編集することで、一般の人々に学んでもらう。楽器工房を作り、楽器製造を改良する。

多くの人々の意見を集め、楽曲と楽器の優劣を判断し、取捨選択する。

我々は西楽を紹介し、改進の補助とする。西楽を手本として複数の声部を配し、さらに西洋楽器を用いることで、世界の音楽と肩を並べるようにする。

創作の方面で進歩を図り、我々の時代の芸術を表現する。

刊行物の発行、学校の創設、研究所の組織などについては言うまでもなく、経費、人材さえ揃えば、すぐに順次実行する。

このように、東西の音楽を研究対象とした壮大な事業計画を打ち立てて出発した国楽改進社の活動は、人的交流、音楽の保存、西洋音楽の紹介、西洋楽器の研究、創作などの多方面において機関誌『音楽雑誌』誌上で実現することができたと言ってよい。

『音楽雑誌』に掲載された記事や楽譜は、雑多とも言えるほど、古今東西を問わない多様なものであった。劉天華の一部の作品⁽¹²⁾は『音楽雑誌』誌上で最初に発表された。また、寄稿者たちは様々な領域の第一人者が集まっていた。たとえば中国の図書館学の草分け的存在である袁同礼（1895-1948）は、国立北平図書館主任という立場から「新書紹介」（第1期）、「西人関於国楽之著作」（第3期）、「北平図書館西文音楽書目録」（第4期）などの資料目録を提供した。国楽改進社創立前に上海へ移って国楽音楽院を創立した蕭友梅からは創作歌曲「愛」、「聞芸専音楽系解散有感」（ともに第1期）、「国難歌」（第4期）などが寄せられた。楊仲子は「質疑」（第

2 期)、「北平音楽運動」(第 4 期)といった文を寄せ、当時の北京音楽教育が置かれた状況を外に向けて発信している。その他、文学者の劉半農、言語学者の趙元任といった著名な知識人が論説や創作歌曲を寄稿した。その他にも琵琶奏者の程午嘉、昆曲家の曹心泉、後に中国の合唱の発展に貢献をした李抱忱、1984 年出版の『中国音楽詞典』の主編である音楽学者の繆天瑞など、わずか 10 期の雑誌でありながら、実に幅の広い寄稿者を擁していた。

しかし、『音楽雑誌』はわずか 10 期を発行するにとどまったため、張友鶴の「学琴浅説（浅説は入門の意味）」が 10 期を通して連載をしたという例外はあるものの、どれも断片的で、総合的な成果を得るには至らなかった。そして 1932 年 6 月の劉天華の突然の死により、国楽改進社は活動を停止した。

その背景に社会情勢の悪化があったことは言うまでもない。1931 年の満州事変に象徴されるように、この時期は中国全土で日本による侵略行動が広がっていた。そして 1937 年 7 月 7 日の盧溝橋事件をきっかけに、日中両国が全面戦争に突入したことは周知の事実である。北京が日本の占領下に入ると、多くの知識人や芸術家は北京を脱出し、南京から首都機能を移した「陪都」の重慶や、共産党の根拠地であった延安などへ移った。

こうした社会情勢と劉天華の急逝によって、国楽改進社は活動の停止を余儀なくされた。では、「個人の時間、精神の一部を国楽への長期的な探求の犠牲」にすることを求められたはずの幹事社員たちはどうなったのだろうか。

3 国楽改進社幹事社員

3-1 「国楽改進社在京幹事社員及名誉社員合影」

右の写真は『音楽雑誌』第1期の巻頭に掲載されたもので、「国楽改進社在京幹事社員及名誉社員合影（合影は集合写真の意味）」という集合写真である。撮影時期は「1927年12月」となっているが、どのような機会に



国楽改進社在京幹事社員及名誉社員合影
（『音楽雑誌』第1期）

撮影されたのか明記されていない。国楽改進社立ち上げから約半年後が経過した時期なので、おそらく「最低半年に一度執行委員会によって招集される」と社章で制定された「幹事社員大会」の場であろう（第6章第21条）。

この写真は『劉天華全集』に「国楽改進社在北京的社員及名誉社員合影」というタイトルで転載されているが、そこには以下のような説明がある。

後列

右から2：張友鶴，3：劉天華，4：楊仲子，5：鄭穎蓀，6：蕭伯青，
7：程朱溪，8：金式斌

前列

左から2：曹安和，4：蕭淑嫻，7：黃自夫人の汪頤年，9：韓樞華

ここに名前のある者のうち、後列の楊仲子は「名誉社員」である。それ以外のものは、劉天華を含め全員「幹事社員」の名簿に名前がある。写真の説明に名前のないメンバーたちも、その若さから判断すると「名誉社員」とは考えにくいので、幹事社員であろう。

国楽改進のために時間と精神を捧げるべく期待された若い幹事社員たちは、どんな人物だったのか。まず、比較的資料が多い蕭淑嫻、曹安和、程朱溪について述べてみよう。

3-2 蕭淑嫻⁽¹³⁾

蕭淑嫻は蕭友梅の姪で、1905年に天津で生まれた。父親は広東省出身で、香港で英語を学んだ医者だった。蕭淑嫻が生まれたころは洋務運動が推進され、鉄道の敷設事業において人材が求められていた。蕭淑嫻の父は英語の能力を評価されて長春鉄路局へ招聘され、医者から交通事業へと転職した。蕭淑嫻は父の転勤に伴い、長春や武漢などの土地で育った。

1920年に叔父の蕭友梅がドイツから帰国すると、蕭淑嫻は家を出て北京の叔父の家に寄宿して中学に通い、1924年に女高師から改名したばかりの女師大に入学、1年間の予科での勉強を経て音楽系に入学し、ドイツ系ロシア人のガルツにピアノを、劉天華に琵琶を学んだ。

女師大、つまり北京女子師範大学は、女子教育を目的とした中国で最初の国立大学だった。1908年に京師女子師範学堂として出発し、国立北京女子高等師範学校（1919年）、国立北京女子師範大学（1924年）と改編を繰り返した。

女高師には英文、哲学、数理、理化、史学地理、国文、教育、博物の6つの系（学部に対応する）と、音楽体育専修科と2つの予科のクラスがあった。1920年9月、蕭友梅と楊仲子は音楽科の創設を担当し、さらに翌年に蕭友梅の提案によって体育と音楽が引き離され、音楽科が独立した。そして1922年、音楽科は音楽系に昇格し、1つの学部となった。学生募集

人数は毎年異なるが、1924 年は 28 人であったという。教師には専任と兼任の 2 種類の身分があった。1925 年当時、専任教員は創立者である蕭友梅、楊仲子のほか、ロシア系ドイツ人ピアニストのガルツと、声楽教師の趙麗蓮の 4 人だったが、ほかに多くの兼任教師を雇っていた。劉天華はその中の 1 人で、1922 年からヴァイオリン、二胡、琵琶を担当していた。1924 年のカリキュラム表⁽¹⁴⁾によれば、女子大音楽系にはピアノと音楽理論の 2 つの「主科」のほかに、合唱、ピアノ、本国楽器（簫、笛、月琴、琵琶のうち 1 つ）、訳譜（国歌の曲譜を五線譜に書き換えること）、普通楽理、和声解析、音楽史といった「普通音楽課程」が準備されていた。これは現在の日本の大学の副専攻に相当すると推察される。前掲の写真に写っている 11 人の女子学生たちは、ピアノや音楽理論といった「主科」で西洋音楽を専攻するかたわら、「普通音楽課程」として「本国楽器」を学んでいたであろう⁽¹⁵⁾。

女師大時代の蕭淑嫻の活躍を見てみよう。

1928 年 5 月 29 日、30 日に「平安電影」で開催された「ガルツ教授留別音楽会」で、蕭淑嫻は学生たちのソロ演奏の最後に「第二匈牙利雜感」（リスト「ハンガリー狂詩曲」第 2 番と思われる）を演奏した⁽¹⁶⁾。また、1928 年 1 月 12 日午後 7 時半から、北京の協和学校大礼堂で開かれた「国楽改進社首次（第一回の意味）演奏会」では、女師大生たちによる第三部の英語によるオペラ「五月花（The Crowning for Love）」に出演している⁽¹⁷⁾。

国楽改進社機関誌『音楽雑誌』には「蘇柏略伝（シューベルト略伝）」（第 1～2 期）を寄せている。『音楽雑誌』が創刊した 1928 年はシューベルト没後 100 年だった。国楽改進社は「シューベルト記念号」を発行しようとしたが実現できず、専門欄を設け、そこに蕭淑嫻が「略伝」を書き、掲載したのである。

現在把握できる学生時代の蕭淑嫻の業績はこれだけであるが、このほか

にも歌曲のピアノ伴奏などで多く活躍したという。

1928年に卒業したあとは、前年に叔父の蕭友梅が上海で創設した国立音楽院へ赴任し、ピアノを教えた。租界だった上海には西洋音楽を日常的に楽しむ文化的土壌があり、欧米から多くの演奏家が集まっていた。蕭淑嫻は上海工部局管弦楽団のイタリア人指揮者マリオ・パーチャ、国立音楽院で教鞭をとっていたピアニストのザハロフに師事してさらにピアノの研究に努めた。

1930年にベルギーのブリュッセルにある王立音楽学院へ留学した。最初はピアノを専攻したが、手が小さかったために作曲科へ転科した。在学中は優秀な成績を修め、特に対位法では一等賞を取ったという。

1935年、ドイツ人の指揮者ヘルマン・シェルチェン（Hermann Sicherchen）のマスタークラスに参加、修了時にベートーヴェンの交響曲第一の第一楽章を指揮した。それを期にシェルチェンと結婚し、その後はスイスで暮らした。夫のシェルチェンはユダヤ人ではなかったが、作家のトーマス・マンや科学者のアインシュタインとともにナチスのブラックリストに名前を連ねていたため、ドイツの国籍を放棄しヨーロッパ各地で指揮をして生活していた。永久中立国スイスとはいえ、ナチスが台頭する戦時下での異国生活は、蕭淑嫻にとって不安なものであった。

そうした不安定な海外生活において、蕭淑嫻はスイス各地から依頼を受け、中国の文化や芸術に関する講演を重ねた。その内容は『詩経』から「義勇軍行進曲」に至るまで、非常に広い領域にわたっていた。また、1941年の蕭友梅の訃報を受けて管弦組曲「懷念祖国」を作曲した。この作品は中国の民族音楽、民間音楽から素材を取ったもので、中国の民族的特色を色濃く表現したものであった。

中華人民共和国建国後、1950年に3人の子供を伴って帰国した蕭淑嫻は中央音楽学院に招かれ、同院の「複調教研室」へ配属された。複調とは多声音楽（polyphony）のことである。蕭淑嫻はまず、中国の伝統的な

音階や調式（旋法）などの理論体系を西洋の音楽理論と対比させながら整理し、さらに中国的な多声音楽の創作を実践した。たとえば、河北民謡の「小白菜」をカノンにアレンジしたり、陝北の「信天遊」を編曲して「民歌前奏曲」という作品を創作したりした。一方、オペラ『カルメン』、『バルトークの曲式と和声』（エルノ・ヴェンドバイ著）、『対位法概要』（シャルル・ケ克蘭著）など、多くの西洋の音楽書を翻訳した。西洋音楽を参考にして中国音楽の創作や体系化を行ったこれらの仕事は、国楽改進社が目指した「西楽を紹介し、改進の補助」とし、「西楽を手本とし、複数の声部を配」すという事業にほかならない。蕭淑嫻は国楽改進社の遺志を継承したのである。

3-3 曹安和⁽¹⁸⁾

曹安和は1905年に無錫の知識人の家庭に生まれた。曾祖父と祖父は医者、父は師範学堂を卒業したインテリで、学堂を営んでいた。幼少期、曹安和は昆曲愛好家の父の歌や叔父の弾く琵琶などの音楽に囲まれて過ごした。のちに父の仕事の関係でチチハルに移った。そこではよく隣人の吹く簫が聞こえ、曹安和はその音色に聞き入っていたという。

1919年に家族で再び無錫に戻り、無錫女子師範、競志女子中学で学ぶ。その時期には従兄の楊蔭瀏（1899-1984）から昆曲を習った。週に数回行われていたレッスンは1923年に楊蔭瀏が上海の聖約翰大学に入学して無錫を離れるまで続いた。

楊蔭瀏はのちに中国民族音楽研究の大家となり、民族音楽の保存に多大な貢献をし、多くの論著を出版した。曹安和の生涯にわたる研究パートナーとなる人物である。

1924年に曹安和は女師大音楽系を受験した。入試には筆記試験以外に「聴音」、「訳譜」、「読譜弾奏」の実技試験があった。「読譜弾奏」は、オルガンとピアノの楽譜を両手で弾く能力を試す試験で、西洋楽器を習ったこ

とのない曹安和はこれに対応することができなかった。しかし系主任の蕭友梅は、彼女の音の識別能力と、作文の答案に現れたすぐれた思想を高く評価し、合格にした。

女師大では劉天華から琵琶を、ガルツからピアノを学んだ。劉天華は基本練習を省略し、崇明派の沈肇洲が著した『瀛洲古調』を教えた。沈肇洲は崇明派の琵琶の名手である。劉天華は江蘇省の教員時代に各地の音楽の名手を訪ねて教えを仰いでいたが、沈肇洲はその名手の一人だった。劉天華は自分が伝授された名手の琵琶を曹安和に伝授したのである。

1929年に卒業、その後は母校に残り、恩師である劉天華とともに琵琶を教えた。1932年に劉天華が急逝した後も琵琶教育を一人で支え、近代音楽専門教育における中国初の女性琵琶教師となった。

日中戦争が始まると曹安和は北京を離れて一旦無錫に帰り、その後上海の知人のもとに身を寄せた。1940年には日本占領下の上海を離れ、ベトナムのハノイや雲南を経由し、翌年のはじめに重慶へ到着、教育部音楽教育委員会編輯として国民政府の教育文化政策に参加した。同年9月、重慶青木関の国立音楽院の助教授に就任し（のちに教授に昇格）、琵琶、昆曲、笛の教育を担当、日中戦争終結後は1946年の国立音楽院の南京への移動に伴い南京へ赴任した。

中華人民共和国建国後は中央音楽学院の研究部の第一期メンバーとなった。音楽研究部には1954年に民族音楽研究所が創立され、その後この研究所は1964年に中国音楽学院へ、1973年には中国芸術研究院へと所属先を変えた。曹安和もそのたびに異動を繰り返し、生涯民族音楽研究所で仕事を続けた。

長年にわたる音楽事業のうち、曹安和が最も力を入れたのは中国音楽の記録、録音、整理、研究であった。その事業のほとんどは従兄の楊蔭瀏との共同作業であった。2人が1950年に無錫で盲目の芸人阿炳（華彦鈞）が自作自演する「二泉映月」、「聴松」などを録音して保存したことは有名

である。その他に『閔漢卿戲劇楽譜』（1959）、「『西廂記』四種楽譜選曲」（1962年）など共編著を22篇、単著論文40余篇を残した。

国楽改進社社員としての曹安和の活動では、1928年1月12日の「国楽改進社首次音楽会」で女師大の同級生たちと琵琶を弾いたことが挙げられる。第1部では、潘君方、李淑清、王同華、張萃如ら女師大の学生たちと「快板」を、第2部では韓権華、廖賛化、邵増听、金式斌、李光涛、蕭従方、程朱溪らとともに「虞舜薰風曲」を合奏し、第3部のオペラ「五月花」にも出演するという活躍ぶりであった。

『音楽雑誌』には曹安和の署名のある記事はない。しかし国楽改進社幹事社員となった女師大卒業生の中で唯一、国楽の専門家に成長した曹安和は、「国楽改進」という劉天華のライフワークを最も直接的に受け継いだ弟子である。

3-4 程朱溪⁽¹⁹⁾

程朱溪（1906-1951）は安徽出身である。彼の父は1920年代後半に天津の南開大学へ国文教師として赴任した。そこでは作家の老舎と同僚だったという。赴任したきっかけは生徒たちからの推薦であった。その生徒の一人は著名な教育家の陶知行であったという。程朱溪は2歳年長の兄の程万孚とともに父に同行し、南開中学へ通った。そのころから文学青年ぶりを発揮し、余暇の時間を使って文芸作品を書き、投稿を繰り返していた。1926年に南開中学を卒業し北京大学を受験したが合格しなかったため、中国大学に籍を置きながら北京大学の近くに住み、北京大学の授業を聴講していた。同時に詩や小説などを投稿し、原稿料で生活をしていた。寄稿先は『大公報』、『国聞週報』、『東方雑誌』などの有名な新聞雑誌であった。その後散文詩集『天鷲集』、小説集『紫色的炸药』などを出版したり、トーマス・ハーディーやゴッティの小説の翻訳を发表或したりした。また雑誌『人間月刊』に小説や翻訳を寄せ、沈従文とも往来があった。1935年に北

京を離れ南京へ移り、国民党政府の役人として南京や安徽などで宣伝工作や行政警察員などの任務に就く。中華人民共和国建国後は1951年に病没するまで南京で翻訳などの仕事をして過ごした。

程朱溪は北京大学で聴講生をしながら、伝習所の選科で劉天華から二胡を学んでいた。そして国楽改進社の発起人の一人となり、その文学的才能を評価され、幹事社員として機関誌『音楽雑誌』の編集の実務を任された。

程朱溪の国楽改進社社員としての業績は主に、『音楽雑誌』の編集と投稿である。雑誌の活動方針を宣言する「発刊詞」（第1期）の執筆も程朱溪の手にゆだねられた。『音楽雑誌』編集における程朱溪の存在はそれほど大きかったのである。程朱溪は本名のほか、「朱溪」、「溪」のペンネームを用い、多い時には同時に数編の文章や翻訳を投稿している。そのほとんどは、西洋の音楽家や音楽作品に関する短い逸話の翻訳であった。余白を埋めるためのコラムとして書かれたものも多かった。

演奏活動としては、国楽改進社の「首次演奏会」で、他の幹事社員たちと「虞舜薰風曲」の合奏に参加していることが確認できる。

国楽改進社発起人のうち、社の活動拠点であった『音楽雑誌』編集の実務にもっとも尽力をしたのは程朱溪であった。しかし程朱溪はあくまでも文学青年であり、編集者としてその編集能力と文章力をもって協力したのであり、音楽の専門家ではなかった。国楽改進社の解散後は、音楽との関わりを持たず、国民党のもとで役人へ転身した。

3-5 その他の幹事社員

最後に、その他の幹事社員たちについて簡単に述べておこう。

女師大音楽系の学生には「名士」の妻となり、夫を支える一生を送ったものが多かった。女子教育の萌芽期だった当時、音楽を花嫁修業の1つと考えて女師大に入学した良家の才媛も多かったのである⁽²⁰⁾。

幹事社員のうち、汪頤年は作曲家黄自（1904-1938）の妻として有名で

ある。黄自はアメリカで心理学と音楽を学んだ後、蕭友梅とともに草創期の国立音楽院で教鞭をとった近代中国を代表する作曲家である。

張萃如は南京の中学で教鞭をとった後、外交情報司長の李迪俊という人物と結婚している。

韓樞華（1903-1985）は天津の「八大家」に数えられる海運商「天成号」⁽²¹⁾の娘で、1927年10月、飛び級をして女師大を卒業した。その後にアメリカへ留学し、帰国して母校などで教鞭をとるが、1936年に再度渡米し研究生生活を送った。1945年の日中戦争終結直前に国民党高級将校の衛立煌と結婚し、その後は政治活動に従事し、1977年には第4期全人代表となった。劉天華に師事して琵琶を学んでいた当時は、劉天華とともに柯政和の主催する音楽結社「北京愛美樂社」の発起人となったり、『音楽雑誌』にピアノ独奏曲「Vacation moods（暇日心境）」を発表したりするなど、才能に溢れた学生だった。しかし韓樞華は音楽の研究を途中でやめてしまった。国民党将校と結婚してから1977年までの彼女の経歴を示す資料は管見の限りなく、詳細を知ることにはできないが、音楽の道を断念したことは高級将校との結婚と無関係ではないはずである。

北京大学の学生のうち、徐義衡、李光涛、徐炳麟、金式斌は数学系の学生であった⁽²²⁾。彼らは伝習所の選科で劉天華に二胡を学んだ。選科とは1科目のみを学ぶ制度である。彼らのうち、李光涛は国楽改進社の「首次演奏会」で劉天華の「月夜」を独奏した。また、金式斌、李光涛、簫従方は琵琶と二胡の合奏「虞舜薰風曲」に出演している（芸専の廖賛化、邵增听の名前も挙がっている）。

呉益泰と徐炳麟は、国楽改進社結成前にすでに劉天華の二胡曲を舞台上で演奏している。1926年6月8日の伝習所師範科卒業音楽会で、呉益泰は儲振華（儲師竹）とともに「病中吟」を、徐炳麟は「月夜」を演奏した。この音楽会にはほかに徐義衡、林之棠⁽²³⁾、呉伯超が出演している。

北京大生の張友鶴は国学系の学生で、北京大学音楽研究会で劉天華の前

任者王露（王心葵，1877-1921）に古琴を学んだ。張友鶴の「学琴浅説」は『音楽雑誌』で10回にわたって連載された唯一の長期連載であった。張友鶴の名前は、劉天華や国楽改進社に関連する資料にわずかに登場するだけで、詳細はわからないが、国楽改進社の活動を長期にわたって支えたという意味では、程朱溪と並んで数少ない人物の1人である。「首次演奏会」では「搗衣」，「良宵引」（鄭穎蓀との琴瑟合奏），「流水」の3曲を演奏している。

幹事社員の伝習所生の中で、呉伯超と蕭從方は師範科の学生であった。

呉伯超（1903-1949）は劉天華が江蘇省立第五中学で教えていた学生の1人で、1922年に伝習所師範科に入学し、ガルツからピアノを、劉天華から琵琶や二胡を学んだ。1927年に蕭友梅に招かれて上海の国立音楽院へ赴任、その後1931年にブリュッセルへ留学して作曲と指揮を学んだ。帰国後は重慶に赴き、1943年に国立音楽院院長となった。重慶では国立音楽院に「幼年班」を開設し、音楽の早期教育を実践した。1949年に海難事故で逝去した⁽²⁴⁾。

蕭從方は蕭伯青の名前で作家の老舎との交友で知られている。

廖憲均、郭紹猷ら芸専生の発起人たちが、中国近現代音楽史において著名な音楽家や音楽教育家として彼らの名前を見ることは、管見の限りない。今後の資料発掘と研究を待たなければならない。

結論 — 国楽改進社幹事社員たちの功績と限界

現在二胡芸術への最大の功労者として位置付けられている劉天華は、1927年から1932年まで国楽改進社を運営した。それは「国楽の改良とその普及を模索する」ことを目指した音楽団体で、機関誌『音楽雑誌』を発行した。しかし、国楽改進社の活動は劉天華の死をもって終結した。劉天華の教え子であり、社の活動の担い手となるべき幹事社員の中に、その後

の国楽改進社の活動を継承する者は現れなかった。

しかし、「国楽の改良とその普及を模索する」という国楽改進社の宗旨は一部の幹事社員によって引き継がれた。

蕭淑嫻は海外で西洋音楽理論を学ぶ道を選び、帰国後は新しい体制の下で、西洋音楽の理論を応用し、中国の伝統音楽の音階や旋法を体系化したり、中国音楽を多声音楽に編曲したりする仕事に就いた。

曹安和は女師大卒業直後から劉天華が急逝するまで劉天華の同僚として北京の国楽教育を支えた。その後重慶青木関の国立音楽院を経て、中華人民共和国建国後には民族音楽の研究や教育に携わる第一世代の研究者、演奏家として生涯を過ごし、従兄の楊蔭瀏とともに、阿炳の「二泉映月」をはじめとする多くの音楽を記録し、後世に伝えた。

長い欧州生活を経験した蕭淑嫻と国内での活躍を続けた曹安和は、その歩んだ道と専門領域は異なっても、国楽の継承と創新に貢献をしたという意味で、劉天華の目指した国楽改進事業を継承した。

一方、国楽改進社の事業の記録をとどめる主要かつ唯一の媒体だった『音楽雑誌』の編集にもっとも貢献した程朱溪は、伝習所の選科で趣味として二胡を習う文学青年で、北京を離れた後は音楽との関係を断ってしまった。程朱溪が劉天華に師事して二胡を学んだ北京大学音楽伝習所は、劉天華が後進を育てた重要な教育拠点の1つであった。しかしこの程朱溪と同様、そこで劉天華に師事した学生たちの大半は、他の専門を学ぶ学生たちであり、いわばアマチュアの音楽愛好家にすぎなかった。

蕭淑嫻や曹安和のように国楽改進社の事業を継承し、一生涯音楽事業に貢献した一部の人々を除くと、国楽改進社の発起人に名を連ねた幹事社員たちは、良妻賢母となることが当たり前だった時代の女子学生や、他の専攻を持つアマチュアが多く、劉天華の目指した「国楽の改進とその普及を模索する」という壮大な計画を実現するにはいささか心細いメンバーだった。劉天華の死後、実質的に活動を停止せざるを得なかった国楽改進社の

限界は、こうした人材の層の薄さにあると言える。社の活動の中心となるべき幹事社員たちの顔ぶれはあまりに若く未熟であった。

《注》

- (1) 国楽改進社社章（以下「社章」）。本論で引用する社章は特に断りがない場合はすべて愛美楽社『新楽潮』第1巻第1期に掲載されたものをテキストとする。
- (2) 韓国鎭（1990）p. 89-90
- (3) 韓国鎭（1990）p. 89-90
- (4) 陳振鐸（1997）p. 90
- (5) 劉北茂（2004）p. 132
- (6) 社章
- (7) 劉育和（1997）p. 209-212。この資料は『劉天華全集』には「附一、国楽改進社文件」の7として掲載されている。原載は「国楽改進社《音楽雑誌》創刊号」とあるが、『音楽雑誌』創刊号である第1期にこの資料は掲載されていない。おそらく『国楽改進社創立刊』の誤りであろう。『国楽改進社創立刊』は1927年8月に発行された。筆者は2015年3月、北京の中央音楽学院および中国芸術研究院で現地調査を行った際に『国楽改進社創立刊』の閲覧を試みたが、調査先機関の都合により閲覧することができなかったため、未見である。
- (8) 「国楽改進社縁起」は『劉天華全集』、『劉天華記憶與研究集成』に掲載されているが、発起人名簿にはテキストごとに若干の不一致がある。本稿ではオリジナルである愛美楽社『新楽潮』第1巻第1期のテキストを引用した。
- (9) 徐義衡の誤りであろう。
- (10) 「本社首次演奏会預聞」（『音楽雑誌』第1期）、蕭伯青（1984）、韓国鎭（1990）などを参照した。
- (11) 「国楽改進社縁起」。『劉天華全集』をテキストとした。
- (12) 二胡独奏曲の「病中吟」（第8期）、「月夜」（第2期）、「良宵（除夕小唱）」（第2期）、「閑居吟」（第4期）、「光明行」（第10期）、琵琶独奏曲の「改進操」（第1期）、「虚籟」（第7期）「歌舞引」（第9期）。
- (13) 蕭淑嫻の経歴については主に向延生（1994）p. 598-607、蕭淑嫻（1990）、廖輔叔（1992）などを参照した。
- (14) 高陽（2014）
- (15) 女師大については礼斌斌（2013）、（2014）、高陽（2014）を参照した。

- (16) 「演奏会消息彙誌」(『新樂潮』第1卷第1期)。
- (17) 「本社首次演奏會預聞」(『國樂改進社』第1期)。
- (18) 曹安和の経歴については主に向延生(1994) p. 608-616, 喬建中(2005)などを参照した。
- (19) 程朱溪の経歴については主に胡其偉(2010), (2013)を参照した。
- (20) 以下, 女師大生の婚姻に関しては祁斌斌(2014)を参照した。
- (21) 王兆祥(2004)。
- (22) 蕭伯青(1984)。
- (23) 韓国鎭(1990) p. 107に掲載されているプログラムのコピーには「林之棠華」とあるが, 間違いと思われる。
- (24) 向延生(1994) p. 511-520

参考文献

- 國樂改進社『音樂雜誌』1928-1932
愛美樂社『新樂潮』1927-1929
『中国音樂詞典』人民音樂出版社, 1984年
向延生主編『中国近現代音樂家伝 1』春風文芸出版社, 1994年
呉贛伯編『二十世紀中華國樂人物誌』上海音樂出版社, 2007年
榎本康子『樂人の都上海——近代中国における西洋音樂の受容』研文出版, 1998年
劉育和主編『劉天華全集』人民音樂出版社, 1997年
陳振鐸『劉天華的創作和貢獻』中国文聯出版社, 1997年
劉北茂口述『劉天華音樂生涯—胞弟的回憶』人民音樂出版社, 2004年
方立平主編『劉天華記憶與研究集成』上海教育出版社, 2009年
岳峰編著『音樂家儲師竹—儲師竹作品及他的研究』中国文聯出版社, 2002年
『曹安和音樂生涯』山東文芸出版社, 2006年
韓国鎭「北大音樂伝習所研究 1」韓国鎭音樂論集(樂韻出版社)1990年
鄒佳宏「対國樂改進社《音樂雜誌》的研究」中国音樂(季刊)2007年第3期
張治榮「國樂改進社社刊《音樂雜誌》研究」西安音樂學院碩士學位論文, 2008年6月
李宝傑「民国時期四種同名《音樂雜誌》辦刊比較研究」音樂探索 2013年第4期
蕭伯青「憶劉天華先生補」音樂研究 1984年10期
梅雪林「從《音樂雜誌》看國樂改進社—兼談劉天華的國樂思想」音樂研究(季刊)1995年第4期

- 彭薇「劉天華“国楽改進黨縁起”漫論」文化芸術論壇 2011 年第 1 期
- 田宇「劉天華在常州任教期間的音樂活動」音樂創作 2013 年第 12 期
- 沈亜明「沈仲章與恩師劉天華」中国音楽（季刊）2015 年第 1 期
- 喬建中「一生謙謙 百年安和一曹安和先生一個世紀的音樂生涯」人民音楽 2005 年第 3 期
- 蕭淑嫻「二十年代的蕭友梅」音楽研究 1990 年第 4 期
- 廖輔叔「悼念蕭淑嫻大姐」音楽芸術 1992 年第 2 期
- 胡其偉「三十年代前後沈從文與程万孚程朱溪兄弟書信鈎沉」新文学資料 2000 年第 1 期
- 胡其偉「程朱溪的抗日小説《紫色炸藥》」中華読書報 2013 年 5 月 6 日
- 俞玉姿「中国近代高等專業音楽教育の拓荒者、奠基者—（重慶）国立音楽院院長楊仲子」中央音楽学院学報 2010 年第 4 期
- 礼斌斌「中国音楽教育史上的一颗啓明星—北京女子高等師範学校音楽系歴史研究及幾個問題的更正」『音楽研究』2013 年第 3 期
- 祁斌斌「從女高師音楽系走出的学生們」星海音楽学院学報 2014 年第 3 期
- 高陽「国立女子師範大学音楽系考」内蒙古師範大学学報（教育科学版）2014 年第 9 期
- 王兆祥「天津的首富“八大家”」天津經濟 2004 年第 8 期

【付記】 本研究は平成 26 年度拓殖大学言語文化研究所個人研究助成を受けて行われた。

（原稿受付 2015 年 10 月 5 日）

〈論 文〉

中国語の介詞フレーズ状語を巡る 語順原則について

平 山 邦 彦

要 旨

介詞フレーズが状語として用いられる場合二つの語順が存在する。一方は主語の後に置かれる語順である（「主語＋述語〔介詞フレーズ状語＋述詞性語句〕」。以下、本稿では語順(a)とも称する）。もう一方は主語の前に置かれる語順である（「介詞フレーズ状語＋中心語〔主語＋述詞性語句〕」。以下、本稿では語順(b)とも称する）。更には、介詞フレーズ状語を巡る語順表現は次の三種類に分けることができる（Ⅰ）語順(a)のみ可。（Ⅱ）語順(a)(b)が存在。（Ⅲ）語順(b)のみ可。上に示すような三種のパターンが存在する背後にはいかなる根本原則が作用しているのであろうか、更にはその中から何らかの普遍原則を見出すことができるのかという点について、初歩的な考察を行なった。その結果、「介詞フレーズの語順が三種類に分けられるのは、述詞性語句と対照して顕現される介詞フレーズの述詞義可別度に差異が見出される」という一つの共時的要因の作用していることが発見できた。

キーワード：介詞フレーズ，語順，述詞性語句，述詞義可別度，可別度領前原則

1. 問題提起

周知の如く、中国語の意思伝達において語順は肝心要の部分であり、語順体系に貫かれた規則を発見するのは重要な任務と言える。以上のコンセプトの下、本稿では介詞フレーズを用いた状語を考察対象として議論を進めていく。

介詞フレーズ状語を用いる際は次の二種類の位置を見ることができる。一方は主語の後に置かれる語順である（「主語＋述語〔介詞フレーズ状語＋述詞性語句〕」。以下、本稿では語順(a)とも称する）。もう一方は主語の前に置かれる語順である（「介詞フレーズ状語＋中心語〔主語＋述詞性語句〕⁽¹⁾」。以下、本稿では語順(b)とも称する）。

更には、語順(a)(b)に対する成立許容性を観察すると、次の三種のパターンに分けることができる。

○介詞フレーズ(I)：語順(a)のみ許容

(1) (a)⁽²⁾ 我刚从农村回来。（私は農村から帰ってきたばかりです）⁽³⁾

(b) *从农村，我刚回来⁽⁴⁾。（農村から，私は帰ってきたばかりです）

(2) (a) 我家离车站不远。（私の家は駅から遠くありません）

(b) *离车站，我家不远。（駅から，私の家は遠くありません）

○介詞フレーズ(II)：語順(a)(b)共に許容

(3) (a) 他对历史很感兴趣。（私は歴史に興味があります）

(b) 对历史，他很感兴趣。（歴史に，私は興味があります）

○介詞フレーズ(III)：語順(b)のみ許容

(4) (a) *我们关于这个问题以后再谈吧。（私達はこの問題に関して後から論じましょう）

(b) 关于这个问题，我们以后再谈吧。（この問題に関して，私達

(1) 階層分析の角度から述べると，“状語(状語)”に相対する成分は“中心語〔被修飾語〕”となる。“主語〔主語〕”と相対する成分は“謂語〔述語〕”となる。よって、厳密な言い方をすれば〔介詞フレーズ状語＋述詞性語句〕〔主語＋述詞性語句〕という記述は正確さを欠く表現となる。但し、論証の便宜上本稿では、上に挙げた表現を用いることにする。

(2) 本稿の例文の前に記した(a)(b)について、(a)は後ろに示す例文が語順(a)であることを示す。(b)は後ろに示す例文が語順(b)であることを示す。

(3) 本稿の例文に対する日本語訳は筆者によるものである。

(4) 本稿の用例について、出典を記していないものは筆者による作例である。

は後から議論しましょう

上に示す如く、日本語の場合デフォルト的に選択されやすい語順が文脈による支えが必要となるかという点に違いはあるかもしれないが、多くの場合介詞フレーズに当たる部分「農村から」「歴史に」「この問題に関して」等「名詞性語句＋助詞」の語順は通常主語の前でも後でも許容される。一方介詞フレーズ状語には、(Ⅰ)に挙げた例(1)(2)に示す如く介詞フレーズに語順(a)のみ許容されるもの、(Ⅱ)に挙げた例(3)に示す如く語順(a)(b)共に許容されるもの、(Ⅲ)に挙げた(4)に示す如く語順(b)のみを許容するものが存在する。即ち、介詞フレーズの語順という点について、中国語は日本語ほど融通の利かないことが分かる。

上に示した一連の語順的振舞に（特に語順(a)(b)の違い）対して、少なからぬ先行研究による議論が成され、一定の成果を見ることができる。但し、この問題は中西（2011）の如く正面から論じたものもあるが、大部分はある大きなテーマの一部として触れられる程度のものではあった。まずは多く見られる切口として、まず介詞研究の一部として論じたものが挙げられる（李临定 1985；中西 2010；蔺磻 1997）。もう一方で、少し視野を広げて述詞性語句と共起成分との語順関係という角度で論じたものも少なくない（范晓 2001，鲁川等 2002，朱军 2009：231-237）。例えば鲁川等（2002）では主語を文頭に置いた形式をテーマとして論じ、中国語の語順原則に対して体系的な分析が行われ、その中でも本稿で取り上げる語順(a)に対する議論が成されていた。その語順原則として、鲁川等（2002）によると“动象句（動態を表す文）”での通常語順は“时空早的先说，时空晚的后说；原因条件先说，结果推理后说（時空間において早いものを先に述べ，時空間において遅いものを後に述べる。原因や条件を先に述べ，結果や推理を後から述べる）”と定義とする“时空事理先后律”が優先的に機能するとし、その中でも“火车从北京开到了上海”（列車是北京から上海まで運行しました）のように語順(a)のパターンが取り上げられていた。朱

軍（2009）では受動者目的語をとる文における動賓フレーズと共起成分における語順について分析が行われている。その中で犯すことができない原則として“包容規則（収容規則）⁽⁵⁾”と“像似性規則（類像性規則）”であることを指摘し、その中で本稿の語順(a)(b)についても触れられている。朱軍（2009）によると、“(a)? 刘姥姥一个劲往孙儿们碗中在晚饭桌上夹菜。（劉お祖母さんはわき目も振らずに孫達のお碗の中に夕食の卓上でご飯をとってあげました）/(b)在晚饭桌上，刘姥姥一个劲往孙儿们碗中夹菜。（夕食の卓上で，劉お祖母さんはわき目も振らずに孫達のお碗の中にご飯をとってあげました）”という二種の文を取り上げ、先に示した判断を下している。この場合語順(b)の成立度が高まるのは、前者（“包容原則”）の作用した結果であると言う。また“(a)她恰好在山坡上采蘑菇（彼女はちょうど山の斜面でキノコをとっていました）。/(b)*在山坡上她恰好采蘑菇。（山の斜面で，彼女はちょうどキノコをとっていました）”という例において、(b)を非文としているが、こちらは後者（“像似性規則”）の作用した結果と言う。但し、これら二種の主要原則がそれぞれいかなる状況において優先的に作用するのか或は制御を受けるようになるのか、という点についてはっきりとした言及が見られない。また語用論の面から考察した先行研究も少なからず見ることができる。その中では、語順(a)と比べて語順(b)では話題の色彩とを帯びている（蔣 1997：28-29，陆丙甫 2004：11，聂仁发 2007，2010），語順(b)では強調或は突出させる機能を有する（李临定 1985：19，范晓 2001：11-12，吕文华 2014：71）等の指摘を見ることができる。しかし語用論的側面はあくまで結果的且つ外在的な要素と言える。もともと介詞フレーズが如何なる統語機能を有することで、言語環境の補助を受け話題としての機能を獲得し統語的位置を選択できる（換言すれば

(5) “包容規則”について朱軍（2009）では、“辖域大的项总是出现在前，辖域小的项总是在后（スコープの大きい方が前に置かれ，スコープの小さい方が後に置かれる）”と定義している。

語順(b)をとることができる)のか、また語順(b)を選択できない場合、介詞フレーズに如何なる統語的制約が存在することで、文脈的要素による補助を得ても話題としての位置が確立できないのか、明確に回答を提示する必要があるのではないだろうか。更には、局部的な現象に着目したアプローチを行なったものも見ることができる。朱军(2009:241-252)では、動作者と他の参与者との間の語順傾向について細かく議論が成されている。例えば、場所を表す成分は主語の前に置くには多くの障害がある〔例.“仲倫同志在北大教书”(仲倫同志は北京大学で教えています)/“?在北大, 仲倫同志教书”(北京大学で, 仲倫同志は教えています)], を始め様々な事例を紹介し動詞との各共起成分との語順現象を細かく描写且つ分析を行っている。また、吕文华(2014:71)では語順(b)の選択されやすい状況として介詞フレーズの構造が複雑なパターン〔例. 根据当地气象台的预报, 明天将有大暴雨(現地の気象台の予報によると, 明日は豪雨になる見込みだそうです)], 列挙を表すパターン〔对工作, 他从不讲条件; 对同志, 他坦诚热情; 对家人, 他严格要求(仕事に対しては, 私はこれまで条件にはこだわっていません。同志に対しては, 彼は誠意があって親切です。家族に対しては, 彼は厳格に要求します)〕の存在を指摘している。他にも、中西(2011)では、介詞の動作性が弱い場合(b)を選択しやすくなり、逆に介詞の表す動作性が強い場合語順(a)のみを選択しやすくなる、と言う。

何れにしても、先行研究では介詞フレーズ状語の語順傾向という大枠の中で細密な分析がなされているものの、まだまだ断片的な感が拭えないところである。それに対して、本稿では「先行研究で捉えられた個別の語順現象に対して、共有する規則をもって説明することはできないのか」という疑問を覚えてならない。この点に関する解明は、介詞研究或は語順研究において大きく寄与する部分があるものと思われる。更には、言語類型論或は中国語教育の場においても少なからぬ貢献に繋がることが予想される。

上に挙げてコンセプトに基づき、介詞フレーズ状語の語順に対し議論を行う。特に、「上に紹介した三種の語順傾向が存在することに対してその背後に貫かれた核心的な原則が存在しているのか。もしもそのルールが見出された時、これは中国語特有のものであるのか、或は世界の言語全般に見られる普遍性が中国語の中に反映された結果であるのか」という点に着目し解決の糸口を見出していく。

2. 本稿の論証的立脚点

論証に際し、本稿の例文については主に辞書や参考書からの引用例を用いていく。狙いとしては次の通りになる。(1)可能な限り文脈的要素を排除し、内在的な統語規則の側面から分析を行う。(2)参考書や辞書で扱われる例文は用途の面から見ると、通常編者が比較的規範的と見なすものが選択され、例外的或は規範から外れた例は選択し辛いことが予想される。よって、語順(a)(b)の選択傾向を推し量る上でも有効な材料となると考えられる。

(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)の語順傾向については、先行研究でも詳しく分析したものが見られる。例えば、《详解：920-925》が大規模な調査を行い、その中の“介词库”において介詞フレーズが(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)のどの傾向を示すのかという点についても、大量のデータが示されている。しかし、《详解》における分析ではその各介詞の意味設定が些か大雑把である感が否めない。例えば介詞“在”については“在高空盘旋（高空で旋回する）”“在他帮助下，我很快成长起来（彼の協力の下、私はすくすく成長しました）”“在我看来，他是学者（私が見るところ、彼は学者です）”という例における“在”が同一のグループとして括られている。通常、これらの“在”はそれぞれ“表示处所（場所を表す）”“表示条件（条件を表す）”“表示行为的主体（行為の主体を表す）”（《八：646-647》）と異なる意味を示すものと

なる。また、これらの意味の違いは当然語順(a)(b)の許容度、或は(I)(II)(III)という分類においても影響を及ぼし得るものとなることが予想される。よって、本稿では《洋解》のデータを元にししながら、主だった参考書のデータ（《八》、《常用》、《実》、《虚》、《手》、《现汉》）の解説や例文を参考としながら、分析を加えていく⁽⁶⁾。

次に論証的側面であるが、“可別度領前原則（可別度領前原則）”（陆丙甫 2005, 2008 : 248）という理論的枠組みを基に議論を展開していく。その定義は“其他条件相同的话，可别度高的成分总是前置于可别度低的成分（他の条件が同じなら，可別度の高い成分の方が可別度の低い成分より前に置かれやすくなる）⁽⁷⁾”という点にある。更には、陆丙甫・应学凤（2013 : 396）では、二つの成分の構造的繋がりが緊密か緩やかなものかを左右する重大要素として、可別度が挙げられている。可別度との関わりという点について、陆丙甫・应学凤（2013 : 396）ではあるフレーズにおける両成分が「可別度低的成分+可別度高的成分（可別度の低い成分+可別度の高い成分）」の場合両者は緊密な構造になり、「可別度高的成分+可別度低的成分（可別度の高い成分+可別度の低い成分）」の場合両者の構造や緩やかな結びつきになるという。また、同論文において介詞フレーズの例も挙

(6) 本稿では次のように介詞フレーズと述詞性語句のみが示され主語が明示されない文については考察の対象から外している。“从环境的美化可以体现精神文明”（環境の美化から精神文明を体现することができる）〔《手：357》〕，“关于时间问题，不能调整”（時間の問題に関しては，調整することができません）〔《洋解 2003 : 921》〕。

(7) 周知の如く，中国語語順を左右する要素として“定指—不定指（限定—非限定）”“具体—抽象（具体的一抽象的）”“旧信息—新信息（旧情報—新情報）”“整体—部分（全体—部分）”等の要素が挙げられる。陆丙甫（2005）では“定指”“具体”“旧信息”“整体”等相対的に認識しやすい方の成分を可別度の高い成分とみなし，“不定指”“抽象”“新信息”“部分”等相対的に認識し難い成分を可別度の低い成分と見なしている。

げられているので紹介しておきたい。

- (5) a. 卖了一辆车。(1台の車を売った)
b. 把一辆车 // 卖了 (〃)
- (6) a. 撤军朝鲜。(朝鮮から軍を撤収する)
b. 从朝鲜 // 撤军 (〃)
- (7) a. 很满意这个工作。(この仕事に満足している)
b. 对这个工作 // 很满意 (〃)
- (8) 他 把这本书 认真地 看了 三遍。(彼はこの本を真面目に3回読みました)

上の例に示す如く、動詞との共起成分が介詞フレーズとして動詞の前に置かれる方が、賓語として動詞の後ろに置かれるより構造的には緩やかな結びつきとなる。この点は(8)の如く、介詞フレーズと動詞の間に“认真地”のような他成分を挿入することができる点を見ても分かる。但し、この種の現象に対して可別度がどのように作用しているのかという点に関して、陆丙甫・应学凤(2013:396)では具体的な論述がなされていない。この点を受けて本稿のテーマを議論するにおいて、次の点についてはっきりとした解答を示す必要があるように思われる。(一)上に挙げた例(5)(6)(7)(8)で示した現象は可別度の理論から説明が可能なものであるのか。(二)介詞フレーズが主語の前に置かれる語順(=語順(b))は例(8)のように介詞フレーズと述詞性語句の間に他成分を挿入した形式として見なすことができるのか。換言すれば、[可別度高+可別度低]の語順となる場合結合が緩やかになるという語順原則が語順(a)(b)の選択においても当てはまることができるものとなるのか。(三)可別度の体现方式は指称性(“指

(8) 例(5)から(8)の例文の前に付した“a.”、“b.”は、それぞれ陆丙甫・应学凤(2013:396)の記述をそのまま引用している。本稿で使用する示す語順(a)(b)とは異なるものである。

称性”), 情報度 (“信息度”), 完成性 (“完成性”)⁽⁹⁾等様々な要素を見ることが出来る。ここで可別度を判定する場合, いかなる点を依拠とすべきであるか。

ここで上に挙げた例(5)(6)(7)(8)の可別度という点について述べれば, 動詞との共起成分を表す事物(それぞれ“車”“朝鮮”“工作”)の方が動作や状態(それぞれ“卖”“撤军”“满意”)より可別度が高いものとなる。一般的に動詞の示す動作や形容詞の示す状態というものはそれ自体で顕現できるものではなくある事物の存在が前提となる。当然, 動作や状態に対する認知もある事物を通して初めて可能となる。品詞分類から見る場合, 動詞と形容詞は述詞という枠に括ることができるが, 述詞義から見た可別度の強弱という点から見ると, 動作の方が状態より可視的なものとなる。よって, 実詞の中では動作動詞の方が状態動詞や心理動詞, 形容詞より認知しやすいものとなる。更に介詞の性格に目を向ける時, 介詞は一般的に動詞の文法化を経て形成された虚詞として考えられている。よって, 述詞義から見た可別度(以下, 「述詞義可別度」と称する)は, 介詞フレーズに後続する述詞性語句より低いものとなることが分かる。

以上の点から見る時, 第1章で提示した(I)(II)(III)の中でどのパターンを示すかという点について, 述詞性語句と比較してみる時, 介詞フレーズが相対的に高い数値の可別度を表すかどうかが核心的なポイントになるのではないかと考えらえる⁽¹⁰⁾。以下, この点について論証を試みていく

(9) 丁健(2014)参照。

(10) 本文中で「述詞性語句と比較してみる時, 介詞フレーズ相対的に高い数値の可別度を示すかどうか」という表現を用いたが, 本稿で論点としているのは介詞(或は介詞フレーズ)間の可別度の強弱ではない。例えば“(a)她对我打了个手势(彼女は私に手で合図しました)。→(b)*对我她打了个手势。”“(a)他对历史很感兴趣。(私は歴史に興味があります)→(b)对历史, 他很感兴趣。”という2種の例において, 動作性を表す“打了个手势”と共起した前者の“对”の方が状態性を表す“感兴趣”と共起した後者の“对”より高い動作性を表し,

い⁽¹¹⁾。

3. 介詞フレーズ(I)

本章では、介詞フレーズ(I)について論じていく。介詞の定義について、教科書や文法書等では「中心語に密着し、動詞や形容詞を修飾する」(張宜生 2000; 胡裕樹 1995) という類の語順説明はよく目にする内容である。この定義から見ると、介詞フレーズ(I)は介詞のプロトタイプの特徴を有したものと言える。ここで、介詞フレーズ(I)としての特徴を纏めると次の二点に集約することができる。(1) 介詞フレーズの中における介詞賓語が体詞性を表す。(2) 介詞フレーズが動作者の制御域において述詞性語句との間に「全体一部分」関係を構成する。その中で介詞フレーズは部分的な行為或は部分的な情報を示すようになる。その結果可別度における[高+低]という結合は認識しづらいものとなり、[介詞フレーズ+述詞性語句]は緊密な構造を構成することになる。以下、具体例を見ていきたい。

3.1 述詞性語句が動作性を表す場合

本節では述詞性語句が動詞性語句の状況を紹介していく。まずは、例を紹介しておきたい。

高い可別度を呈していると言えよう。但し、「述詞性語句と対比してみた介詞フレーズ相対的な可別度」という点では後者の方が高い値を呈することになる(詳しい議論は第3章から第5章を参照)。

- (11) 介詞フレーズと述詞性語句の語順パターンについては、紙幅の関係上全てを紹介することは不可能となる。以下、主だった状況を中心に上げていく。

（A）空間移動に用いられる介詞フレーズ

この部分に属す介詞は起点を表す“从，打，由”[～から]，または経路を表す“从”[～から；～を]，“沿，顺”[～に沿って]，或は移動方向を表す“朝，往，向”[～の方へ；～に向かって]”を挙げることができる。

- (9) (a) 我刚从农村回来。（私は農村から帰ってきたばかりです）
（《八》：130）

- (b) *从农村，我刚回来。（農村から，私は帰ってきたばかりです）

- (10) (a) 你只能由这里往外跑了。（あなたはここから外に駆け出すし
かなくなりました）（《虚》：651）

- (b) *由这里你只能往外跑了。（ここから，あなたは外に駆け出
すしかなくなりました）

- (11) (a) 我从这里路过，阳光从树缝中射进来，像一条光彩夺目的金
棒儿。（私がここを通り過ぎると，陽光が木の隙間から差し
込んできて，一筋のまばゆいばかりの金の棒のようでした）
（《实》：273）

- (b) *从这里我路过，阳光从树缝中射进来，像一条光彩夺目的金
棒儿。（ここを私が通り過ぎると，陽光が木の隙間から差し
込んできて，一筋のまばゆいばかりの金の棒のようでした）

上に挙げた介詞フレーズと述詞性語句の関係は過程行為と目的行為と
言うことができる。一步踏み込んで言えば，部分行為と全体行為と表現で
きる。介詞フレーズの示す行為は，述詞性語句の示す行為全体像を認識する
前段階の参照点として，聞き手の注意を引きつける効果を持つと考えられ
る。認知的な順序はかくの如きであるが，「起点」「経路」「方向」等の意
味役割（semantic role）も述詞性語句の表す動作を認知した後に初めて
認知できるものとなる。また，動作者の立場からすると，まずは動作の述
詞性語句の表す全体枠の動作を思い描き，動作を行う過程において「起

点」「経路」「方向」の機能も付随的に確定されるものとなる。

上に挙げた例(9)(10)(11)について言えば、起点（“从农村”“由这里”）と経路（“从这里”）を表す成分は何れもある種の行為（“回来”“往外跑”“路过”）を行う上での部分的なプロセスとなる。聞き手は“回来”“往外跑”といった行為の存在を通して初めて認識できる意味役割となる。また、動作者の立場からすると、ある状況において、動作者はまずある目的行為（例(9)(10)(11)では、それぞれ“回来”“往外跑”“路过”）の遂行を意図する。更には、“从农村”に表わされる起点と“由这里”に表される経路が認識されることになる。また、ある状況において述詞性語句は非自主行為を表す。この時介詞フレーズに示される経路は動作に対する付帯行為と見なすことができ、話者の設定した認知参照点と見なすことができる。例えば例(11)“从树缝中”における“树缝”の経路という役割は“太阳射进来”という現象を以て初めて地位が確立できるものとなる。これらの点から更に踏み込んで見ると、意味役割の確定には述詞性語句の意味機能が大きく機能していることになる。例えば場所を導く“从”の意味に関しては、一般の辞書や参考書において「起点」「経路」という項目が紹介されている。これらの意味役割について(9)「起点」を表すのは、“回来”という述詞性語句の影響によるものである。一方(11)の「経路」は、“路过”，“射进来”という述詞性語句の影響によるものである。

以上、介詞フレーズの呈する述詞義可別度は遠く述詞性語句に及ばないものとなる。よって、主語を介詞フレーズと述詞性語句の間に挿入し語順(b)をとる余地はないものとなる。即ち、[介詞フレーズ+述詞性語句]は[可別度低+可別度高]という緊密な構造を構成するしかなくなる。結局は語順(a)の選択のみが許容されることとなる。

(B) ヒトを対象とした可視動作と共起する介詞フレーズ

このタイプに属す介詞は動作対象を表す介詞（例. 対象を表す“对 /

跟 / 和 / 与”（[ヒト] に），受益者を表す“为”（[ヒト] の為に），受益者や被害者を表す“给”等）となる。

(12) (a) 昨天，老师跟我们讲了期中考试的问题。（昨日，先生は私達に中間試験の問題についてお話しされました）（《虚》：199）

(b) *昨天，跟我们老师讲了期中考试的问题。（昨日，私達に先生は中間試験の問題についてお話しされました）

(13) (a) 我很愿意和大家讲一讲。（私は皆さんにちょっと話をしたいと思います）（《虚》：265）

(b) *和大家我很愿意讲一讲。（皆さんに，私はちょっと話をしたいと思います）

このグループが語順(a)しかとることができないのは先に紹介した(A)グループと同様の理屈となる。ここで，述詞性語句は具体的な行為，そして全体行為を表す。介詞フレーズの示す意味役割は述詞性語句の示す動作情報によって初めて顕現可能な部分行為となる。

上の例における介詞フレーズは，聞き手の立場からすると，やはり後続の述詞性語句を認識する為の参照点となる行為である。一方動作者から見ると，まずは述詞性語句に示される全体行為の完遂を意図した上で，介詞フレーズの示す部分行為が同時に認知されるものとなる。例えば例(12)と(13)においては，時系列から見る場合“跟我们”“和大家”という部分動作の発生を認知した後“说”“讲”等の行為全体像を認識できるものとなる。しかしその一方で，聞き手は“说”“讲”という行為が確認されることで，“我们”や“大家”を初めて対象格として認知することが可能となる。かくの如く，介詞フレーズの述詞義可別度は後続の述詞性語句に遥か及ばないものとなる。よって，[介詞フレーズ+述詞性語句]の繋がりも緊密なものとなり，語順(a)の選択しか許容できなくなる。

(C) その他の状況

次に(A)(B)以外に、更に幾つかの例を紹介する。ここでは介詞フレーズと述詞性語句の間における「部分動作と全体動作」という関係は見出しにくくなる。しかし、両者における可別度が重大要素となっていることに変わりがない。このグループに属すものとして“把”構文と受動文を挙げることができる。

- (14) (a) 他被大家选作小组长。(彼はみんなに班長に選ばれました)
(《実》: 753)

- (b) *被大家他选作小组长。(みんなに、彼は班長に選ばれました)

- (15) (a) 我的车叫小李开走了。(私の車は李さんに乗って行かれました)
(《実》: 753)

- (b) *叫小李我的车开走了。(李さんに、私の車は乗って行かれました)

- (16) (a) 你今年一定要把毕业论文写完。(あなたは今年きっと卒業論文を書き上げなければなりません)(《実》: 735)

- (b) *把毕业论文你今年一定要写完。(卒業論文を、あなたは今年きっと書き上げなければなりません)

上掲の例において、例(14)(15)は受動文、その主語は受動者となり、介詞フレーズと述詞性語句は何れも主語によって代表された成分による制御を受けるものとならない。更に、介詞“被/叫/让”はヴォイスマーカーとして述詞性語句との結合力が強く、事態の発生について前後の切れ目が分かりにくいものとなる。例(16)は“把”構文、介詞賓語は通常受動者が用いられることになる。一般的に動作者は受動者に照準を定め目的行為が確定されたものとなる。一方聞き手の角度から見ると、介詞フレーズの示す情報は参照点として全体行為を把握する上で大きな役割を果たすことになる。上掲の例(14)(15)について、聞き手は“被大家”“叫小李”という

箇所は、聞き手にとって“他被选作小组长”“我的车被开走了”という現象を認知する上での参照情報となる。更に例(16)では、受動者を導く情報“把毕业论文”を参照点として聞き手は“写完毕业论文”という行為の一連のプロセスを認知することとなる。以上、述詞性語句と比較してみると、介詞フレーズの述詞義可別度は極めて小さなものとなり、語順(a)のみを許容できるものとなる。

即ち(A)(B)(C)何れの状況においても、介詞フレーズは述詞性語句に対して一種の過程的で部分的な色彩を帯びている。この種の過程的動作の存在は述詞性語句の示す行為を認知する上での重要情報となる。しかし一方で介詞フレーズは介詞が受けた文法化の影響が大きく、動作的顕現度は述詞性語句の示す行為に遥かに及ばない。また、介詞も必然的に強い値の述詞義可別度を醸し出すことは不可能となる。その結果は、本節で挙げたグループ(A)(B)(C)の介詞は語順(a)の選択のみが許容されるという現象に反映されることになる。

3.2 述詞性語句が状態性を表す場合

このタイプに該当するものは、“比”構文が該当する。以下に例を挙げておきたい。

(D) “比”構文

(17) (a) 南京的夏天比北京的夏天热。(南京の夏は北京の夏より暑い) (《手》: 350)

(b) *比北京的夏天南京的夏天热。(北京の夏より, 南京の夏は暑い)

(18) (a) 这棵树比那棵树粗一点儿。(この木はあの木より少し太い) (《实》: 837)

(b) *比那棵树这棵树粗一点儿。(あの木より, この木は少し太い)

“比”構文は本章第1節で紹介した状況と異なり、動作者の中に動作の前後関係は設定されないものとなる。一方聞き手からしても、介詞フレーズと述詞性語句の間には認知プロセスにおいて時系列上の前後関係を認めることができる。即ち、聞き手は介詞フレーズの示した情報を参照点として述詞性語句の示す比較の結果を知ることになる。論理関係から見る場合、“熱”（暑い），“粗一点儿”（少し太い）等の比較結果を得る場合「ある対象に対して比較を行う」ことが前提となる。ここでは、“比＋対象”という介詞フレーズがその前提情報を担っていると言える。この点から見る時、述詞性語句は一定数の可別度を残していると言えるだろう。なぜなら、比較の結果得られた情報にはある種の数値情報が含まれており、話者や聞き手の頭の中では主観的客観的に具体的な数値がイメージされていると考えられるからである。例(17)の“熱”については、この情報から、含有情報として「一度」「二度」等の温度的差異を窺い知ることができる。結局、ここでも“比”の文法化の程度は高いものであり、述詞義可別度も高いものとは考えにくい。よって、“比”構文が語順(a)のみしか選択できないのも、介詞フレーズの可別度が述詞性語句に遠く及ばないことに起因すると分析できる。

4. 介詞フレーズ(Ⅱ)

4.1 介詞フレーズの可別度顕現方式

介詞フレーズ語順(a)(b)の機能について、張黎（2012：219）では“脱身于事件（事態から身を抜け出させること）”“置身于事件（事態の中に身を置くこと）”という概念を提示している。張黎（2012）によると、“说话人视点（話者の視点）”と“动作主视点（動作者の視点）”と言い換えられるとある。以下例同論文からの引用例(19)を見られたい。

- (19) 说话人视点（話者の視点） 动作主视点（動作者の視点）

<u>在操场上</u> ，小王 <u>跑</u> 了三圈。	小王 <u>在操场上</u> 跑了三圈。
（グラウンドで ⁽¹²⁾ ，王君は	（王君はグラウンドで
3週走りました）	3週走りました）
<u>在饭店里</u> ，小王 <u>给</u> 她打了电话。	小王 <u>在饭店里</u> 给她打了电话。
（ホテルで，王君は彼女に	（王君はホテルで
3回電話しました）	彼女に3回電話しました）
<u>在黑板上</u> ，她 <u>写</u> 了几个字。	她 <u>在黑板上</u> 写了几个字。
（黑板に，彼女は	（彼女は黑板に
幾つか字を書きました）	幾つか字を書きました）

この角度から見る時，このグループにおける介詞フレーズによって示される意味役割等は，その認知において必ずしも動作者による動作を拠り所としないことを読みとることができる。即ち，「介詞フレーズ＋述詞性語句」は「可別度低＋可別度高」及び「可別度高＋可別度低」双方となる可能性を秘めそうである。同時に緊密な構造となる可能性と緩やかな結びつきとなる双方の可能性を有することになる。以上，（Ⅱ）の可別度には一定の量的変動幅を有し，各介詞によってそれぞれの特性を有することとなる⁽¹³⁾。具体的な状況については，以下個別に論じることとする。

(12) 例(19)で挙げた“在”については「を」と訳し，介詞フレーズもそれぞれ「グラウンドを」と訳出した方が，より自然な日本語となるだろう。本稿では中国語の介詞に示される意味役割が議論的重点の一つとなっている。よって，対照する日本語訳でも，介詞フレーズの部分は可能な限り直訳で記していく。

(13) 可別度の変動幅を持つ介詞フレーズのデフォルトの数値は，介詞各種によって異ってくる。可別度のデフォルトの数値が低いものとなる場合，主に語順(a)を選択しやすくなる。一方，可別度のデフォルトの数値が高いものとなる場合，主に語順(b)を選択しやすくなる。これら個別状況に関する問題について，本稿では深く立ち入らず，稿を改めて考察することにする。

4.2 述詞性語句が状態性を帯びてくるパターン

ここで示した介詞フレーズは後続の述詞性語句の動作性が失われ状態性を帯びる形となっている。また文中で何度か触れたが、介詞はもともと動詞が文法化を経て形成されており、動作義は大分薄れているとはいえ、中には尚ほ保留されているものも少なくない。動作は状態よりも認知しやすくなる。よって、述詞性語句が状態を表す場合、相対的に介詞フレーズの可別度の高さが認知しやすいものとなる。よって、介詞賓語と述詞性語句の間における結合が介詞フレーズ(I)の場合より緩やかなものとなり、語順(a)(b)が共に許容されるという現象が生じるようになる⁽¹⁴⁾。

(A) 動作空間を表す介詞フレーズ

このタイプに属す介詞としては場所を導く“在”を挙げることができる。

(20) (a) 你在前面走, 我在后面跟。(あなたが前で歩き, 私が後でつ

(14) 第1章でも触れたが、中国語の語順原則について、魯川等(2002:15)では“动象句”の通常語順は“时空早的先说, 时空晚的后说; 原因条件先说, 结果推理后说(時間空間において早いものを先に述べ, 時間空間において遅いものを後に述べる。原因や条件を先に述べ, 結果や推理を後から述べる)”と定義とする“时空事理先后律”が優先的に機能するとし、“静象句”では、“时空大的先说, 时空小的后说; 地位高的先说, 结果低的后说”(時空的に大きなものを先に述べ, 時空的に小さなものを後に述べる。地位の高いものを先に述べ, 地位の低いものを後に述べる)と定義とする“时空地位大小律”が優先的に機能するとしている。この点から見る時、介詞フレーズ(I)(II)の展開方式は上に示した両規則(“时空事理先后律”と“时空地位大小律”)の反映形式とも言うことができる。魯川等(2002:15)ではこれら両規則が適応される上での優先順位や環境的制約に対する理由については言及がなされていない。この問題に関して、本稿では述詞義可別度に対する認知的差異が作用した結果であると考えている。

いて行きます) (《実》: 281)

- (b) *在前面你走, 在后面我跟。(前であなたが歩き, 後で私が
ついて行きます)

- (21) (a) 大家在休息室里吃午饭。(みんなは休憩室で昼食を食べま
す)

- (b) ??在休息室里大家吃午饭。(休憩室で, みんなは昼食を食べま
す)

- (22) (a) 大家在休息室里谈得很高兴。(みんなは休憩室で楽しそうに
話をしています)

- (b) 在休息室里, 大家谈得很高兴。(休憩室で, みんなは楽しそ
うに話をしています) (《八》: 646)

この状況の例において、大部分は語順(a)となるが、語順(b)をとる例も見ることができる。ここで示す介詞フレーズの指す外延は動作者より大きく、輪郭も動作者より認知しやすいものとなる。実際(22b)の許容度が(20b)(21b)より高いのを見ると、語順(b)については“在+場所”と結合する述詞性語句が状態の方が動作より許容度が高いことが分かる。かくの見方をすれば、述詞性語句の呈する可別度の程度が下がることにより、介詞フレーズの述詞義可別度が相対的に高くなる。[介詞フレーズ+述詞性語句]の結合が緩やかなものとなり、語順(b)を許容するという状況が見られることとなる。

(B) 心理活動を表す介詞フレーズ

このタイプに属す介詞としては心理活動や心的態度の対象を導く“対”“对于”が該当することになる。

- (23) (a) 大家都对这个问题很感兴趣。(みんなはこの問題に興味があ
ります) (《八》: 182)

- (b) 对这个问题, 大家都很感兴趣。(この問題に, みんなは興味

があります) (《八》: 182)

(24) (a) 大家对于他的失败都觉得可惜。(みんなは彼の失敗に対し残念に思っています)

(b) 对于他的失败, 大家都觉得可惜。(彼の失敗に対し, みんなは残念に思っています) (《手》: 362)

上掲の“感兴趣”“觉得可惜”は何れも動作者の心理状態を表す。更には, 自分の意識を介詞賓語(上掲の例では, それぞれ“这个问题”, “他的失败”)に向けた後得られる結果となる。ここで「意識の集中」という心理活動は, 人類が共通に有する能力である。よって, 動作者, 話者何れの立場からも実行が可能となる。以上, 介詞フレーズも相対的に強い述詞義可別度を呈し, 語順(a)(b)が共に許容されるという現象が起こることとなる。

(C) 抽象的な範囲を表す介詞フレーズ

このグループに属す介詞は立脚点となる範囲を表す介詞“在”が該当する。

(25) (a) 这首歌在年轻人中很流行。(この歌は若者の間で流行しています) (《手》: 405)

(b) 在年轻人中这首歌很流行。(若者の間でこの歌は流行しています)

(26) (a) 他在群众的欢呼中走上了讲台。(彼は群衆の歓声の中演台に上がりました) (《虚》: 686)

(b) 在群众的欢呼中他走上了讲台。(群衆の歓声の中彼は演台に上がりました)

(27) (b) 在生活方面, 我认为没有问题。(生活面で, 私は問題ないと思います) (《虚》: 686)

(28) (b) 在许许多多的同学之中, 阿彤是我最要好的朋友。(多くの同級生の中で, 阿彤は私の最も仲が良い学生です) (《实》: 281)

このグループの意味の“在”における語順(b)の用いられている数量は(A)に示した「動作者の存在する場所」よりずっと多いものとなる。上掲の例中“流行”“走上了讲台”“没有问题”“是我最好的朋友”は何れも範圍を介詞賓語の示す情報（それぞれ“年轻人中”“群众的欢呼中”“生活方面”“许许多多的同学之中”）に設定し導き出された判定結果であり、介詞賓語によって示される外延は場所よりも大きなものとなる。更に、述詞性語句について(25)の“很流行”，(27)の“没有问题”，(28)の“是我最好的朋友”はそれぞれ状態を示している。(26)の“走上了讲台”は“了”の存在により動作の実現を表しているが、動作の実現からはその後の状態((26)では「演台の上に上がっている」という状態)という含意を読み取ることができる⁽¹⁵⁾。ここで介詞フレーズが語順(a)のみならず、語順(b)が許容されやすくなるのは(A)(B)の状況と同様、述詞性語句は動態性を幾分失い状態性を帯びたものが多くなる。述詞義可別度もそれに伴い下がることになるからである⁽¹⁶⁾。以上、介詞フレーズの述詞義可別度は相対的に高くなり、語順表現に顕現されることになる。

-
- (15) 動作の実現と状態の関係について、周知の如く中国語の“了”のアスペクト義は「完了・完成・実現」等と解説され、日本語では「…した」が充てられる。例えば“家里来了一位客人”のという分は「家にお客さんが1名いらっしゃいました」と同時に、「家にお客さんが1名いらっしゃっています」という日本語訳とも対応する。また否定においても“他没(有)来”という文を例にとると「彼は来ませんでした」の他に「彼は来ていません」という日本語訳とも対応させることができる。即ち，“了”は動作の実現のみならず、ある状態を表せる場面も少なからず存在することが分かる。
- (16) 可別度という点については、音節数も重大な要素となる。長すぎる成分や複雑すぎる成分は目立ちやすい為、ある直接的意味関係を持つ成分の間に挿入した場合、この挿入された大きな成分を処理する際に、より多くの短期記憶と注意力が費やされる、両成分の繋がりを認識する上で障害になることがあり得る(陆丙甫 2010: 410)。この部分は、当然語順(a)(b)の選択において少なからぬ影響をもたらすことが考えられる。

4.3 介詞フレーズの述詞義顕現度

ここで示すグループにおいて述詞性語句は動作と状態の双方を表す可能性があるが、介詞フレーズが比較的強い述詞義を残しており一定数の可別度を見出すことができる。語順選択においても寛容さを有し、語順(a)(b)の選択が許容されるものとなる。

(D) 話者設定の何らかの条件を表す介詞フレーズ

このタイプに属すものとして条件を導く“在”を当てはめることができる。

- (29) (a) 他在朋友的帮助下 (→朋友幫助他) 解決了目前的困难。 (彼は友人の協力の下目の前の困難を解決しました) (《虚》: 685)
- (30) (b) 在老师和同学们的帮助下 (→老师和同学们幫助小明), 小明进步了。 (先生と同級生達の協力の下, 小明は進歩しました) (《实》: 283)
- (31) (b) 在老师的鼓励下 (→老师鼓勵我), 我报名参加了演讲比赛。 (先生の激励の下, 私はスピーチコンテストに申し込み参加しました) (《手》: 407)

上に示した例における介詞フレーズは“在+動作者+名動詞+下”の形で表される。ここで下線を引いた介詞フレーズからは、矢印に示されたある種動作の存在が透視される。また、このタイプの述詞性語句は動詞の後ろには“了”の後続された形式が多く見受けられる。よって、述詞性語句から顕現される動作性も弱まってくる。以上、相対的に介詞フレーズは一定数の可別度を表すこととなる。

（E） ある対象の排斥を表す介詞フレーズ

このタイプの介詞として「…を除いて/…以外」という排斥を表す“除/除了…（外/以外/之外）”が該当する。

- (32) (a) 小张除了喜欢打网球之外，还喜欢打羽毛球和棒球。（張君は、テニスをするのが好きなのを除いて，更にバドミントンと野球をするのが好きです）（《手》：355）

- (33) (b) 除了面积小点儿外，这套房子都很好。（面積が狭いのを除いて，この部屋はどれも素晴らしい）（《実》：302）

介詞“除”“除了”は多くの状況において述詞性語句の部分に動詞性語句が置かれる（例(32)(33)参照）。更には名詞性語句が介詞賓語となる状況も見ることができるのであるが、この場合も介詞フレーズの中からは、述詞義を透視することができる。名詞性語句はその述詞義を喚起する機能を持つことになる。

- (34) (a) 他除了规定的课程外（→参加规定的课程），还参加了两项科研活动。（彼は規定のカリキュラムの他に、更に2つの科学研究プロジェクトに参加しました）（《実》：303）

- (35) (b) 除了小王（→小王没来），别人都来了。（王さんを除いて，他の人はみんな来ました）（《手》：355）

- (36) (b) 除了他以外（→他买了这本书），班里同学谁也没买这本书。（彼を除いて，クラスの同級生は誰もこの本を買いませんでした）（《実》：302）

例えば、例(34)(35)(36)の介詞フレーズからもそれぞれ“他参加了规定的课程”（彼が規定のカリキュラムに参加する），“小王没来”（王さんが来なかった），“他买了这本书”（彼はこの本を買った）という情報を読み取ることができる。ここで述詞性語句は、話者或は動作者の設定するある一定範囲において認知される余剰成員の有する動作或は状態となる。即ち、このグループでも介詞フレーズは、一定数の述詞義可別度を表すことがで

きることになる。

(F) 手段を表す介詞フレーズ

このタイプに属す介詞は「…を通して」という手段を表す“通过”が該当することになる。

- (37) (a) 我们通过译员 (→译员翻译) 交谈了半个小时。 (私達は通訳を通して 30 分間話し合いました) (《八》: 534)
- (38) (a) 他们因为不会外语, 只能通过翻译 (→译员翻译) 进行交谈。 (彼らは外国語ができないので, 通訳を通して話し合いをするしかありませんでした) (《手》: 385)
- (39) (a) 恋人们喜欢通过书信 (→交換书信) 表达爱情。 (恋人達は手紙を通して愛情を表現します) (《手》: 385)
- (40) (b) 通过什么方式 (→采用某种方式) 我才能见到他? (どういう方式を通してこそ, 私は彼に会えるのでしょうか) (《八》: 534)
- (41) (b) 通过小李的介绍 (→小李介绍), 我认识了王经理。 (李さんの紹介を通して, 私は王支配人と知り合いました) (《手》: 385)
- (42) (b) 通过老张介绍, 我认识了他。 (張さんが紹介するのを通して, 私は彼と知り合いました) (《八》: 534)

ここに示す介詞フレーズも(E)同様に、介詞賓語が名詞性語句によって構成される場合(例(37)-(41))と動詞性語句によって構成される場合(例(42))が存在する。(42)の介詞フレーズにおける賓語が動詞性語句の場合は言うまでもなく、名詞の場合においても、共起する動詞の透視は可能なものとなる。例えば例(37)から(41)において“译员”“翻译”“书信”“什么方式”から“译员翻译”(翻訳者が翻訳する)、“交換书信”(手紙を交換する)、“采用某种方式”(ある方式を採用する)、“小李介绍”(李さん

が紹介する）と言った行為を見出すことができる。以上、介詞フレーズの中から一定数の述詞義を見出すことが可能となる。このような性格に対する認知構造が中国語母語話者の中でも構文スキーマとしてその地位が確立され、可別度の認定においても融通性が得られることとなり、語順(a)(b)の双方が許容されるという現象に繋がったと考えられる。

（G） 判断依拠や基準を表す介詞フレーズ

このグループに属す介詞は「…に基づいて」という判断基準を表す“按，按照，照，根据，鉴于，本着”が該当することになる。

- (43) (a) 这些事情，按理说，应该由主任处理。（この事は理屈から
言って，主任が処理すべきである）（《実》：306）
- (44) (b) 按照一般的情况来说，这个时候他应该在家。（一般の状況か
ら言うと，この時彼は家にいたはずである）（《手》：314）
- (45) (b) 照目前的水平看来，考研究生有点儿困难。（現在のレベルか
ら見ると，大学院を受験するのは少し困難である）（《手》：
408）
- (46) (b) 照老规矩，过春节应该给老人拜年。（古いしきたりからする
と，旧正月を過ごす際は老人に新年のあいさつをすべきで
ある）（《手》：408）
- (47) (b) 按眼下的行情，这张画至少值五千多元。（現在の市況からす
ると，この絵は少なくとも5000元余りの価値である）
（《実》：306）
- (48) (a) 这件事对我来说有点儿难。（このことは彼にとって難しい）
（《手》：361）
- (49) (b) 对王红来说，她最希望的事是能考上大学。（王紅について言
えば，彼女が最も願うのは大学に合格することだ）（《手》：
361）

(50) (b) 从工程质量来说, 这点小错误是不能容忍的。(プロジェクトの質から言うと, この小さな間違いは容認できないものである) (《実》: 278)

(51) (b) 从检查结果来看, 你的病不太严重。(検査結果から見ると, あなたの病気はそんなにひどくありません) (《虚》: 370)

ここで挙げた介詞は“按”“按照”“照”“从”“对”は「…に基づいて」という判断基準を表すという共通点を持つ。この動きは、一種の視点移動と表現することができる。即ち、介詞フレーズからは発話行為の“说”“讲”知覚行為“看”と言った行為を透視することができる。上掲の介詞フレーズにおいても“介詞+賓語”の形で顕現されるもの(例(46)(47)参照)を見ることができる。しかし、実際には多く“按…说”“按照…(来)说”“照…看(来)”“从…(来)看”“从…来说”“对…来说”等介詞賓語と述詞性語句の間に連結成分を置くフレーム介詞⁽¹⁷⁾の形式で用いられる(例(43)-(45), (48)-(51)参照)。

例えばここで挙げた本章の冒頭でも触れたが、介詞フレーズ(Ⅱ)は話者の視点と動作者の視点の双方を導入できるという機能を有する。“说”に示される発話や、“看”に示される発話行為は人類共通に有する普遍的な能力となる。以上、このグループ介詞フレーズからも一定数の動作性を見出すことができる。よって、介詞フレーズの述詞義可別度も相対的にある程度の高さを示すことができると思われる。

(17) 「フレーム介詞」については“框式介词”に対して用いた筆者による訳語である。“框式介词”は“联系项居中原则”が反映された現象の一つと言える。フレーズ介詞を例にとれば、“按照…(来)说”の“(来)说”, “照…(来)看”の“(来)看”等は“联系项”として介詞賓語と中心語の間に置かれ両者の境目と(構造的)関係性を示す働きをすることになる。詳細な定義や内容については劉丹青(2002)。

（H） 時間的起点を表す介詞フレーズ

このグループに属す介詞は「[ある時間] から」という起点となる時間を表す“从，打，由，自”が該当することとなる。

- (52) (a) 她从昨天下午开始就有点儿不舒服。（彼女は昨日から少し気分が良くありません）（《実》：272）
- (53) (b) 从现在起，我再也不吸烟了。（今から，私は二度とタバコを吸いません）（《手》：356）
- (54) (b) 由 1979 年开始，她就从事业余写作，已经坚持十八年了。（1979 年から，彼女は余暇として執筆を行っており，既に 18 年間続けています）（《実》：297）
- (55) (b) 打今儿起，你不用每天浇水了。（今日から，あなたは毎日水をやる必要がありません）（《虚》：115）
- (56) (b) 从创造到表演，报纸上都有不少评论。（創造から上演まで，新聞では多くの論評が成されています）（《虚》：109）
- (57) (b) 打十岁到今天，我没有上过医院。（十歳から今日まで，私は病院に行ったことはありません）（《虚》：115）

上に示した“从”類介詞は多く“从…开始”“从…起”“从…到…”等フレーム介詞の方式で表現される（例(52)-(57)参照）。これは介詞の文法化の度合いが極めてたかく介詞フレーズだけで動作義を表すのは困難な部分を補う為の手法と推測される。以上，このグループの介詞フレーズからも一定数の述詞義可別度を見出すことができる。

4.4 二つの事態の発生順序が明確なパターン

（I） 因果関係に用いられる介詞フレーズ

以上 4.1 節から 4.3 節までで取り上げた介詞フレーズ(Ⅱ)は，介詞フレーズと述詞性語との組み合わせにおいて，介詞フレーズと述詞性語句によって示される二つの事柄の時間的に順序ははっきり線引きににくいも

のである。一方、ここで取り上げる例については二つの事柄の時系列上の順序や切れ目ははっきりしたものとなる。このタイプに属するものとして原因を表す“因为”“由于”や結果を表す“为”“为了”を挙げることができる。

- (58) (a) 小田因为这件事 (→这件事发生了) 还受到了表扬。(田さんは、このこと故に賞賛を受けました) (《八》: 622)
- (b) 因为这件事 (→这件事发生了), 小田还受到了表扬。(このこと故に田さんは、賞賛を受けました) (《八》: 622)
- (59) (a) 他为这些衣服 (→买这件衣服) 花了一百多元。(彼はこの服の為に 100 元余り使いました) (《实》: 296)
- (60) (a) 老师们为培养下一代, 辛勤工作。(先生達は次世代を育成する為に, 懸命に働いています) (《手》: 390)
- (61) (b) 由于大家的共同努力 (→大家共同努力), 试验终于成功了。(みんなの一緒になった努力によって, 試験はついに成功しました) (《手》: 400)
- (62) (b) 为了父母 (→实现父母的愿望), 他报考了医学院。(両親の為に, 彼は医科大学の受験を申し込みました) (《手》: 391)
- (63) (b) 为了当一名话剧演员, 他每天背诵台词, 练习发音。(現代劇の役者になる為に, 彼は毎日セリフを覚え、発音を練習しています) (《实》: 296)

意味的角度から見ると、原因と結果は表裏一体の概念度である。理論的に見ると、これらは〈起点〉指向であるのか〈着点〉指向にあるのかという点にある。前者は自主性を有さず、通常示される事柄の発生順序は述詞成分の示す内容より先の発生となる。一方、後者は自主性を有するものとなり、その示す事柄は時系列上述詞成分の表す事情よりも後の発生となるものとなる(古川 2000: 38-40)。換言すれば、前者は動作者の制御域を抜け出した内容である。よって、理論的には述詞義可別度は相対的に高いも

のとなる。一方目的は動作者の設定した制御域の中で認知されるものである。よって、理論的には述詞義可別度は相対的に小さなものとなる。

但し、〈起点〉指向と〈着点〉指向〈起点〉指向はお互いに排斥しあう関係ではなく、お互い包含関係を持つ。即ち、前者も後者の要素を含み、後者も前者の要素を含むものとなる（古川 2000：36）。例えば(58)の“这件事”という“受到了表扬”の動機（原因）となるが、同時に“受到了表扬”という行為の対象を兼ねることになる。即ち、目的と対象は〈着点〉指向という点で共通点を持つこととなる。更には例(60)の“培养下一代”，例(63)的“当一名话剧演员”は通常目的として捉えやすい事柄と思われる。但し、この両者にも原因的要素が見出されることになる。これら両者は、それぞれ“辛勤工作”，“背诵台词，练习发音”という動作を行う上での到達目標になると同時に、これらの動作を行わせる上での動機づけにもなってくる。

また介詞賓語という点について見ても、述詞性語句の用いられる場合と名詞性語句の用いられる場合が存在する。まずは述詞性語句が用いられる場合であるが、例(60)(63)では介詞賓語が動賓フレーズとなる。例(61)では、名動詞となる。当然この部分から、述詞義を窺うことができる。また名詞性語句が介詞賓語になった状況（例(58)(59)(62)）であるが、この場合も介詞フレーズの中から“这件事发生了”（このことが発生した），“买这件衣服”（この服を買う），“实现父母的愿望”（両親の願いを叶える）のような述詞成分の存在が透視できる。以上、このグループでも述詞性語句と比較して、介詞フレーズは一定数の述詞義可別度を見出すことができる。

5. 介詞フレーズ(Ⅲ)

このタイプに属す介詞としては“关于”（…に関して），“至于”（…に

至っては)が該当することになる。

(64) (a) *我关于中国历史知道得多。(私は中国の歴史に関してよく
知っています)

(b) 关于中国历史, 我知道得多。(中国の歴史に関して, 私はよ
く知っています) (《手》: 368)

(65) (a) *我关于国际形势了解得不多。(私は国際情勢に関してよく分
かりません)

(b) 关于国际形势, 我了解得不多。(国際情勢に関して, 私はよ
く分かりません) (《虚》: 211)

(66) (a) *他在危急关头想到的是人民的利益, 他至于个人的安危, 从
来没有放在心上。(彼は火急の時思い浮かぶのは人民の利益
であり, 彼は個人の安否に至ってはこれまで気にとめた
ことがなかった)

(b) 他在危急关头想到的是人民的利益, 至于个人的安危, 他从
来没有放在心上。(彼は火急の時思い浮かぶのは人民の利益
であり, 個人の安否に至っては, 彼はこれまで気にとめた
ことがなかった) (《八》: 684)

ここで挙げた介詞“关于”“至于”の語順制限については、多くの参考書や論文の中でも言及されてきた内容である(丁声树 1961: 106, 史彩霞 2004: 71, 范光林 2010: 37, 聂仁发 2007, 20110, 2013: 125, 《八》, 《详解》)。更に、聂仁发(2007, 2010)では“关于”“至于”の話題マーカーとしての機能を指摘し、更には“話題”と“述題”(本稿で言う「主語+述詞性語句」の部分)主体と内容の関係であると主張されている。

ここで、まずは介詞フレーズの呈する述詞義について触れておきたい。通常これらの介詞は、4.2 節, 4.3 節, 4.4 節で論じたものと同様、述詞義を見出すことができる。

(67) (b) 关于兴修水利, 县政府正在全面规划。(水利工事を興すこと

に関して，県政府はちょうど全面的に企画しているところ
です）（李叔湘 1999：240）

- (68) (b) 关于学校增加学生名额，你们准备采取什么具体措施？（学
校が学生の定員を増やすことに関して，あなた達はどのよ
うな措置をとるつもりですか）（呂叔湘 1999：240）
- (69) (b) 关于中国历史（→中国历史是什么样的），我知道得多。（中
国の歴史に関して，私はよく知っています）（《手》：368）
- (70) (b) 关于国际形势（→国际形势如何），我了解得不多。（国際情
勢に関して，私はよく分かりません）（《虚》：211）（＝(65)）
- (71) (b) 至于是否应聘，我还没有作出最后决定。（招請に応じるべき
かどうか，私はまだ最後の決定をしていません）（張宜生
2000：115）
- (72) (b) 他在危急关头想到的是人民的利益，至于个人的安危（→个人
安全不安全），他从来没有放在心上。（《八》：684）（＝(66)）
- (73) (b) 这个小组一年里创造了不少新工具，至于零星的小革新（→
进行了零星的小革新），那就更多了。（このグループは1年
に多くの新しい道具を創造しました。細々とした小さな革
新に至っては，もっと多くなります）（《虚》：745）

次に各介詞の解説について着目していきたい。まずは“关于”についてであるが、多くの辞書において“关于”に対して“表关涉”（関連することを表す）⁽¹⁸⁾或は“表示关涉的对象”（関連する対象を表す），“引进关涉的对象”⁽¹⁹⁾（関連する対象を導入する），“介绍出涉及的事物”⁽²⁰⁾（関連する事物を紹介する）等という解説が付されている⁽²¹⁾。しかし、この解説は少

(18) 《虚：210》参照。

(19) 《现汉：477》，《手：367》参照。

(20) 《常用：438》参照。

(21) 《八：240》参照。

し舌足らずな感が否めない。例文によっては、関連付けられる対象には直接では話題として用いられないものがある。これらは、介詞“关于”の支えがあって初めて後続する主述フレーズは内容となることができる。例えば、聂仁发（2007：42）では以下の例において“关于”を文頭に置くと成立度が高くなると言う。

(74) [?]类风湿性关节炎，我得多带几本。

——关于类风湿性关节炎，我得多带几本。（間接リウマチに関して，私は何冊か多めに本を携帯しておかないといけません）

(75) *那场大雨，我们应该吃饭了。⁽²²⁾

——?关于那场大雨，我们应该吃饭了。（あの大雨では，私達は食事をすべき時間を迎えていました）

以上に示すように，“关于”は両者の関係性を標記するだけではなく、本来関連性を有する両者を連結させる強力な影響力を持つことが伺い知れる⁽²³⁾。この部分に着目してみると，“关于”の場合は、「関連対象を示す」というだけに留まらず、「関連者として見なす / 位置づける」という話者

(22) 聂仁发（2007：42）でも触れられているが、先行研究の指摘において、もしも発話環境による補助があれば“那场大雨，我们应该吃饭了”という例も成立の余地を有するという指摘が見られる。例えば屈承熹（2013：3）によると、「話者が大雨の為、退勤して帰宅する途中大幅に時間が日頃より1、2時間遅れ、家に着いた時には既に夕ご飯の時間を大幅に過ぎてしまった」という状況において“那场大雨”と“我们应该吃饭了”に関連性が生まれ、文が成立に至るとある。

(23) 先行研究では、中国語の介詞フレーズが話題となる場合、介詞の省略が可となるパターンのあることを指摘するものが存在している（陆丙甫 2004：11、范光林 2010：37。例文は陆丙甫 2004：11 より引用）：（在）院子里我们已经栽了几棵树。（庭の中に私達は何本かの木を植えました）。このような現象を見る時、本文中で取り上げた“关于”“至于”と反対に、ここに挙げた例の“在”は話題であることを示すマーカーを有するのみであり、本来話題とはなりにくい成分を話題へと変換させる強制力を有していないことが窺い知れる。

による自主動作の含みを持つものと考えられる。即ち、この解釈から見る場合、“关于”自身の介詞義に話者による動作行為義が含まれていることを伺うことができる。よって、述詞性語句の述詞性可別度が如何なる状況にあらうとも、介詞フレーズ自体が極めて大きな値の述詞義可別度を醸し出すことになる。

一方“至于”の意味解釈を見ると、通常辞書等では“另提一件事”（別に一つの事柄を取り上げる），“另提一个话题”（別に一つ的话题を取り上げる）等の意味解釈をみることができる。即ち、意味解釈の中から話者による“提”という動作の存在を伺い知ることができる。この部分は“关于”と類似した特徴となる。

(76) *类风湿性关节炎，我得多带几本。

→至于类风湿性关节炎，我得多带几本。（間接リウマチに至っては、私は何冊か多めに本を携帯しないといけません）

(77) *那场大雨，我们应该吃饭了。

→至于那场大雨，我们应该吃饭了。（あの大雨のことだったら、私達は〔構わずに〕食事をしましょう）⁽²⁴⁾

以上，“至于”の意味機能も本来述詞性語句と関連性を持たない語句を結びつける機能を有し、やはり話者の意図的な行為を透視することができる。同時に、極めて大きな述詞義可別度を見出すことができる。

かくの如く、ここで紹介した介詞フレーズは高い値の可別度を示すことになり、〔介詞フレーズ＋述詞性語句〕は〔可別度高＋可別度低〕の組み合わせとなり、緩やかな構造とならざるを得ず、結果として語順(b)のみしか許容できなくなる。

(24) 聂仁发（2010：163）では、更に“至于那场大雨，我们应该吃饭了”という例に対して“不用管那场大雨，还是吃饭吧（あの大雨に構うことはない。やはりご飯を食べましょう）”という言外の意味があることを指摘している。

6. 結 論

本稿では介詞フレーズ連用修飾語の語順が、介詞フレーズ(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)と3種類に分かれる要因について述詞義可別度という点から論じてきた。最後に得られた結論を以下に纏めておく。

- (一) 介詞フレーズ(Ⅰ)には二種類が存在する。(1)介詞フレーズに後続する述詞性語句は動作性を表す。大部分は、こちらの状況が該当する。述詞義可別度において、介詞は遠く動詞には及ばない。そして、可別度の低い成分は可別度の高い成分の前には置きつらくなる。(2)介詞フレーズに後続する述詞性語句が状態を表す場合。この場合、述詞性語句に動作的情報は含まれていない。しかし、述詞性語句と比較してみると、介詞フレーズは低い値の述詞義可別度を示す。よって、主語の前面に置きにくくなる。
- (二) 介詞フレーズ(Ⅱ)には、共起する述詞性語句は動作を表す場合も状態を表す場合もある。何れの場合においても、述詞性語句と対照してみる時、介詞フレーズは一定度数の述詞義可別度を認知させることができるものとなる。この時、介詞フレーズに示され動作は動作者によるもの、話者によるものの双方が存在する。介詞フレーズ自身には可別度の数値幅において一定の融通性を呈し、完全に動作者の制御域を抜け出るものとはならない。結果として語順(a)(b)の双方が許容されるという現象に至ることとなる。
- (三) 介詞フレーズ(Ⅲ)において、介詞フレーズの呈する行為は話者によって発せられるものとなり、動作者の制御域の外に属することになる。同時に、介詞フレーズは極めて大きな述詞義可別度を示すものとなる。結果として語順(b)のみしか許容されないという現象に繋がることとなる。

- (四) 総じて、主語と介詞フレーズのどちらが先に置かれるかという位置関係について、共通した特徴を見出すことができる。両者を対照してみると、介詞フレーズの呈する述詞義、述詞性語句の動作性と状態性等の要因により、前に置かれる前置フレーズの方が述詞性語句に対して相対的により大きな述詞義可別度を認知させるものとなる。即ち、両者の語順表現には可別度領前原則が大きく影響を及ぼしており、述詞性語句と相対的に見た可別度の高さがそれぞれ(I)(II)(III)の語順に反映されたことになる。

例文出典

- 《八》 吕叔湘 1999. 《现代汉语八百词》，北京：商务印书馆。
《常用》 李忆民 1997. 《现代汉语常用词用法词典》，北京：北京语言文化大学出版社。
《实》 刘月华等 2001. 《实用现代汉语语法（增订本）》，北京：商务印书馆。
《手》 李晓琪 2003. 《现代汉语虚词手册》，北京：北京大学出版社。
《现汉》 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 2012. 《现代汉语词典（第6版）》，北京：商务印书馆
《详解》 俞士汶 2003. 《现代汉语语法信息词典详解（第二版）》，北京：清华大学出版社。
《虚》 张斌 2001. 《现代汉语虚词词典》，北京：商务印书馆。

参考文献

(中国語)

- 陈平 1994. 试论汉语中三种句子成分与语义成分的配位原则《中国语文》第3期，161-168页。
陈平 2004. 汉语双项名词句与话题——陈述结构《中国语文》第6期，493-507页。
丁健 2014. 可别度对受事次话题句的影响——以吴语台州话为例《中国语文》第2期，162-173页。
丁声树 1961. 《现代汉语语法讲话》，北京：商务印书馆。
范光林 2010. 不可位移的句首介词短语状语考察《语言应用研究》第11期，36-38页。
范开泰 2007. 汉语话题研究与对外汉语教学《对外汉语教学研究》第3期，97-

108 页。

范晓 2001. 关于汉语的语序问题 (一)《汉语学习》第 5 期, 1-12 页。

谷川裕 2000. 有关“为”类词的认知解释《语法研究和探索 (十)》, 31-48 页。

胡裕树 1995.《现代汉语 (重订本)》, 上海: 上海教育出版社。

贺阳著 2008.《现代汉语欧化语法现象研究》, 商务印书馆。

李秉震 2012. 从隐现和替换看“关于”, “对于”的语义功能《中国语文》第 2 期, 139-148 页。

李临定 1985. 介词短语使用漫谈《语言教学与研究》第 3 期, 15-26 页。

李文山 2013. 定指话题句语义探微《语言教学与研究》第 3 期, 74-81 页。

刘丹青 2002. 从话语功能看话题标记的实质《汉语中的框式介词》第 4 期, 141-153 页。

刘林军 2013. 从话语功能看话题标记的实质《语言教学与研究》第 3 期, 91-98 页。

蔺磺 1997. 现代汉语介词的语法作用《语文研究》第 2 期, 25-29 页。

鲁川 瑞隆 刘钦荣 2002. 汉语句子语块序列的认知研究和交际研究《汉语学习》第 2 期, 13-23 页。

陆丙甫 1998. 从语义, 语用看语法形式的实质《中国语文》第 5 期, 353-367 页。

陆丙甫 2004. 作为一条语言共性的“距离—标记对应律”《中国语文》第 1 期, 3-15 页。

陆丙甫 2005. 语序优势的认知解释 (上)《当代语言学》第 1 期, 1-16 页。

陆丙甫 2008. 语序类型学理论与汉语句法研究《当代语言学理论和汉语语法研究》, 北京: 商务印书馆, 241-256 页。

陆丙甫 2010. 论形式和功能的统一是语法分析的根本基础——兼谈转换语法的发展历史《汉语的认知心里研究——结构 范畴 方法》, 北京: 商务印书馆。

陆丙甫 应学风 2013. 节律和形态的前后不对称《中国语文》第 5 期, 387-405 页。

吕文华 2014.《对外汉语教学语法讲义》, 北京: 北京大学出版社。

聂仁发 2007. “关于”标记话题的语义基础和句法条件《汉语学习》第 5 期, 40-44 页。

聂仁发 2010. “至于”标记的话题《对外汉语教学研究》第 6 期, 159-165 页。

聂仁发 2013.《汉语主语和话题问题研究》, 杭州: 浙江大学出版社。

屈承熹 2013. 话题的表达形式与语用关系, 见徐烈炯 刘丹青主编《话题与焦点新论》上海: 上海出版社, 1-29 页。

史彩霞 2004. 介词的添加与语序的变化《语文学刊》第 9 期, 70-72 页。

王自强 1998.《现代汉语虚词词典》, 上海: 上海辞书出版社。

张宜生 2000.《现代汉语虚词》, 上海: 华东师范大学出版社。

张黎 2012. 主观结构的认知类型学解释《语主观性结构的认知类型学研究》东京:

白帝社，218-230 頁。

朱军 2009. 《现代汉语受事宾语句中论元 共现规律及管控机制研究》，北京：中国社会科学出版社。

〔日本語〕

中西千香 2010. 現代中国語“对”における機能分化について『愛知大学 言語と文化』，35-53 頁。

中西千香 2011. 機能からみた介詞の再分類——実から虚へ——『愛知県立大学 外国語学部紀要第 43 号（言語・文学編）』，313-332 頁。

【付記】本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費（若手研究(B)（課題番号：24720191））の助成を受けたものである。本稿は“IACL-22 & NACCL-26”（アメリカ・メリーランド，2014.5）における口頭発表“关于介词短语状语句的语序问题”に加筆修正を加えたものである。

（原稿受付 2015 年 10 月 1 日）

〈論 文〉

文化的反義語の試案

— 第4のカテゴリーとして —

山 田 政 通

Abstract

Antonymy is usually examined in terms of the three-way distinction, namely gradable, complementary and directional antonyms. This paper proposes a new category of cultural antonyms, which are defined as pairs of multiple incompatibility used for a binary contrast in a specific context. It then offers a preliminary classification of cultural antonyms on the basis of differing contexts in which they occur. This is followed by the detailed examination of actual uses of cultural antonyms both in English and Japanese. Although pairings of cultural antonyms may vary in different languages, they constitute an important part of the cultural schema in each language. A proper treatment of cultural antonyms can be beneficial to language learners' vocabulary enrichment and cultural learning as well as to improved descriptions in dictionaries.

キーワード：反義性，文化的反義語，コンテキスト，多項非両立性，二項対立

目 次

1. はじめに
2. 反義語とその3分類
 - 2.1 反義語とは
 - 2.2 反義語の3分類
3. 文化的反義語 (Cultural Antonyms)

- 3.1 文化的反義語の定義
- 3.2 文化的反義語の分類
- 3.3 文化的反義語の特徴
- 3.4 その他の例
 - (1) 辞書に載っていない例
 - (2) 最近の例
 - (3) 句の例
 - (4) 定形表現 (Formulaic Expressions) の例
 - (5) 文化的反義語としての専門用語 (Jargons)
- 3.5 基本的反義語 (Canonical Antonyms) と反義語ネットワーク
- 4. 結語

... it is a moot point just how many dichotomous relations should be held to fall within the scope of 'antonymy'. (Lyons 1977 : 271)

(一体いくつの2分法的関係が、「反義性」の領域内に収まるべきかについては、議論の余地がある[著者訳、以下も同じ])

It is a matter of controversy how many types of opposites one should usefully recognize in semantic analysis. (Crystal 2003 : 27)

(意味分析において、反対のタイプをいくつ認めるのが有意義かは、論争のあるところである。)

1. はじめに

反義性 (antonymy) は、同義性 (又は類義性)、上下関係、非両立性と共に、語彙の意味関係 (sense relations) の重要な構成要素である。反義性は、従来3つに分類されてきたが、本稿では「文化的反義語」という新たなカテゴリーを提案する。まず、3分類された反義語と比較して、その特徴を明らかにし、具体例を挙げて解説する。さらに実際の使用例を

談話分析の手法等を用いて精査し、最後に文化的反義語の有用性を探る。

2. 反義語とその3分類

2.1 反義語とは

反義語 (antonym) は、一般的には以下のように捉えられている：

- (1) a word that means the opposite of another word

(LDOCE 2009 : 63)

- (2) a word which is opposite in meaning to another word

(Richards and Schmidt 2010 : 27)

両者とも、他の語の「反対 (opposite)」を意味する語という定義であるが、*boy* と *girl* の反義語ペアを例に成分分析 (componential analysis) の手法を利用して、詳細にみると以下ようになる：

- (3) *boy* と *girl* の意味分析

boy = [human] + [child] + [male]

girl = [human] + [child] + [female]

要点は、反対と言っても語義全体が対立しているのではなく、上記の例では最後の [male] と [female] の性別という1点でだけ対立しているのである。共通点（この例では [human] と [child]）を有しつつ最小の差異を示すのが反義語の特徴である。Jones et al. (2012 : 3) は、この点を捉えて「最小差異の原則 (the “principle of minimal difference”)」と名付けている。

2.2 反義語の3分類

反義語は、通例①段階的反義語、②相補的反義語、そして③方向的反義語と3分類されてきた（池上 1996, 中野 2012, Yamada 2009）。段階的反義語（gradable antonyms）とは、more or less という段階的な関係にある反義語で、最大の特徴は反義語間に中間段階があるという点である。*long/short, old/young*（以下、反義語ペアは /[スラッシュ] の左右に配置して示す）などがその例で、中間段階があるので比較級にすることが可能である。図式化すると以下ようになる：

（4） 段階的反義語： A $\longleftrightarrow$ B more or less の関係

両方向へ延びる矢印により、反義語ペアの A と B の間に存在する中間段階を示している。

②の相補的反義語（complementary antonyms）は、A or B という二者択一の関係にある反義語で、①のような中間段階は存在しない。また、段階性がないので比較級にはできない。典型例としては *present/absent, alive/dead* などがあり、A が当てはまれば、B の可能性はゼロとなるという相補的な関係にあり、A と B が意味領域を二分する下記の図のように表示できる：

（5） 相補的反義語：

A	B
---	---

A or B の関係

最後の③方向的反義語（directional antonyms）は、反義語同士が何らかの反対関係にある場合である。

（6） 方向的反義語： A $\Leftrightarrow$ B 反対関係

上記の双方向の矢印（ $\Leftrightarrow$ ）は、反対・対立関係を示すが、主に3種類に下位区分されることが多い：(a)逆方向反義語（reversives：*up/down*, *pull/push*, *begin/stop* など）、(b)両対極反義語（antipodals：*top/bottom*, *entrance/exit* など）、(c)逆関係反義語（converses：*above/below*, *buy/sell*, *husband/wife* など）という分類である。

3. 文化的反義語（Cultural Antonyms）

前節の3分類が、反義語についての伝統的な枠組みであるが、これらに当てはまらない反義語が、以前よりいくつか指摘されてきた。まず、大塚・中島（1982：84）は、「文化的に定義された反義」として *town/country*, *アカ/シロ*などを挙げている。例えば、前者は *I prefer the town to the country*. (Longman Dictionary of English Language and Culture, 2005, p. 147：下線は著者)⁽¹⁾ のように使われ、後者は、祝い事では紅白饅頭、対抗するものを表すときは紅白試合のように使用される（*広辞苑*，大辞泉）⁽²⁾。

Hofmann（1993：40）は、多くのアメリカ人にとり *mountain* の反対は *valley* であるのに対して、多くの日本人にとり *山* の反対は *海* であろうと述べ、言語の知識と共に文化的な背景が関連していると述べている（“the pair constitutes part of their culture as well as linguistic knowledge” p. 44）⁽³⁾。また、Cruse（1986：198 & 2000：167）は *tea/coffee*（食後の飲み物として）や *gas/electricity*（熱源として）などの対立を“accidental opposites”（「偶然の対立語」）と呼び、通常の反義語とは異なり、論理的、本質的な根拠はないが、事実上二つの選択肢しかない状況では対立する語として認識されやすいと指摘している（“*tea/coffee* and *gas/electricity* are felt by some speakers to have a degree of opposite-ness, but only in situations where they represent a two-way choice”）。

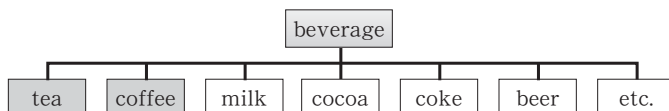
さらに、日本語では、村木（2005：94）が、反義語の1分類として「開いた反義対」を設定し、部屋のタイプとして和室/洋室のペアーなどを例として挙げている。

本稿では、このような従来の3分類には当てはまらない反義語で、文化的な背景を持つと考えられるものを文化的反義語（Cultural Antonyms）と呼ぶことにする。上述の一連の研究は、反義語全体の考察において、あくまでも1分類として文化的反義語に部分的に触れているだけで、その定義付けや下位分類などを含め、文化的反義語の全体像を探る本格的な調査・研究は、著者の知る限り皆無である。本稿は、文化的反義語の全体像に迫る研究の第一歩となることを目指す。

3.1 文化的反義語の定義

文化的反義語とは、元来は下位語として多項非両立性（multiple incompatibility）の関係にある2語が、実際の言語使用で選択肢がその二つに限定され、あたかも相補的反義語のように扱われる例であると、本稿では定義することにする。Cruse の *tea/coffee* を例にすると、下記に示すように、飲み物（beverage）の下位語としては複数のものが存在するが、飛行中の機内食の最後に出される飲み物としては、通例最初の二つに限定されるとすると、この二つが二者択一の関係になり、二項対立（binary opposition）を示す反義語のように扱われるようになる。

（7） 文化的反義としての *tea/coffee*



文化的反義語は、一般の辞書には反義語としては記述されていない場合

が多く、特に語学学習者には学びにくい現状にある。通常反義語は意味論のトピックであるが、文化的反義語は現実の世界と直接係わり、コンテキストに依存するという意味で、語用論的な要素を多く有している。

3.2 文化的反義語の分類

文化的反義語に興味を持つきっかけは、著者自身が1999年から2000年にかけて1年間にわたり、アメリカのワシントンDC近郊で生活した時に遭遇した以下のような実例である。

（8） 文化的反義語の実例：著者のアメリカ滞在の経験から

- 1 at supermarkets : “*Paper or plastic?*”
- 2 at shops : “*Cash or charge?*”⁽⁴⁾
- 3 at drugstores : “*Brand or generic?*”
- 4 at fast food restaurants : “*For here or to go?*”

スーパーのレジでは最後に “Paper or plastic?”（「紙袋、それともビニール袋」）と言われ、店では “Cash or charge?”（「現金ですか、カードですか」）と支払い方法の選択を訊ねられた。また、ドラッグストアで処方箋を出すと “Brand or generic?”（「ブランド薬品、それともジェネリック薬品ですか」）と問われ、ファーストフード店でも “For here or to go?”（「店内でお召し上がり、またはお持ち帰り？」）という選択肢を投げかけられた。いずれも文化的反義語を用いた “A or B” という選択を訊ねる形式で、その当時現地で日常生活を送るには不可欠な重要表現であった（ただし、レジ袋の種類、支払方法、薬品の分類、注文の仕方など現実世界が変われば、これらの文化的反義語も当然変化するであろう）。

文化的反義語は、適用範囲によりいくつかに分類できそうである。ここでは便宜上、①一般的対立（General Opposites）、②国内レベルの対立

(National Opposites), ③ローカルな対立 (Local Opposites) を想定し、例と共に見ていく。

① “General Opposites” : 世界で広く認知されているもの

(9) flights : *domestic / international*⁽⁵⁾

(10) sport events : *home / away*

(11) sexuality : *straight / gay*

まず、①のレベルは、国のレベルを超えて国際的に通用するもので、航空便に関しての *domestic/international* (国内線・国際線) という対立が挙げられるであろう。スポーツの世界では、ホーム (ゲーム) とアウェー (ゲーム) という区別がよく用いられる (勿論、スポーツの種類によるが)。また、性的嗜好についても、異性又は同性を好むかというという区別が広く認知されているように思える。

次の②は、国内レベルでの対立で、特定の言語文化圏内で通用するものが含まれる。例えば、イギリス (UK) の政治では *Conservative/Labour* (保守党[の]/労働党[の])、アメリカ (US) では *Democrat/Republican* (民主党[の]/共和党[の]) のペアが挙げられる。

② “National Opposites” : 特定の言語文化圏で通用するもの

(12) UK politics : *Conservative / Labour*

(13) US politics : *Democrat / Republican*

(14) UK universities : *Oxford / Cambridge*

(15) UK buses : *bus / coach*

(16) US governments : *state / federal*

また、イギリスを代表する大学として *Oxford* 大学と *Cambridge* 大学の

二つがあり、よきライバルとして互いに比較の対象となっている（両者の関連性の強さを示すように、*Oxbridge* という混成語も生まれている）⁽⁶⁾。

(15)の「市内バス」と「長距離（観光）バス」の峻別も、イギリス英語の特徴であろう。(16)の「州政府(の)」と「連邦政府(の)」の対立は、アメリカの政治・社会制度を理解する上での不可欠なキーワードであり、教授上の価値が高いと著者は考える（後述の大麻使用のニュースの例(21)は、あくまでも *state* レベルの状況を扱っている点に注意を払う必要がある）。

第3のローカルな対立は、一つの言語文化圏中の限られた範囲内で通用するものを想定する。

- ③ “Local Opposites”：一つの言語文化圏中の限定された範囲で通用するもの

(17) Rivals of football clubs in Glasgow, Scotland (UK) :

Celtic / Rangers

(18) in the minds of people in Edinburgh, Scotland (UK) :

Edinburgh / Glasgow

(19) in the minds of people in Washington, D. C. (US) :

Washington, D. C. / New York

地域限定のローカル対立として、上に3つの例を挙げたが、いずれも著者の現地での滞在体験が基になっている。まず、(17)ではイギリス・グラスゴーに本拠地を置く二つのサッカーチーム、*Celtic* と *Rangers* が挙げられている。前者はカトリック系、後者はプロテスタント系サポーターが応援していて、強豪の両チームは長年のライバルとなっている。(18)は、イギリス・スコットランドのエジンバラ市の住人には、*Edinburgh/Glasgow* という対抗意識があることを示している。エジンバラは、人口面ではグラスゴーに劣るが、スコットランドの首都としての誇りや金融・保険

業で潤ったホワイトカラーの都市という自負があり、労働者の町というイメージを持つ後者との違いに敏感である。同様に、(19)のアメリカのワシントン D. C. の住人にとっては、*Washington, D. C. /New York* という対比が存在する。都市の規模としては大差をつけられているものの、ワシントン D. C. の住人には、政治の中心地である自負があり、何かにつけビジネスの中心地であるニューヨークに対抗意識を持っている（ただし、N. Y. の住人には、ワシントン D. C. に対する特段の対抗意識はないようで、あくまでも一方通行の思いのようだ）⁽⁷⁾。

3.3 文化的反義語の特徴

文化的反義語の特徴の一つとして、まずコンテキスト依存（context dependency）が挙げられる。この特性は、反義語一般の特徴であるとも言われている（“context sensitive”：Jones et al. 2012）が、3.4 の実例で示されるように、文化的反義語ではその度合いがさらに高くなる。

文化的反義語は、文化的背景知識を示すスキーマ（schema）の重要な一部を構成すると思われるが、同じ英語圏でもバリエーションがあり、かつ時の経過と共に変化する点に留意する必要がある。例えば、先に挙げたアメリカ英語の表現 “For here or to go?” は、他に “To stay or to go?” という言い方もあり、イギリスでは “For here or take away?” が一般的だという（内田 2009：203-204）。また、通時的な変化の例を挙げると、幼児について英語文化圏では “blue for boys and pink for girls” という男女の色分け（blue/pink）があるが、これは過去 30 年ほどの比較的新しい慣習で、それ以前は明確な区別はなかったようである（Maglaty 2011）。

3.4 その他の例

(1) 辞書に載っていない例：*kid / boy*

前述のように、文化的反義語は、辞書に明確な記述がない場合が多い。

次の *kid* と *boy* の対立も、そのような例である。この例は、中年男性が自分の少年時代を回想する部分で、8歳の時初めて学校をサボり、年上の不良グループと釣りに行った場面の描写である（下線は著者）：

(20) *kid* vs. *boy*（子供の成長過程を示す語として）

... I knew that I wasn't a kid any longer, I was a boy at last. And it's a wonderful thing to be a boy, to go roaming where grown-ups can't catch you, and to chase rats and kill birds...
 （出典：Orwell, George (1939) *Coming Up for Air*, p. 66：「もう自分は子供ではなく、ついに少年になったと気付いた。そして、少年になれるのは素晴らしいことで、大人に見つからないところを歩き回ったり、ネズミを追いかたり、鳥を殺したり…」）

LDOCE（2009：958）の *kid* の第1項には、“[*informal*] a child”とあり、それに続く REGISTER の解説には“**Kid** is informal. For formal or written styles use **child**”（太字は原文のまま）という記述がある。つまり、*kid* はスタイルの点で *child* と類義関係にあり、男の子だけでなく女の子も含むので、正確には男子限定の *boy* に対する反義語にはなりえない。また、*kid* と *boy* は、子供の成長過程を示す類義語とも捉えることもできるであろう。いずれにせよ、辞書では反義語との記述はないが、上記の例では「もう自分は子供（*kid*）ではなく、ついに少年（*boy*）になった」と、*kid* と *boy* は明らかに対立概念として提示されている⁽⁸⁾。

(2) 最近の例：*medical* / *recreational*（大麻使用の区分として）

文化的反義語は、コンテキストに依存して成立するので、通常は反義語と見なされないペアも、特定のコンテキストで対立概念として使用されることがある。以下の例は、アメリカの州（state）レベルでの大麻解禁

のニュースで、大麻使用に関しては *medical*（医療用）と *recreational*（嗜好用）が、文化的反義語として機能する（下線は著者）。

(21) *medical* / *recreational*（大麻使用の区分として）

Twenty-one states and the District of Columbia now have laws legalizing marijuana in some form. So far, only Colorado and Washington states have legalized marijuana for recreational use, while other states permit medical marijuana. A limited medical marijuana law most recently went into effect Oct. 1 in Maryland ...

（“State Marijuana Laws Map” の解説：出典 <http://www.governing.com/gov-data/safety-justice/state-marijuana-laws-map-medical-recreational.html>/current as of Oct 2013：2013 年 11 月 30 日検索）

（21 州とコロンビア特別区は、何らかの形で今や大麻を合法化している。医療用大麻を承認している州はあるが、これまでコロラド州とワシントン州だけが嗜好用大麻を合法化している。直近の例ではメリーランド州で限定的な医療用大麻を合法化する法律が 10 月 1 日に発効した。）

例文中の *medical* は *medicinal* となることもあるようだが、医療と嗜好という概念は、通常では対比的に用いられることないであろう。

Jones et al. (2012 : 147) は、このようにコンテキストに依存した反義語を “contextually constructed pairs” と呼んで、通常の反義語との区別を示唆している。また、Jeffries (2010) は、このような対立語を “constructed opposites” と呼んでいて、その詳細な分析は注目に値する。

(3) 句の例 : *go home* / *face arrest*

ここまでは、単語の例が多かったが、ここでは句の例を取り上げる。下記は、2013 年夏にイギリス内務省が、不法滞在移民の国外退去を求めるメッセージを掲載した宣伝カーをロンドン市内に走らせたというニュースの一部である：

(22) “*Go Home or Face Arrest*”

(⇒ は著者の追加)

The Home Office vans encouraging illegal immigrants to 'go home or face arrest' (掲載写真のキャプション：[イギリス] 内務省のトラック、不法滞在移民に「祖国へ帰れ、さもなくば逮捕だ」と促す；出典 *The Telegraph*, 18 Aug. 2013, <http://www.telegraph.co.uk/news/uknews/immigration/10230436/Pickles-questions-go-home-or-face-arrest-campaign.html>)：2013 年 10 月 15 日検索：下線は著者)

不法滞在移民に、「祖国へ帰れ、さもなくば逮捕だ」と警告をしている。このメッセージでは、*go home* と *face arrest* という句が二項対立を構成し、文化的反義語となっていると考えられる。この広報活動は、その後反対運動が起り中止になるが、*go home* がただ単に「自宅へ帰る」ではなく、「祖国へ帰れ」というヘイト・スピーチの要素を含むこと、また実際

には他の選択肢（例えば、「亡命する」、「第3国へ行く」、「法廷に訴える」など）をすべて度外視し、二つの選択肢を強要する内容である点などが、特徴として浮かび上がる。特に後者の点は、政治的な文脈でたびたび観察できる現象である。森岡（2005：71）は、反義語による「二者択一の判断は、必然的に二価判断を導き、事実の世界の多様な実態を消去して、安易な独断を生む結果になる」と二項対立的な議論の弊害を警告している⁽⁹⁾。傾聴に値する指摘であろう。

(4) 定型表現 (Formulaic Expressions) の例

前節では句の例を見たが、さらに表現の範囲を広げ、ここでは定形表現の例を見てみよう。英語の例の蓄積が十分でないので、ここでは日本語の例を取り上げる。以下のような例が、文化的反義語の候補となると思われる：

- (23) [外出時/帰宅時] : 行ってきます / ただいま
- (24) [食事の時] : いただきます / ごちそうさま
- (25) [挨拶] : おはよう(ございます) / おやすみ(なさい)
- (26) [店員の挨拶] : いらっしゃい(ませ) / ありがとうございます
ました

いずれも物事の初めと終わりを区切る表現で、対極性を有する。その意味では、本稿の最初で触れた反義語の3分類の一つである方向的反義語の中の両対極反義語（例 *beginning/end*, *introduction/conclusion* など）に類似している。

また、これらの文化的反義語は、日本の言語文化の特徴を象徴する側面があるように思える。いくつか例を挙げよう（下線は著者）：

- (23′) 『いきますから，ただいままで。』（子供用ケータイの電車車内広告；NTT ドコモ；山手線，2011.10.16）



（出典：http://photozou.jp/photo/photo_only/109113/105135241?size=1024#content，2015年9月5日検索）

- (24′) 食卓に初物が載っていても特別の言葉を唱えた覚えは無く，いつもどおり「頂きます」で始まり「ごちそうさま」で終わる食事だったが，なぜか改まった感じがした。（渡辺一枝 2013「言葉は誰のものか？」『図書』（岩波書店）774号，p.1）

- (24″) 『「いただきます」「ごちそうさま」も和食の文化』（読売新聞：2013年12月2日，p.20）

- (25′) 加賀さんは仏壇兼礼拝所の前であや子さんに，朝は「おはよう」，寝る前は「おやすみ」と呼びかけます。（橋本五郎 2013書評「夫婦という不思議なもの」読売新聞9月8日，p.15）

(23′)は，家庭で子供の発する挨拶の言葉の中に，親の「子供の安全」を願う気持ちを織り込んで，広告のコピーに活用している例である。(24′)と(24″)は，食卓での定形表現であるが，(24′)は食卓の日常性を，(24″)

では和食の特徴をそれぞれ象徴する言葉として機能している。特に後者の例は、和食がユネスコの無形遺産へ登録されるという新聞記事から取ったものであるが、和食という具体的な事物を象徴するものとして「ことば」が挙げられている点に興味が引かれる。(25')では、亡き妻への思いを象徴することばとして、定形表現が使われている。これらの文化的反義語は、日本の日常生活（家庭、親子関係、食卓と食文化、夫婦愛など）のあり方（又は、その理想像）を端的に表現するキーワードになっていて、日本の文化理解には不可欠な言葉であろう。

(5) 文化的反義語としての専門用語 (Jargons⁽¹⁰⁾)

コンテキストに依存する文化的反義語の例として、専門用語を考えることもできるであろう。専門用語は限定された領域内で機能するので、先の3.2 で見た適応領域の3分類では“Local Opposites”に当たるとと思われる。例えば、(応用)言語学と語用論という専門分野で二項対立的に使用される用語のペアを考えると以下のような例が挙げられる：

(27) 専門用語の例

- (応用)言語学の分野：*accuracy/fluency, competence/performance, EFL/ESL*⁽¹¹⁾ (Richards and Schmidt 2010 より)
- 語用論の分野：*utterance/sentence, force/sense, principles/rules* (語用論と意味論を比較する記述部分：Leech 1983 より)

当然のことながら、通常の辞書で *accuracy* や *utterance* を調べても、反義語として *fluency* や *sentence* の記載はないであろう。このような専門用語は、その分野でのディスコースにおいてのみ有効な二項対立の反義語であり、文化的反義語の一種と見なすことができる。

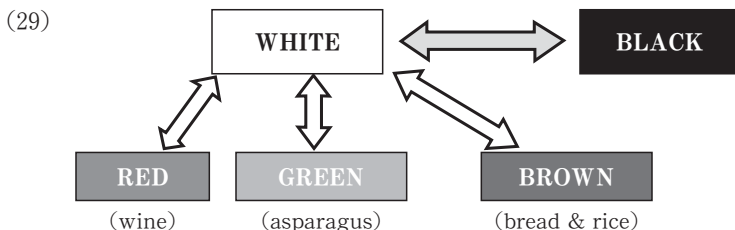
3.5 基本的反義語（Canonical Antonyms）と反義語ネットワーク

Jones et al. (2012) に従い、反義語の典型例（又はプロトタイプ：*old/new*, *good/bad* など）を“基本的”反義語（Canonical Antonyms）と呼ぶことにする。これらは、反義語としての認知度が高く、2.2で紹介した3分類のどれかに属し、辞書にも記述されている反義語である。一方、本稿で取り上げている文化的反義語は、その周辺部に位置すると考えられる。基本的反義語のひとつである *white/black* を例に取り、その *white* を中心に、関連する文化的反義語の一部をまとめると、以下のような反義語のネットワークが見えてくる（Jones et al. 2012：14）：

(28) *white* の反義語ネットワーク⁽¹²⁾

- 1 ***white/black*** : as canonical antonyms
- 2 *white/red* : in the context of wine
- 3 *white/green* : in the context of asparagus
- 4 *white/brown* : in the context of bread & rice（著者の追加例）

基本的な二項対立である *white/black*（太文字）に続き、ワインに関するコンテキストでは、*white/red*、アスパラガスでは *white/green*、パンやライスでは *white/brown* という対立が考えられるであろう。1の基本的反義語に比べ、2以降の文化的反義語は、特定のコンテキストでの使用に限定される可能性が高い。以下は、この反義語ネットワークを図式化する場合の一案である：



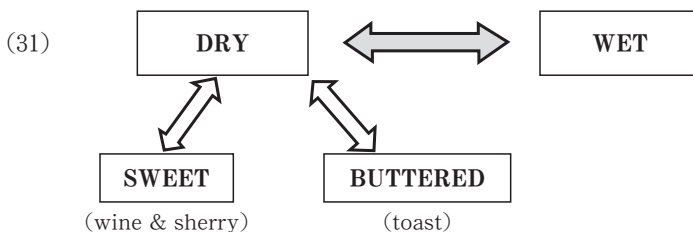
上部の太い矢印（ $\Leftrightarrow$ ）が基本反義語の関係を示し、その下部に文化的反義語を配置し、カッコ内に特定のコンテキストを示した。このような図式は、語相互の意味関係のネットワークを可視化するだけでなく、教授・学習への応用、辞書記述の改善へもつながると考えられる⁽¹³⁾。

もう一つ例を挙げよう。基本反義語のペアとして *dry/wet* があるが、その周辺には 2, 3 の対立が考えられる（Hoey 2013 の配布資料より）：

(30) *dry* の反義語ネットワーク

- 1 *dry/wet* : as canonical antonyms
- 2 *dry/sweet* : wine, sherry etc.
- 3 *dry/buttered* : toast⁽¹⁴⁾

2 はワインやシェリーを話題にする時の対立で、3 はトーストでバターなど塗っていないものを *dry toast* と表現するということから生じる対立を指す。図式化すると以下ようになる。



この様に可視化することにより、(28)と同様に、反義性を示す意味のネットワークがより捉えやすくなるとともに、教授上のヒントになると考える。

4. 結 語

文化的反義語は、ことばとその背後にある文化の繋がりを示す典型例であり、文化を読み解くキーワードとなる。文化的反義語を特定することは、ある時点でのその文化の特質の解明と理解につながる。また、文化的反義語は、言語教育での活用も期待できる。語彙指導で、反義語としてペアで取り上げれば、単独で取り上げるよりさらに語彙拡張へ貢献し、その文化背景も同時に教授できるメリットが生じる。例えば、アメリカ文化関連では、*state*（州政府の）と *federal*（連邦政府の）は個々に教えるのではなく、ペアで教える方がより効果的であると思われる。さらに、実用的な提案としては、前節で例示した反義語のネットワークを参考に、学習者の語学辞典に文化的反義語の記述を充実させることが考えられる⁽¹⁵⁾。文化的反義語の記述が追加されれば、現実の言語使用に沿った情報が増し、学習者の利便性が上がるであろう。

本稿では、文化的反義語は元々多項対立であったものが、特定の場面で二項対立と捉えられる現象であると定義したが、英語や日本語を含め他の言語にもみられる普遍的な認知上の現象であると思われる。今後の課題としては、文化的反義語の実例をさらに精査し、よりの確な定義を提案することである。また、反義語は、二項対立を基盤として成立しているが、その普遍性の検証と、また危険性についても論考を深めたい。二項対立は、物事を把握しやすくする効果を持つと同時に、複雑な現実を過度に単純化する危険も伴う。先に見た不法移民に対する政府のスローガンのような政治色の濃いディスコースに注目すると、文化的反義語使用の新たな側面が浮かび上がると思われる。

最後に、2.1 で述べたように、Jones et al. (2012 : 3) は、反義語は「最小差異の原則」(the “principle of minimal difference”) に基づくと述べている。また、田中 (2005 : 85) は類義語と反義語は、「別物ではなく、両者は、きわめて近い関係にあり、お互いに関連し合って」いると指摘している。そのように考えると、反義語と類義語との差異は一体何かという疑問が生じてくる。事実、文化的反義語の例を見ると、類義性を感じる場合が多々ある。このような反義語と類義語の関連性と差異も今後の課題としたい。

* 本稿は、著者の口頭発表「“文化的” 反義語の試案：第4のカテゴリーとして」(日本語用論学会：第16回大会，慶應義塾大学・三田校舎，2013年12月8日)と，講演「反義性再考：“文化的” 反義語の試案」(日本語)(国立台湾大学，2014年5月8日)に基づいている。熱心に質問・コメントをいただいた大学院生や先生方へ感謝の意を表したい。

《注》

- (1) 次の例もこの対比の例である：“I don't like to see the earth getting fuller and country turning into town” (Orwell, George [1939] *Coming Up for Air*, p. 213 : 「土地が混み合い，田舎が都市に変わるのを見たくない」)。また，イソップ物語の「田舎のネズミと町のネズミ」の英訳タイトルには，“country mouse” と “town mouse” が使われている (*Aesop's Fables*, 講談社インターナショナル，1988年，p. 30)。
- (2) 『大辞泉 (第2版)』(2012年，小学館，p. 1241) によると，「紅白試合」「紅白戦」などの「紅白」は，源平時代 (11世紀末から12世紀末までの約100年間) に源氏は白旗を，平家は赤旗を用いたことが起源であるという。また，台湾大学での講演の際に台湾の方から，中国語では「紅」は慶事を，「白」は凶事を表すとのコメントを頂戴した。
- (3) 田中 (2005 : 84) は，「山と海」の対立以外にも，「山と川」，「山と谷」などもあるとして，「反義語意識の個人差が大きい」と述べている。台湾大学での講演の際に，中国文化圏でも，古代中国哲学から伝わる陰陽 (yin-yang) の考え方に基づき，「海と山」は対をなすとのコメントを参加者から

頂いた。

- (4) 台湾大学での講演で、台湾人でアメリカの西海岸（サンフランシスコ）で生活したことのある方から、“Cash or credit?” という表現をよく聞いたとのコメントがあった。更に、中年の店員からは“Cash or charge?” と訊かれたという。このバリエーションが地域差、または年代差の為かは判断できない。
- (5) 読売新聞（2011 年 10 月 18 日）によると、アメリカで宇宙観光用の宇宙船が離着陸する“spaceport”（宇宙港）が完成したという。将来は地球上での飛行に対して、“space”（宇宙）という区分が生まれるのではないだろうか。
- (6) 日本の大学でも、国立では東京大学（東大）と京都大学（京大）が、また私立（関東）では、早稲田大学（早大）と慶応大学（慶大）が、対比して用いられることがある。特に後者では、「早慶戦」などと略して用いられることがある。
- (7) さらに、ローカルな対立の先には、「個人レベルの対立」（Idiosyncratic Opposites）が考えられるであろうが、汎用性は低くなる。
- (8) 大石（1995：89）は *kid* を「ガキ」と訳出している（大石健太郎〔訳〕『空気をもとめて』彩流社）。
- (9) 2001 年の 9.11 同時多発テロ事件直後の演説で、ブッシュ・アメリカ大統領（当時）が、“Either you are with us, or you are with the terrorists.”（「私たちの味方か、もしくはテロリストの味方かのどちらかだ」）という二者択一の選択を世界に向けて発信したことが思い起こされる（アメリカ議会の両院合同会議での演説，2001 年 9 月 20 日：President George W. Bush, in an address to a joint session of Congress on September 20, 2001）。
- (10) Swann et al. (2004：157) は “jargon” を以下のように定義している：“technical or other specialist vocabulary used within a certain social group --- most frequently a professional or special interest group --- and that may not be understood by outsiders.”（「ある特定の社会グループ --- 最も多いのは専門職や特別な利益団体 --- 内で使われる専門用語又は特別な用語で、部外者には理解されないかもしれない語彙」）。
- (11) 台湾大学での講演で、ある参加者から、EFL と ESL は類義語に近いのではないかという趣旨のコメントがあったが、非ネイティブへの英語教育を論じる文脈では、この 2 語は互いの違いに焦点を置いて用いられることが多い（Richards and Schmidt 2010：196-197）。また、台湾滞在中、「本省人」と「外省人」の区別があり、選挙運動ではそれぞれ「緑」（台湾独立派）と「青」

(中国大陸志向派)をイメージカラーとしてポスター等に使用しているとの情報を得た(参照: 亞洲奈みずほ (2012)『現代中国を知るための60章』明石書店, pp.56-60)。改めて街中を観察すると、この2色の色分けは随所で見られた。

- (12) Yamada (2009: 50-51) で指摘したように、基本語彙の反義語は1対1の関係では収まらないことが多い。例えば、*man* に関しては、*man/woman* (性別)、*man/boy* (年齢)、*man/animal* (種の分類)、また、*lose* については、*lose/win* (試合、ゲーム、議論、訴訟、戦争など)、*lose/gain* (時間、体重など)、*lose/find* (物を無くすという意味の *lose*) など複数の対応関係が考えられる。
- (13) この反義語ネットワークは、類義語など、その他の意味関係の情報と共に、最終的にはある語の意味関係全体を示すネットワークの一部を構築することになる。
- (14) *LDOCE* (2009: 523) によると、“dry bread/toast” とは、“bread etc eaten on its own without anything such as butter or jam spread on it” (「バターやジャムなど、何もつけずにそれだけで食べるパン」) と説明されている。
- (15) Jones et al. (2012: 23) は “... none of the major commercially available English learner dictionaries list antonyms in a systematic way.” (「市販されている主要な英語学習者用辞書で、反義語を系統立てて記載しているものは皆無である」) と述べ、反義語の扱いが不十分な現状を指摘している。

参考文献

[和書]

- 池上嘉彦 (編). 1996.『英語の意味』東京: 大修館.
- 宮地裕 (編). 2005.『「日本語学」特集テーマ別ファイル(2) 意味Ⅱ』東京: 明治書院 (「対義語」部分は1987年6月号の再録).
- 森岡健二. 2005.「私の対義語観」宮地 (編) 所蔵, pp.68-71.
- 村木新次郎. 2005.「対義語の輪郭と条件」宮地 (編) 所蔵, pp.89-101.
- 中野弘三 (編). 2012.『意味論』東京: 朝倉書店.
- 大塚高信・中島文雄 (監修). 1982.『新英語学辞典』東京: 研究社.
- 田中章夫. 2005.「対義構造の性格」宮地 (編) 所蔵, pp.77-88.
- 田中春美 (編). 1988.『現代言語学辞典』東京: 成美堂.

- 寺澤芳雄（編）. 2002. 『英語学要語辞典』東京：研究社.
内田聖二（編）. 2009. 『英語談話表現辞典』東京：三省堂.

[英書]

- Cruse, Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan. 2000. *Meaning in Language: An Introduction of Semantics and Pragmatics*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Cruse, Alan. 2006. *A Glossary of Semantics and Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Crystal, David. 2003. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics* (5th edition) Malden, MA and Oxford: Blackwell.
- Hoey, Michael. 2013. “Word Meaning, Choice, and Corpus Linguistics” (Handouts), *Lecture Series on Corpus Linguistics*, held at Rikkyo University, Tokyo, June 4th.
- Hofmann, Th. R. 1993. *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*. Essex and New York: Longman.
- Jeffries, Lesley. 2010. *Opposition in Discourse: The Construction of Oppositional Meaning*. London and New York: Continuum.
- Jones, Steven. 2002. *Antonymy: A Corpus-based Perspective*. Oxon, UK: Routledge.
- Jones, Steven, et al. 2012. *Antonyms in English: Construals, Constructions and Canonicity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Lyons, John. 1977. *Semantics* (2 vols). Cambridge: Cambridge University Press.
- Maglaty, Jeanne. 2011. “When Did Girls Start Wearing Pink?” (smithsonian.com [posted on April 7, 2011]: <http://www.smithsonianmag.com/arts-culture/when-did-girls-start-wearing-pink-1370097/?no-ist=&page=2> : 2015 年 5 月 5 日検索)
- Murphy, M. Lynne. 2003. *Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy, and Other Paradigms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Richards, Jack C. and Schmidt, Richard. 2010. *Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics* (4th edition). Harlow, UK: Pear-

son Education Limited.

Swann, Joan, et al. 2004. *A Dictionary of Sociolinguistics*. Tuscaloosa, Alabama: University of Alabama Press.

Yamada, Masamichi. 2009. "Making More Sense of Antonymy in English."
拓殖大学語学研究（言語文化研究所）第 120 号, pp. 43-79.

[辞典]

LDOCE = Longman Dictionary of Contemporary English. 2009 (5th edition)
Essex, UK: Pearson Education Limited.

（原稿受付 2015 年 9 月 9 日）

〈調査報告〉

岩国英国語学所教師 H. A. Stevens に関する研究 —— 先行研究での疑問点の解明に焦点を当てて ——

保 坂 芳 男

要 旨

本研究は、明治4年に設立された岩国英国語学所の教師 H. A. Stevens の出生地、Jersey 島での調査結果をまとめたものである。卒業した Victoria College の記録や、現地の郷土史研究家 R. Pivert 氏の論文の分析から今回明らかにされたことをまとめた。それによると、Stevens には、13 人の兄弟姉妹がおり、3 人がケンブリッジ大学に入学した。兄弟姉妹のうち、教師になったのが 3 人、数学が得意だったのが 4 人、聖職者になったのが 3 人であった。また、英仏海峡のフランス寄りにある Jersey 島の異国情緒的な雰囲気が Stevens を日本に駆り立てた可能性についても言及した。

キーワード：スティーベンス、岩国英国語学所、明治初期の英語教育

I. はじめに

筆者は、2006 年から岩国英国語学所の研究を行っており、その成果を論文としてまとめてきた。しかしながら、下記に述べるような疑問点は払拭されぬままであった。

ところが、2014 年度拓殖大学短期留学制度によりロンドン大学日本研

究センターで研究する機会を得ることができ、1月余り現地での調査を進める中で疑問点が明らかにされた。

本研究では、保坂（2007）（2008a）（2008b）で解明できなかった点で、現地調査で明らかになった点を紹介したい。

Ⅱ．主な先行研究

岩国藩は、1871（明治4）年7月に神戸の商会で働いていたイギリス人ステーブンス（Herbert Augustus Stevens, 1847-1878）を破格の待遇で招聘し、英語によるイマージョン教育を行った。この学校を岩国英国語学所（以下、「語学所」と略記）といい、日本のエジソンと言われた藤岡市助や、帝国図書館の初代館長、田中稲城ら日本の近代化に貢献した多くの人材を輩出したが、Stevensの任期満了に伴いわずか2年で閉校となった。

岩国英国語学所および教師、ステーブンスに関する主な先行研究としては、以下の5点が挙げられる。

（1）上杉進（1998）. 「英学史始め—in Iwakuni — 岩国英国語学所と英国人教師ステーブンス —」『英学史研究』第31号, pp. 27-41.
ステーブンスに関する基本的な資料を網羅し、語学所の実態について詳しく述べている。ステーブンスの契約書、教授課程、生徒勤怠表（成績一覧表のようなもの）が紹介され、授業の概要がわかる。また、生徒の紹介もされており、語学所を「有為な若者に西洋文明の息吹を伝え、大きく育つ立派な種を蒔いた」（p. 37）学校として高く評価している。

（2）宮田伊津美（2001）. 「岩国の洋学」『英学史論叢』（日本英学史学会中国・四国支部研究紀要）第4号, pp. 3-10.

宮田氏は、岩国徴古館の元館長で、岩国の郷土史研究家である。その研

究方法は、岩国藩関連の古文書を丁寧に読み分析するものである。語学所設置に関する藩の文書、生徒の一人で、後の東芝の創設者の一人になった藤岡市助関係の文書を紹介している。

- （３） 保坂芳男（2007）. 「岩国英国語学校教師ステーベンスに関する研究 ― 採用経過・契約を中心として」『英学史論叢』第 10 号, pp. 23-32.

岩国藩の教育政策重視のなかで、明治期の人材育成のためには英学が重要であるという藩主の方針の下、語学所が設立された経緯を明らかにした。語学所教師、ステーベンスの招聘に関して、木戸や伊藤、グラバーが関与しているのではないかという仮説を紹介した。

- （４） 保坂芳男（2008a）. 「岩国英国語学所卒業生の進路に関して ― 教師ステーベンスの影響に焦点をあてて ―」『英学史論叢』第 11 号, pp. 3-12.

語学所の卒業生のうち 16 人のその後の進路の調査を行った。英語、教職、キリスト教関係を中心に卒業生の進路を明らかにした。中でも東芝の基礎を作った藤岡市助（1857-1918）、キリスト教の牧師として活躍した今田参（1860-1932）、帝国図書館初代館長で、W. Denning の English Readers の編さんに協力した田中稻城（1856-1925）、英吉利法律学校（中央大学の前身）の創立に関わった渡辺安積（1860-1887）、商業学校の教員や校長として活躍した三戸得一（1861-1931）の 4 人について卒業後のキャリアを詳細に述べた。

- （５） 保坂芳男（2008b）. 「岩国英国語学所に関する研究 ― 教育内容と教授法の解明を中心として ―」『日本英語教育史研究』第 23 号, pp. 101-122.

岩国学校教育資料館には、語学所の生徒の成績や欠席日数を記した勤怠表（進業表）が3枚残っている。その史料や他の関連史料の分析、イギリス海峡地域歴史研究会（www.channelislandshistory.com）事務局の Ray Le Pivert 氏、ステーブンスが通っていた Victoria College の司書 Ann Harrison 氏とのメールのやり取りによって以下の5点が明らかにされた。

- ① イマージョン教育が実施されていた。
- ② 教科書には、『岩国中学校蔵書目録』（毛利家文庫）に記載されている洋書が用いられた可能性が高い。
- ③ 習熟度別授業が行われていた。
- ④ わずか1年半の教授でありながらかなりの成果が上がっていた。
- ⑤ ステーブンスは教員資格を持っていなかったようである。

Ⅲ. 本研究の目的

今回のイギリス訪問の目的は、今まで推測でしかなかった点の解明と、現地での調査によって新たな資料を発掘することであった。とりわけステーブンスの日本への移住動機、岩国での教師志望の動機の解明に迫りたいと考えている。

Ⅳ. Victoria College の記録より

1929年発行の Victoria College（資料1）の卒業生名簿（*Victoria College Register, 1852-1929*）に、Stevens 兄弟の情報（資料2）が載っている。男兄弟7人が Victoria College に入学している。その後、ケンブリッジ大学に3人が進学した。教師になったのが3人、数学が得意だったのが4人、聖職者になったのが3人である。また、イギリスから遠いと思われ

るニュージーランド（以後は NZ）に移住したのが、航海中に死亡した John を含めて 3 人である。

V. Pivert 氏の論文より

Ray Pivert 氏（資料 3）は、Jersey 島の郷土史研究家である。Jersey 島には、1993 年に設立された Jersey Archive があり、Jersey 島の歴史に関する史料の収集と研究成果の発表を行っている。Pivert 氏は以前郷土史研究誌の編集長を務めており、彼の論文に Stevens 家のことが詳細に述べられている（資料 4）⁽¹⁾。

彼の調査では、特に Herbert の姉妹の情報が明らかになっており、かなり貴重なものである。その論文で明らかになったことは、以下の 2 点である。

- ① 14 人兄弟姉妹で、兄弟だけでなく姉妹の中にも教師になったものがある。
- ② フリーメイソンと密接なつながりがあった。

VI. ま と め

前述したように筆者は、2014 年の 8 月にイギリスで研究する機会を得ることができた。

まず Jersey 島に到着した時に思ったのが、イギリス領でありながらブリテン島とは違う異国情緒的な雰囲気であった。地理的にはかなりフランスに近くフランス人観光客が多かったし、港には多くの多国籍の船の寄港が窺えた。

Jersey 島の義務教育制度は 1902 年に始まっており以前は裕福な家庭は家庭教師を雇っていたらしい。Stevens 家の兄弟の多くは数学が得意であっ

たのは、その家庭教師の影響が考えられる。Herbert も数学が得意であったかは不明であるが、語学所で算術を教えた時の記録（勤怠表、進業表）が残されている（保坂，2008b，pp.115-117）。

さらに兄弟姉妹の多くが教師になっていることから Herbert にとって教職は身近な職業であり憧れの職業であったと推測できる。

Herbert が、遠く神戸の商館で働き、1871 年に岩国藩の要請に応じて 2 年間語学所の教師を務めたのは、兄弟姉妹の影響、Jersey 島の環境的な影響が大いに働いたと推測される。

謝 辞

本研究は、平成 26 年度拓殖大学短期留学制度のおかげで現地調査を行うことができた。また、ロンドン大学日本研究センターの受け入れで研究が格段に捗った。拓殖大学、及びセンター長の Stephen Dodd 氏に感謝申し上げたい。誠にありがとうございました。

《注》

- (1) Victoria College に進学した男 7 人の情報の中で、資料 2 と重複する部分は割愛させて頂いた。
- (2) Pivert 氏によると、Stevens 家はプロテスタントだということではあるが確証がないので聖職名は英語のままとした。
- (3) St. Helier は Jersey 島最大の町であり主都（Capital）である。Jersey 島は、イギリスの国内法上は連合王国には含まれないイギリス王室属領として位置づけられている。

参考文献

- 岩国市史編集委員会（1971）.『岩国市史』岩国市役所.
岩国市史編集委員会（2001）.『岩国市史 資料編二 近世』岩国市役所.
上杉進（1998）.「英学史始め—in Iwakuni — 岩国英国語学所と英国人教師ステーブンス —」日本英学史学会『英学史研究』第 31 号，pp.27-41.
保坂芳男（2007）.「岩国英国語学所教師ステーブンスに関する研究 — 採用経過，

- 契約を中心として——」『英学史論叢』（日本英学史学会中国・四国支部研究紀要），第 10 号，pp. 23-32.
- 保坂芳男（2008a）. 「岩国英国語学所卒業生の進路に関して —— 教師スティーベンスの影響に焦点をあてて ——」『英学史論叢』（日本英学史学会中国・四国支部研究紀要）第 11 号，pp. 3-12.
- 保坂芳男（2008b）. 「岩国英国語学所に関する研究 —— 教育内容と教授法の解明を中心として ——」『日本英語教育史研究』 第 23 号，pp. 101-122.
- 宮田伊津美（2001）. 「岩国の洋学」『英学史論叢』第 4 号，pp. 3-10.
- 山口県（2000）. 『山口県史 史料編 近代 I』山口県発行.
- 山口県教育會（1925）. 『山口県教育史 上巻』大同印刷舎.
- Ray Le Pivert（2008）. ANOTHER JERSEYMAN ABROAD, *The Channel Islands Family History Society Journal*, No. 117, pp. 164-167.

（原稿受付 2015 年 9 月 17 日）

資料1 現在の Victoria College (2014 年 8 月 13 日筆者訪問)



資料2 *Victoria College Register* にある Stevens 家の子どもたち (抄訳)

1852 年入学

59 Stevens Thomas

T. Stevens の息子。Shamrock Terrace 出身。75, 172, 356, 357, 667, 848 の兄。Math medal と Queen's Exhibition (奨学生) を獲得。1859 年卒。Foundation Scholar (奨学生)。Dowman 奨学生, ケンブリッジ大学 St. John's College 卒。第 23 番 wrangler (数学の優等卒業試験一級合格者) になる。1864 年ロンドン市内 Southwark 地区の St. Savior 校の教師。1874 年に聖職授任 (ordain)。その後, 多くの学校で教師を務める。1892 年, Chaplain Sevenoaks 救貧区連合 (Union)。

75 Stevens Alfred James

数学, 近代語のメダルをもらう。ケンブリッジ大学 St. John's

College の奨学生 (scholar, exhibitioner, fellow: 名誉校友)。1867 年, 第 4 番 wrangler (数学の優等卒業試験一級合格者) になる。1870 年に聖職授任 (ordain)。

1854 年 1 月入学生

172 Stevens Walter John

1875 年ニュージーランドへの航海中に死去。

1856 年 4 期入学

356 Stevens Clifford Arthur

1871 年ロンドン大学入試合格。NZ のオークランド教育委員会管轄教師。その後, N.S.W (New South Wales) の教育委員会管轄教師。1895 年に NZ に戻る。数学の教師になる。

357 Stevens Herbert Augustus

特に記述なし

1860 年 3 期入学生

667 Stevens Horace William Pettit

数学とフランス語の金メダル獲得。ケンブリッジ大学 Downing College の奨学生。

1896 年, 3 等法学修士奨学生, 卒業試験優秀成績取得者 (Tripos), 1896 年法学修士。1901 年法学博士。聖職授任 (ordain), 1878-82 年, South Mimms 教区, 1882-8 年, Monken Hadley 教区で curate⁽²⁾。

East Hadley で rector, 1888 年 Tadlow 教区 vicar。ケンブリッジ大学試験官。

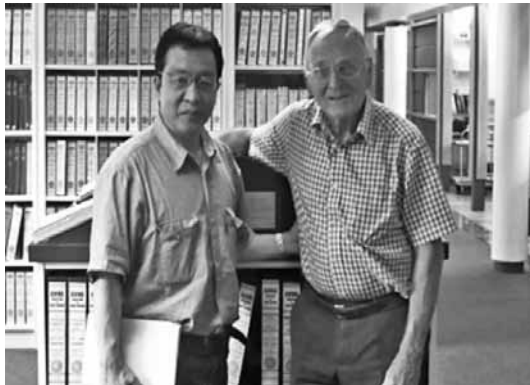
住所 Tadlow, Vicarage, Royston, Herts.

1863 年 4 期入学

848 Stevens Percy Edward

NZ で学校 (Hamilton East, Waikato) の教師になる。

資料 3 Pivert (右) 氏と筆者 (2014 年 8 月 13 日 Jersey Archive にて)



資料 4 Herbert の兄弟姉妹について (抄訳)

1. Thomas

Shamrock Terrace, David Place (筆者注: Jersey 島 St. Helier⁽³⁾ 教区内) 生まれ。1840 年 11 月 8 日に受洗。Cambridge 大学 23 番目の wrangler (数学の第一級優等 23 番目, 3 年で終了)。Sevenoaks で, Kent 州 Dover 出身の Edith Beaumont と結婚, 子どもはいない。

1924 年死去。

2. Alfred

1842 年 3 月 2 日受洗。1871 年に priest になる。Reading のグラマースクールで 1 年間副校長。Felsted（筆者注：エセックス州）の古くからあるパブリックスクールで働く。1874 年 St. Jones College に特別研究員（Research Fellow）として戻る。生涯そこに在籍。1930 年 10 月 23 日死去。

3. Walter John

1843 年 4 月 8 日生まれ。1854 年に Victoria College に入学するも他の兄弟たちと違い実務的性格で、1860 年退学。St. Helier で船員になる。上海で船員として働く。1875 年、32 歳で NZ への航海中に死去。

4. Ernest Wilford

1844 年 8 月 18 日生まれ。1847 年 4 月 4 日、百日咳で死去、3 歳。

5. Evelina Mary

長女、1845 年 8 月 24 日生まれ。1847 年 3 月 23 日水頭症により死去。

6. Herbert Augustus

1847 年 3 月 27 日生まれ。1860 年代に日本に渡ったに違いないが記録は見つけられていない。

7. Clifford Arthur

1848 年生まれ。ロンドン大学に合格。NZ に移住。教職を得る。その後オーストラリアで教える。Jersey 島に戻り 1885 年再度 NZ に戻る。Auckland 近くの Devonport の学校で数学の教員になる。同じ年に Barbara Ashton と結婚。Barbara は、1859 年イギリスから移住した George Ashton の娘であると思う。Barbara は 1912 年 4 月 17 日に死去。Clifford は、1917 年 11 月 14 日に死去。二人とも Devonport に埋葬。Francis Alfred という息子がいたようで、NZ 政府の税調査官で 1921 年、Marie le Cerf Aubin と結婚した。1945 年、Francis

は、叔母 Florence の遺産相続人となる（Sevens 家唯一の生存者か）。明らかに遠距離という理由で相続できなかった。Francis は 1964 年に死去、Purewa に埋葬。

8. Helena Sophia

1850 年 4 月 16 日生まれ。St. Mark 女学校で教師。1899 年死去、未婚。

9. Horace William Pettit

1851 年 8 月 25 日生まれ。ケンブリッジ大学 Downing College の奨学生。1875 年学士，1878 年文学修士，1896 年法学修士，1902 年法学博士。1876-1887 年，Chipping Barnet グラマースクールの副校長。1878 年にロンドンで deacon，1880 年に priest，South Mimms 教区，1882-8 年，Monken Hadley 教区で curate など。1940 年 3 月 10 日，West Cambridge, Tadlow, Vicarage で死去。未婚。

10. Algernon Kingston

1853 年 2 月 3 日生まれ。1863 年 10 月 29 日自宅で死去。心臓疾患。

11. Percy Edward

1854 年 6 月 10 日，Shamrock Terrace, David Place 生まれ。1876 年 NZ に移住，Hamilton で教師になり，Lydia Le Sueur (St. Helier の石炭商 Francis Le Sueur の娘) と結婚。彼女も移住，Jersey 島の時からお互いに知り合いであったと推測される。一人娘，Ada Marion がいた。Ada のニックネームは Minna で未婚。墓石にはフリーメイソンの印があり組織との密接な関係を物語る。Herbert が神戸支部設立に貢献。

12. Clara Adeline

1855 年 11 月 3 日生まれ。痙攣発作のため 1856 年 1 月 30 日死去。

13. Florence Edith

1856 年 12 月 28 日生まれ。Jersey 島の St. Paul 校の教員，St. Marks

女学校校長。1943 年 11 月 23 日死去。未婚。

14. Ada Marian

1858 年 5 月 26 日生まれ。教師，Jersey 島の St. Savior's Road 寄宿学校校長。未婚。母の死後，2 人の姉妹教師と Havre de Pas で一緒に生活。1920 年 1 月 21 日死去。

〈資 料〉

フアン・デル・エンシーナの
戯曲における文法的特徴の考察
(『我らが贖い主の受難と死の上演』(1496))
(下)

廣 澤 明 彦

要 旨

本稿はスペイン演劇の創始者とも呼ばれるフアン・デル・エンシーナが1496年に発表した戯曲の1つを取り上げ、文法的注釈と語釈を加え、試訳を付した資料である。スペイン演劇やスペイン語史の研究者にとっての資料、大学専門課程の学生が古典スペイン語に触れる際の適切なテキストともなるべく、目指した。

キーワード：フアン・デル・エンシーナ、中世スペイン語文法、韻文

0. はじめに

本稿は廣澤（2014）（＝EG3A）の続きである。

1. 注 釈

[承前]

Verónica En verdad, 187
demostraros sin tardança
lavor de su magestad. 189

187) en verdad: 「ほんとに」(TSW)。188) demostraros: 不定詞だけで定形を伴わないが, voy a や quiero, あるいは puedoなどを前に補ってとらえる。EG3A, v.184 で muéstranos 「私たちにを見せてください」とあり, この文はそれに答えていることから, v.188 の os は 2 人称複数の相手を指す間接目的格と判断する。「君たちに示してやる (つもりだ)」。188) sin tardança: →sin tardanza 「早速」(TSW)。189) lavor de su magestad: →labor de su majestad, v.188 の demostraros の直接目的語。su majestad は「陛下」の意味であるが, ここはキリストのことを指しているので, su divina majestad 「(キリスト教の) 神」(DEM) と補ってとらえる。したがって labor は「仕事, 労働」の意味であるが, ここは語源のラテン語の labor (-ōris) にある「苦難, 苦痛」の意味ととる。

訳 (v.187-v.189)

ベロニカ 間違いなく,
神の苦しみを
直ちにあなた方にお示ししましょう。

Veis aquí donde veréis 190
su figura figurada,
del original sacada
porque crédito me deis.
Si queréis,
su pasión apasionada 195
aquí la contemplaréis. 196

190) veis aquí donde veréis: veis も veréis も 2 人称複数形で, 複数の

主語。veis aquí「君たちがここで目にしている」。aquíは隠者の父子とベロニカの3人のいる聖墳墓のこと。このaquíを先行詞とする関係副詞がdondeであり、導入する節の核となる動詞がveréis「君たちは見るであろう」,「(聖布を)見るであろう場所を君たちは見ている」,つまり「居る」の意味で解釈できる。191) su figura figurada: figura「顔,容貌(=cara)」(TSW)。figurada(<figurar「描く」)の過去分詞,聖布の顔のこと。「彼の描かれた顔」。この表現はv.195のpassión apasionadaとともに,フアン・デル・エンシーナが「畳語法(redoblado)」と名付けた詩作の技法。vid. PPCA(p.124), DRCR(p.295)。192) del original sacada:→sacada del original「本人から写した」。sacada(<sacarの過去分詞)はv.191のfiguradaと同様にfiguraと一致。original「現物,本人,正本」(TSW)。193) porque crédito me deis: crédito「信用」はdeis(<darの接続法現在)に先行する直接目的語。dar crédito「信用を置く(=creer),信用をつける(=acreditar)(…)」(TSW)。porqueは理由の節を導入する接続詞であるが,接続法の動詞が節の核となっているため,その場合,para queと同義ととり目的の意味に解釈する。「君たちが私を信用するように」。ただしその主節がveréis「あなた方は見るだろう」なので,意味的なバランスを考慮して条件的な節と解釈する。即ち si me dais crédito「もし君たちが私を信用すれば」と同義ととる。195) su pasión apasionada:→su pasión apasionada。v.196のcontemplantéisの直接目的語。この箇所もv.191で触れた畳語法が用いられている。apasionadaはapasionar「苦しめる,悩ます(=atormentar)」(TSW)の過去分詞とする。196) la contemplantéis: contemplantéis(<contemplant「じっと見る」)の直接目的語は,v.195のsu pasión apasionadaで,他動詞に先行した位置にあることから,laはそれを受ける直接目的格代名詞。

訳 (v.190-v.196)

あなた方が見ているこの場所で

もし私を信じてくれるなら
あのお方から写した、
ご尊顔を拝することができるでしょう。
もしお望みであれば、
あのお方が受けられたご難を
ここで見ることができるでしょう。

Padre	¡O, muy bendita muger,	197
	por tú ser tan piadosa	
	eres tú la más dichosa	
	de quantas pudieran ser:	200
	por tener	
	figura tan gloriosa	
	imprimida en tu poder.	203

197) ¡o (...)! : vid. EG3A, v.106. 197) muger: →mujer 「女」。尚、この行は全体が呼びかけ。198) por tú ser tan piadosa: 不定詞 ser が意味上の主語を伴っている。por は理由。定形を用いた節だと como tú eres tan piadosa 「君はそれほど信心深いので」に相当する。199-200) eres tú la más dichosa de: dichosa (<dichoso 「幸福な」) の最上級、de 以下が範囲。「君は de 以下の範囲の中で最も幸福である」。200) quantas pudieran ser: quantas→cuantas<cuanto, 関係形容詞ととり、後続する複数の女性名詞 mugeres は省略されているととる。pudieran は poder の接続法過去形だが、-ra 型であるので、直説法の過去(完了)に相当するものととる。ser の補語 piadosas も省略されたものとし、そしてそれを代名詞に置き換え語を補うと、cuantas mujeres pudieran serlo 「そのようであることができた者たち全て(の中で)」。201) por tener: この por は説明的な para の意味にとる。「そして持つために」。202) figura tan gloriosa:

「神々しい顔」。この行全体が v.201 の tener の直接目的語ととる。203) imprimida: vid. EG3A, v.169. v.202 を直接目的語とした場合、この imprimida が目的格補語となる。203) en tu poder: poder について「m. (...) 手にはいつていること、手もと、手中」（TSW）。ここは v.201 の tener と組み合わせさせて、「（直接目的語を）手中におさめる」の意味とする。

訳（v.187-v.203）

父親 おお、大きな祝福を受けたお方よ
 あなたがあまりに信心深いからこそ
 そうであった者たちの中で
 最も幸福なのです。
 それは即ち
 これほど神々しいご尊顔を
 写してあなたの手元に残すためなのです。

Hijo	A quien Cristo dio tal don	204
	gran privança le demuestra.	205
	Sirvámosle, hermana nuestra,	
	pues es nuestra redención.	
Padre	Con razón,	
	que bien parece en la muestra	
	la labor de su pasión.	210

204) a quien Cristo dio tal don: 「そのような恵みをキリストが与えた者に」。この関係節を v.205 の le が受ける。205) gran privança le demuestra: → *Cristo* le demuestra gran privança。demuestra < demostrar 「証明する」「明らかにする」の主語としてキリストを補う。間接目的格の le は、v.204 の a quien 以下を指す。privança→privanza

「寵愛」, *demuestra* の直接目的語。「(キリストは) その人に大きな寵愛を示している」。206) *sirvámosle: servir* 「仕える」の接続法現在 1 人称複数を用いた命令, 意味は勧誘。間接目的格の *le* はキリストを受ける。「彼に仕えよう」。206) *hermana nuestra*: 目前のペロニカに対しての呼びかけとして用いられている。「我らが姉妹よ」。207), *pues es nuestra redención: pues* は説明的に理由の節を導入する。*v.206* で「彼に仕えましょう」と誘ったことの理由。*es* の主語はキリストで, *redención* 「救済, 贖罪」は *redentor* 「救世主」の意味にとる。208) *con razón*: 「十分な理由をもって」(TSW)。209), *que*: 理由の節を導入する接続詞ととる。209) *parece*: <*parecer* 「現れる」。主語は *v.210* の *labor*。209) *muestra*: 名詞で「証拠, あかし」。ペロニカの持つ聖布のこと。210) *la labor de su pasión*: →*la labor de su pasión*。 *labor* については *v.189* を参照。

訳 (v.204-v.210)

息子	キリストがそのようなお恵みをお与えなさった からには その人には大きな寵愛を示されているのだ。 さあ, シスター, 彼にお仕えしましょう, 彼は我らが贖い主でありますから。
父親	そのとおり, といますのも, その証に現れておりますのは, 彼の受難の苦しみですから。

Verónica	En su pasión tan mortal	211
	podéis ver muy bien, hermanos,	
	si fueron los miembros sanos	
	yendo la cabeça tal.	
Padre	Nuestro mal	215

traxo su cuerpo a las manos

de aquella gente infernal.

217

211) pasión: →pasión。211) mortal: 「致命的な」という意味に加えて、「(死ぬほど) ひどい」という意味もある。212) podéis ver: この ver は「見る」という意味とも、「理解する」の意味ともとれる。213) si fueron los miembros sanos: 分かりやすい語順にすると、si los miembros fueron sanos となろう。v.212 の podéis ver を核とする主節に対して、この接続詞 si 「～かどうか」は、間接疑問の節を導入している。miembros はここでは「四肢」の意味ととる。「彼の四肢が無事であったかどうか（君たちは理解することができる）」。sano 「無事な」、vid. EG3A, v.109。214) yendo la cabeça tal: yendo は ir の現在分詞であるが、基本的な「行く」という意味に加えて、「(健康, 経営状態などが (…)) ～である」(DEM) という意味で用いられることがある。意味上の主語は la cabeça (→cabeza) 「頭」、即ちここでは聖布に残されたキリストの顔のこと。現在分詞 yendo は理由の分詞構文的にとらえる。「そのようなお顔の様子であれば」。215) nuestro mal: v.182 では「我らの災い」としたが、ここの mal は「善」と対立する「^{あく}悪」の意味にとる。vid. EG2, v.34。216) traxo: →trajo < traer 「持ってくる」の3人称単数点過去。主語は v.215 の nuestro mal。216) su cuerpo: 「彼の肉体」つまりイエスのこと。217) infernal: 「地獄の、極悪な (…)」(TSW)。v.215-v.217 は、人類の悪の贖いのためにイエスがユダヤ人たちに引き渡され、難に遭ったということを示している。

訳 (v.211-v.217)

ペロニカ あれ程ひどい受難において、
 彼の四肢が無事であったか否か、
 このようなご尊顔の様であれば、兄弟たちよ、
 充分に分かろうもの。

todos desamparado: desamparado < desamparar 「見捨てる」の過去分詞で、v.223 の murió の主語 el pastor と一致する主格補語。de は v.223 の grey とはつながらず、起点の意味で desamparado にかかる。即ち、desamparado de todos 「みんなから見捨てられて」。

訳（v.218-v.224）

息子 邪悪で無法の
 ユダヤの民め、
 敬われ
 崇められなければならぬ
 自分たちの王を殺してしまうとは！
ペロニカ 皆に見捨てられ
 その牧者は自分の群れの代わりに亡くなりました。

Si discípulos tenía,	225
ninguno dellos quedó	
que no le desamparó,	
salvo la virgen María,	
que sentía	
quanta pasión él sintió	230
como a quién más le dolía.	231

225) si discípulos tenía: → si tenía discípulos。この接続詞 si の用法は条件とも間接疑問とも異なる。「(事実の提示, 対立) ～ではあるが」(DEM), 「(断定に対する期待はずれ) ～したのに, したくせに」(TSW)。tenía の主語はイエス。「弟子を持っていたのに」。226) ninguno dellos quedó: dellos → de ellos. ellos 「彼ら」は v.225 の discípulos を指す。「彼らのうちの誰も残らなかった」。227) que no le desamparó: ここの que は v.226 の ninguno を先行詞とする関係代名詞で、限定的な関係節を導入するも

のととる。le はレイスモで「彼を」, 即ちイエスを指す。v.226-v.227 の直訳は「彼らのうちイエスを見捨てなかった者は誰も残らなかった」。つまり, 皆見捨てた。228) salvo: 「～を除いて」。228) virgen: 「聖女 (称号)。la V- [→la Virgen] 聖母マリヤ」(TSW)。229), que: 説明的な関係節を導入する関係代名詞, 先行詞は v.228 の la virgen María。229) sentía: <sentir 「感じる」の直説法線過去。直接目的語に相当するのは v.230 の quanta 以下の節。230) quanta pasión él sintió: →cuanta pasión él sintió。v.200 の場合と同様に, この quanta も関係形容詞とする。「～するところの, すべての」。v.229-v.230 は「そして彼女は彼が感じた全ての受難を感じていた」。231) como a quien más le dolía: como は様態の意味ととり, 導入する節は v.229 の sentía にかかるものとする。a quien と le は同格。quien は独立用法ともとれそうであるが, v.228 の la virgen María を先行詞とする。quien はここでは la que に置き換えられることから, 後続する要素は比較級ではなく最上級としてとらえる。dolía < doler 「痛む」の主語は pasión とする。直訳すると「最も受難の痛みが及んだ者のように」。

訳 (v.225-v.231)

確かに弟子はいたものの
彼らのうちでイエス様を
見捨てなかった者はいなかったのです。
ただし聖母マリア様は別で,
彼女は
最も痛みを受けていた者のように
イエス様の感じた受難の全てを感じていたのです。

No sé quién pueda contar
el tormento y dolor suyo:

232

no ay dolor que iguale al tuyo,
 jo madre, Virgen sin par, 235
 singular!
 Ver quién es el hijo y cuyo,
 mucho deve lastimar. 238

232) no sé quién pueda contar: 主節に相当する no séに quién 以下の疑問文が節として結び付いた間接疑問文であるが、通常単文での疑問文には直説法が用いられることから、間接疑問の節でも、ここでは接続法現在の pueda が用いられてはいるが、通常直説法の動詞、つまりここでは puede がそのまま用いられるのが期待される。「[間接疑問の節は] 従属節にもっぱら直説法を伴うが、不定詞あるいは接続法で熟考 [の意味] が形成される」(Borrego et al., 1986, p. 112), 「間接疑問 [の節] は通常直説法あるいは接続法を許容するが、常に区別がないわけではない。No sé sabe quién ha/haya dado la noticia. (「誰がそのニュースを伝えたか知られてない」) は、[直説法の ha でも接続法の haya でも] 同じことを意味するが、直説法を用いるとニュースを伝えた事実が述べられ、接続法を用いると、何か疑いを持って伝えられる」(Bello, 1847, § 1155.) とあることから、中世のスペイン語に特徴的な用法とも言えなさそうである。間接疑問の節で接続法が用いられるときに伴うとされる熟考や疑いの意味は、日本語訳にうまく反映させるのは難しいが、v.232 は「誰が語ることが出来ようか、私は知らない」となり、¿quién podrá contar?, no sé. と同義であるとする。尚、間接疑問の節の法について、Real Academia Española (2009, § 43.7.) に詳しい。233) el tormento y dolor suyo: この行全体が v.232 の contar 「語る」の直接目的の役割を担う。tormento 「拷問、苦しみ」と dolor 「痛み」の両方に suyo 「彼の」、つまり「イエスの」がかかる。234) ay: → hay. 234) que iguale al tuyo: que は関係代名詞で先行詞は同じ行の dolor, 主格。iguale < igualar, ここでは自動詞と

して用いられ、「(+a と) 等しい, 同等である」の意味。接続法現在であるのは, 先行詞が不特定であるため。前置詞 a を伴う所有代名詞 al tuyo は dolor を指している。「君の (痛み) に匹敵するような痛みはない」。

v.233 の suyo と異なり, 2 人称単数の tuyo が用いられるが, v.235 から判断すると聖母マリアへ呼びかけているととれる。235) ¡o madre (...)! : o→oh. madre は文字通り「母親」の意味で用いられている。「ああ母よ」。

以下 v.236 まで呼びかけ。237-238) 間接疑問の節を伴う v.237 の不定詞 ver を主語の核とし, v.238 の debe lastimar を述部とする文ととらえる。

237) ver quién es el hijo: quién 以下が間接疑問の節。「その息子が誰であるかを見ること (は)」。

237) cuyo: 「先行詞が欠如し, そして ser の述部としての関係詞の擬古的用法」(PPCA, p. 125)。ただし本稿ではこの cuyo に関して, quién で導入される間接疑問の節と同列の節を導入する「(疑問所有詞) (古 [語, 古義] 誰の)」(TSW) の意味ととらえる。したがってその場合, アクセント記号を伴った cúyo が用いられる。節に語を補うと cúyo *hijo es (él)* となり, 現代スペイン語で書き換えると de quién es el hijo となろう。「彼が誰の息子か (見ることは)」。

238) mucho debe lastimar: →debe lastimar mucho. deber+不定詞はここでは義務の意味ではなく推定の意味にとる。即ち deber+(de+)不定詞。主語は v.237 全体の ver を核とする句。lastimar は「傷つける」と「同情する」の意味があり, いずれも他動詞として用いられているが直接目的語が欠如している。主語から判断して前者の意味ととる。mucho は副詞として用いられているととる。「(～を) 見ることはとても傷つけることである」。

訳 (v.232-v.238)

彼の苦しみと痛みを

語ることができる者などいるのだろうか, 私は分からない。

あなたと同じ痛みなどありませんよ,

ああ母よ, たぐい稀で奇特な

聖母よ！

その息子が誰で、そして誰の子であるか見ることは
この上なく傷つけることに違いありませんまい。

¡O, qué dolor de sentir	239
sentimiento dolorido!	240
Madre que tal ha perdido	
es dolor verla bivar,	
qu'es morir.	
Y la muerte le es partido	
pues es menos de sufrir.	245

239-240) この箇所も v.191 及び v.195 と同様に、畳語法が用いられていると解釈できる。239) ¡o (...)! : →¡oh!。239) ¡(...) qué dolor (...)! : dolor は精神的な痛みも意味することができる。quéを用いた感嘆文の核をなす。「何という辛さ」。239-240) sentir sentimiento dolorido: dolorido も肉体的、精神的、いずれの痛みを表すことができるが、前者の痛みととる。「(肉体的) 苦痛の感情を感じることに」。241) madre que tal ha perdido: que は関係代名詞で先行詞は madre, ha perdido に対して主格のはたらきを担う。tal は副詞ととる。「adv. そんなふうに、そのように (= así)」(TSW)。この句全体を v.242 の verla の la が受ける。「そのように失った母 (を)」。242) es dolor verla bivar: es (<ser) の主語は、一見すると v.241 の madre を核とする名詞句のようでもあるが、不定詞の ver を主語として es dolor が名詞述部となる、一般的価値判断の構文ととる。更に ver は知覚構文を成し、知覚の対象で人の目的語である (verla の) la は、先行する v.241 全体を受けるものととる。その動作は v.242 の bivar (→vivir) とする。「彼女が生きているのを見ることは辛い」。243), qu'es morir: →, que es morir。que は理由の節を導入する接続詞ととる。es の

主語には前文の内容を受ける中性代名詞 *esto* を補ってとらえる。したがって、*que esto es morir*, 「なぜならこのことは死ぬことだからです」。244) *y*: 「(文頭で) で、そこで、ところで」(TSW)。ここでは反意的なニュアンスを伴うととる。「しかし」。cf. EG3A, v.12. 244) *la muerte le es partido*: 一見すると *es partido* が受動態、あるいは中世の自動詞及び再帰動詞の現在完了、即ちここでは *ser* と自動詞の意味の *partir* 「出発する」の過去分詞の組み合わせによる複合時制ととれそうである。ただしその場合に想定される主語である *la muerte* と過去分詞の間の性数一致が必須であるにも関わらず、それが欠けていることから、この *partido* は「味方」(TSW) の意味の名詞ととる。*le* は間接目的格で、聖母を指すととる。「死は彼女にとって味方である」。245) *pues*: 原因、理由の節を導入する接続詞であるが、DRCR 版にあるようにコンマを補い、*pues* とし、説明的な節を導入、主節に相当する v.244 の内容についての理由を述べるものとする。「というの」。245) *es menos de sufrir*: → *es de sufrir menos*. *ser de* + 不定詞について。「～すべきである」(TSW), 「+ 他動詞, ～されるべきである」(DEM), 「*ser a/de* + 不定詞, (～すべきである) では不定詞は受身の意味を帯びた」(IEM, p. 157)。ここで用いられている不定詞の *sufrir* は他動詞ととる。*es* の主語は聖母。*menos* は副詞で「より少なく」。したがって v.245 は「というの彼女はより少なく苦しめられるべきだからである」。v.244 の理由を述べた箇所であるが、死んだ方がマシな程の辛さ、の意味。

訳 (v.239–v.245)

ああ、痛がっていることを
感じることの何たる辛さか！
そのように失った母親が生きるのを
見ることは辛いものです。
何故ならそれは死んでも同然だからです。

しかし死は彼女に味方する。

なんとになれば彼女の苦しみが和らげられるだろうからです。

¡O, ánima traspasada 246
con cuchillo de dolor!
¡Ver morir al Redentor,
ay de ti, madre cuitada,
lastimada 250
Fue tu lástima mayor
que a muger nunca fue dada. 252

246) traspasada: →traspasada <traspasar 「貫く」の過去分詞。ánima traspasada は「貫かれた魂」。247) con cuchillo de dolor: con は手段の用法ととる。「痛みの（単数の）ナイフでもって」。v.246-v.247 について、DRCR は「[複数の] 短剣が刺さった聖母の心臓の図像は、聖母マリアの文献、及び図像学において多く広まっている絵柄である」（p. 30）としている。248) ¡ver morir al Redentor (...) (!): ver 「見る」を用いた知覚構文。知覚の対象で人の目的語は al Redentor, その動作は morir, 加えて不定詞の ver は命令、感嘆の意味で用いられている。vid. EG3A, v.97。「贖い主が亡くなるのを見てしまうとは！」。249) ay de ti: この ay は嘆きをあらわす間投詞である（hay ではない）。de 以下に対する同情を表現する。「ああ、可哀そうな君よ」。2人称単数の ti は聖母に対する呼びかけで、v.246, v.247 での描写といい、舞台上にマリア像でもあるかのようなのである。vid. EG3A, v.176-v.182。249) cuitada: 悲嘆にくれた、不運な」。vid. EG3A, v.5。250) lastimada: 「気の毒な」。vid. EG3A, v.41。251) fue tu lástima mayor: →tu lástima fue mayor. 比較級の文で、v.252 の que 以下が比較の対象。lástima 「憐れみ、気の毒なこと、嘆き、残念」（TSW）。「君の気の毒さは（que 以下よりも）より大きかった」。

252) 比較の対象に否定語を用いて最上級を表現しているが、ここでは que 以下に完全な節が用いられている。語を補い並べかえると、que nunca *la lástima* fue dada a *una* muger (→mujer) と想定できる。a muger 「女に」は間接目的語で、受動態 fue dada (<dar 「与える」)への関与の用法ととる。即ち「(ある一人の)女に与えられた(気の毒さ)」。v.251-v.252 は、「君の気の毒さは女性がかつて受けたことがないほど大きかった」となろう。

訳 (v.246-v.252)

あぁ、痛みの剣で
貫かれた魂よ！
贖い主が亡くなるのを見てしまうとは、
あなたは何て可哀そうで、気の毒で、
不運な母親なの！
あなたの不幸は
女がかつて受けたこともないほど大きかったのです。

	¡O, madre que tal pariste,	253
	tu sentimiento lloremos,	
	pues con tanta razón vemos	255
	el gran dolor que sentiste	
	y sufriste!	
Padre	En el hijo contemplemos,	
	dexa ya la madre triste.	259

253) ¡o, madre que tal pariste,; DRRCR では pariste の後のコンマ (,) の代わりに感嘆符 (!) が用いられ、この行が1つの感嘆文となっている。文字通りの意味は、「あぁ、そのように産んだ母よ！」。que は関係代名詞で先行詞は madre 「母親」、主格。tal は副詞で「そのように」。v.241 で

もこの tal の用法について言及したが, EG2, v.58 で tal paría を「そのように産んだ」とした。そこでは処女懐胎に伴う出産のことを示唆しており, ここもこれに従う。pariste < parir 「産む」, cf. EG2, v.13. 254) tu sentimiento lloremos: sentimiento 「悲しみ」 (TSW)。lloremos < llorar, 先行する tu sentimiento を直接目的語とする他動詞ととる。即ち「[～を] 泣く, 嘆く, 悲しむ」 (TSW)。現代スペイン語では接続法現在 1 人称複数 は勧誘の意味を伴う命令の用法であるが, 接続法が表わす 1, 3 人称への願望や祈願などと関連している。cf. IEM, p. 136. tu が指すのはその場にいない呼びかけの対象としての聖母で, lloremos の主語であるペロニカ, 父, 息子には当然含まれない。255), pues: 理由の節を導入する接続詞。コンマを伴うことから後続する節は説明的で, 主節は v.254。「何故なら」。255) con tanta razón 「正当に, 当然」 (DEM), 「十分な理由をもって」 (TSW)。255) vemos: < ver 「分かる」。256) que: 関係代名詞で先行詞は el gran dolor 「大きな痛み」, 直接目的格。256) sentiste: < sentir 「感じる」, 「悲しむ」 (TSW) の直説法点過去 2 人称単数, この箇所もその場にいない聖母が主語で, 呼びかけている。257) sufriste: < sufrir, 他動詞で「受ける」, 主語は sentiste と同様に 2 人称単数。258) en el hijo contemplemos: → contemplemos en el hijo。contemplemos < contemplar の接続法現在 1 人称複数, 勧誘の意味の命令の用法。「(en を従えて, ～を) 深思する, 黙想する, 渴仰する」 (TSW), cf. 前書き 4 番目の文。el hijo は「(その) 息子」であるが, DRCCR 版では大文字で始まる el Hijo と表記されているように, ここでは聖母の息子, 即ちイエス・キリストのこと。259) dexa ya la madre triste: dexa (→ deja < dejar), 2 人称単数の肯定命令ととるか, 直説法現在の 3 人称単数ととるかで 2 つの解釈を試みた。先ず, 前者の解釈の場合, 2 人称単数の肯定命令はペロニカに向けたものとなる。la madre が人の直接目的語, 形容詞 triste 「悲しい」が目的格補語となり, 「(直接目的語) を, (目的格補語の状態)

にさせておく」の意味になる。語を補い現代スペイン語の語順に書き換えると、*deja (tú) ya a la madre triste*「その母親をもう悲しませておけ」。*dexa* を直説法現在と解する場合、語を補い現代スペイン語の語順にした、*la madre deja (de) ser triste ya*「その母親はもう悲しむのをやめる」という意味となり、v.258 との意味のつながりも自然なものとなる。

訳 (v.253-v.259)

ああ、乙女のまま産んだ母よ！
あなたの悲しみに我々は涙します。
と申しますのもあなたが味わい、受けた
大きな痛みを
我々は充分わかっているからです。
父親 子であるイエス・キリストに思いを馳せることに
しましょう、
そうすれば聖母はもう悲しまない。

Hijo	Contemplemos la umilidad	260
	de aqueste manso cordero,	
	hijo de Dios verdadero,	
	camino, vida y verdad,	
	y bondad,	
	con el padre por entero,	265
	una mesma voluntad.	266

260) *contemplemos*: <*contemplan*>, ここでは他動詞として用いられている。cf. v.258。「～をじっと見ましょう」。260) *umilidad*: →*humilidad* 「謙虚」。*contemplemos* の直接目的語。261) *de aqueste manso cordero*: *aqueste*→*este*, vid. EG2, v.121。「このおとなしい子羊の」, イエス・キ

リストのこと。262) hijo de Dios verdadero: v.261 の manos cordero の言い換え。verdadero は hijo にかかる。即ち, verdadero hijo de Dios。DRCR ではここでも大文字で始まる Hijo で表記しているように, イエス・キリストに言及している。「本物の神の子」。263) camino, vida y verdad: EG2, v.69 では, 多少語順が異なるが, vida, verdad y camino として現れている。『ヨハネによる福音書』（14:6）のイエスの言葉, 「私は道であり, 真実であり命である」（KDY, p.196）の引用。264) bondad: 「善良さ」。ここまでが v.261 の manso cordero の言い換えととる。265) con el padre por entero: DRCR では大文字で始まる Padre と表記されているように, ここは一般的な「父親」の意味ではなく「神」の意味。por entero 「完全に」。この行の文字通りの意味は「完全に神とともに」。266) una misma voluntad: mesma→misma。voluntad 「神意」（TSW）。この行は「一つの神意」の意味。尚 v.265-v.266 はいずれもイエス・キリストを言い換えた内容ととれ, 全体が v.260 の contemplemos の直接目的語ともとれる。その場合核となるのは前置詞を伴わない v.266 であろう。「父なる神と全く同じ意志をじっと見ましょう」。しかし本稿は v.260 の contemplemos の直接目的語は v.264 までととり, v.265-v.266 は, 定形動詞を伴っていないが, イエス・キリストと父なる神について言及した箇所ととる。即ち, DRCR ではそうであったように, v.264 はコンマ（,）の代わりにピリオド（.）を用い, いったん文を終え, 以下はそれぞれ *Jesucristo está con el padre por entero*, 及び *Jesucristo tiene una misma voluntad que el Padre* と補ってとらえる。

訳（v.260-v.266）

息子 道であり, 命であり, 真実であり,
 そして善良さであり,
 本物の神の息子である
 このおとなしい子羊の

謙虚さをじっくり見ようではないか。
彼は父なる神と完全に一緒に、
同じ神意をお持ちなのだ。

Padre y hijo en un querer, 267
un mesmo consentimiento:
que el paterno mandamiento
es al hijo obedecer, 270
sin más ver.

Verónica ¡O, dichoso monumento,
que lo alcançaste a tener! 273

267-268) ここも v.260 の *contemplemos* の直説目的語相当ととれそうであるが、v.265-266 と同様に、定形動詞を伴わずにイエス・キリストと神について述べている箇所とする。267) *y*: 現代スペイン語では、この位置では *e* と表記される。267) *querer*: 男性名詞単数、「愛、愛情、意志 (= *voluntad*)」(TSW)。v.257 は「父なる神と神の子は1つの神意(である)」となる。268) *consentimiento*: 現代スペイン語では「是認、同意」といった意味であるが、対応する動詞 *consentir* の語源であるラテン語の *consentire* は文字通り「一緒に感じる」の意味。転じて「調和(一致)する」(LLJ)。したがってここでの *consentimiento* も「同じ考え、調和」という意味で用いられて得ると想定出来る。v.268 も v.266 と同様に、*Jesucristo tiene un mesmo consentimiento que el Padre* 「(イエス・キリストは神と) 同じ意志(を持つ)」と補ってとらえることにする。269) *que*: v.268 の *mesmo* にかかり、比較の対象を導入するものとはとらず、意味のない、あるいは軽い理由の意味の接続詞とする。底本とした PPCA ではこの *que* の前の行、v.268 がコロン(:)で終わっていることから、「即ち」の意味とする。269) *paterno*: ここも一般的な父親ではなく「父

なる神の」の意味。270) es al hijo obedecer: → es obedecer al hijo
 「(～は) 神の子に従うことである」。271) sin más ver: → sin ver más,
 文字通りの意味は「これ以上会うことなく」。272) dichoso: 「幸福な」。
 272) monumento: 「聖墳墓」, vid. EG3A, v.60. 273), que lo alcançaste
 a tener: alcançaste → alcanzaste < alcanzar の点過去 2 人称単数, +a+
 不定詞で「～するに至る」, cf. EG3A, v.71. この行を導入する, que はい
 くつかの解釈が想定できる。まず接続詞である場合, 意味のない, あるい
 は軽い理由の節を導入する用法ととれる。「何故なら君はそれを持つこ
 とができたからだ」。この場合 lo は v.272 の monumento を指し, alcan
 çaste の主語は目前の人物, この場合は息子ということになる。ただこの
 場合, 主語が父親も含む 2 人称複数でないことから矛盾が生じる。もう 1
 つの解釈は que を関係代名詞とするもので, 関係節に直接目的格代名詞
 の lo が含まれることから, この que は主格と解釈しなければならない。
 先行詞は v.272 の dichoso monumento。ただしこの場合関係節で 2 人称
 単数の alcançaste が用いられていることから, この聖墳墓 (santo
 sepulcro, cf. EG3A, 前書きの 2 番目の文), 実際には舞台上の祭壇 (cf.
 EG3A, v.176–v.182) を擬人的に扱い, 呼びかけていると解釈しなければ
 ならない。それが可能であれば lo は「彼を」, すなわち「イエスを」の意
 味となろう。cf. v.282。

訳 (v.267–v.273)

父なる神と神の子は 1 つの神意であり

同じ考えである。

それはつまり父なる神の^{めい}命とは

これ以上会うことなく

神の子に従うことなのです。

ベロニカ ああ, 幸いなる聖墳墓よ,

あのお方を納めることが出来たとは!

Padre	Hagamos aquí oración,	274
	las rodillas en el suelo,	275
	las manos puestas al cielo	
	con muy mucha devoción	
	y afición,	
	pues sufrió tal desconsuelo	
	por nuestra consolación	280

274) hagamos aquí oración: hagamos<hacer の接続法現在 1 人称複数, 勧誘の意味の命令の用法。「ここで祈りましょう」。275) las rodillas en el suelo: 文字通りの意味は「地面の上の両ひざ」であるが, 次の v.277 と同じ過去分詞を補い, las rodillas *puestas* en el suelo とし, 「地面に両ひざをついて」とする。276) las manos puestas al cielo: 文字通りの意味は「天に置かれた両手」。尚, cielo は「空, 天」の意味に加えて, 「天国」, 「神」の意味となることがある。277) con muy mucha devoción: con devoción 「敬虔に, 一心不乱に」(DEM)。278) y afición: 省略されている語を補うと, y *con muy mucha* afición となろう。con afición 「熱心に」(DEM)。279) pues sufrió tal desconsuelo: pues は原因, 理由の節を導入する接続詞, ここでは porque に相当する。sufrió<sufrir の点過去 3 人称単数。ここでは他動詞で「(苦しみなどを) 受ける, 悩む, 苦しむ, こうむる, なめる (=padecer)」(TSW)。直接目的語が後続の tal desconsuelo 「そのような苦しみ (を)」。ここまではしばらくイエスについての言及があったが, 悲しんだのは聖母であることから, ここの sufrió の主語は聖母マリアととる。舞台上の祭壇にマリア像があったのかもしれない。280) por nuestra consolación: ここの por は代替「~の代わりに」ともとれそうであるが, 内容から判断すると目的の para と同義ととる方が良さそうである。「私たちの慰めのために」。

訳 (v.274-v.280)

父親 ここで祈りましょう
 地に両膝をつき
 両手を天に向け
 そして熱心に、
 我らの慰めのために
 あのような悲しみを受けられたからには。

el Ángel	¡O, monumento sagrado,	281
	sepulcro más que dichoso!	
	¡O, cuerpo muy glorioso	
	de Cristo crucificado,	
	sepultado,	285
	tesoro más que precioso	
	aunque por poco apreciado!	287

281) monumento: vid. v.272。尚、以下は天使が登場し、聖墳墓に見立てた復活祭の祭壇と、恐らくそこに据えられていたであろうキリスト像に向けた台詞が続く。282) sepulcro más que dichoso: dichoso「幸福な」は sepulcro を修飾。más que について。「～以上に」(TSW)、ただしこれは副詞の más の用法。「(形容詞+más que+形容詞) ～なことこの上ない」(CDE)。キリストを納めることができ幸福な墓であると述べている箇所。cf. v.273。283) cuerpo: vid. v.216。284) crucificado: <crucificar「磔刑にする」の過去分詞。vid. EG3A, v.7。286) tesoro: vid. EG3A, v.177。286) más que: vid. v.282。287) aunque por poco apreciado: por poco は副詞表現で、「わずかのことで、^{ママ}も少しのところで」(TSW) の意味がある。しかしここでは poco は、por によって導入される集合的な意味の動作主をあらわす代名詞ととる。即ち「(代名詞)

わずかなもの、少数の人」(TSW)。語を補い並べかえ、*aunque* が導入する譲歩節を完成させると、*aunque el tesoro es apreciado por poco* 「その宝はわずかな者たちにしか尊重されないけれども」となろう。

訳 (v.281-v.287)

天使 おお、神聖な墓よ、
 この上なく幸いな聖墳墓よ！
 磔にされ
 埋葬されたキリストの、
 あぁ、全く神々しいおん身、
 わずかな者たちにしかありがたく思われなくとも
 この上なく価値のある至宝よ！

Descansa tus miembros tiernos,	288
duerme siquiera y reposa,	
mientras ell alma gloriosa	290
va despojar los infiernos,	
por hazernos	
vezindad muy más gozosa	
en los sus gozos eternos.	294

288) *descansa*: <*descansar*>。後続の名詞句 *tus miembros tiernos* は直接目的語であるので、他動詞「(～を) 休ませる」の意味で用いられているととる。2 人称単数に対する肯定命令、つまりキリスト(像)に対する呼びかけ。v.289 の *duerme* (<*dormir* 「眠る」>), *reposa* (<*reposar* 「休む、やすらう (= *yacer*)」>)(TSW), 「埋葬されている」(DEM) も同様に *tú* に対する肯定命令。288) *tus miembros tiernos*: 所有形容詞 *tus* 「君の」は、天使が呼びかけているキリスト(像)が所有者。*miembros* 「四肢」, *vid.* v.213. *tierno* 「柔らかい」は *flojo* の意味にとる。「力のぬ

けた」。289) siquiera: 副詞で「少なくとも」(DEM), 「せめて」(TSW)。cf. EG3A, v.17。290) mientras: 「時の副詞, 廃用語, mientras [のこと]」(RAE)。DRCR では現代語と同様に mientras と表記。290) ell: →el。「a で始まる名詞の前で定冠詞 [el の子音] の -l が口蓋化して変化したもの」(PPCA, p. 100), cf. EG1, v.49。291) va despojar: 「va a despojar [のこと]。[前置詞の] a は同じ母音で終わる動詞形に組みこまれている」(DRCR, p. 31)。「ir (+a)+ 不定詞 (…)

前置詞 a は 13 世紀から現れ始めるが, 15 世紀になっても固定化しなかった」(IEM, p. 163), cf. EG3A, v.53。va の主語は v.290 の ell alma gloriosa。291) infiernos: 「責め苦, さいなみ, 悩み, 苦悩」(TSW)。292-293) por hazernos vezindad muy más gozosa: hazernos→hacernos。vezindad→vecindad 「隣人」。この 2 行で用いられているのは, hacer+直接目的語+目的格補語, 即ち「(直接目的語)を(目的格補語)にする」の構文で, 直接目的語に相当するのが前接の代名詞の nos 「私たちを」, 目的格補語は vezindad, 「私たちを隣人にする」。これは天使の発言であることから, 天界において昇天後のキリストの隣人となることととる。gozosa は形容詞 gozoso 「喜ばしい」の女性形単数で, vezindad を修飾している。más gozosa のように比較の語を修飾する場合, 現代スペイン語では muy ではなく, 通常 mucho が用いられる。por はここでは para の意味にとり, 不定詞 hazer の意味上の主語は v.290 の ell alma gloriosa, あるいは v.290-v.291 の意味内容となる。後者の場合で, 説明的な目的節に変え, 対応する現代スペイン語は, para que eso nos haga vecindad mucho más gozosa 「このことが我々(天使)をさらに喜ばしい(天界の)住人とするだろう」となろう。

294) en los sus gozos eternos: gozo には「喜び」の意味以外に, 複数形で「(聖母や聖者の)賛歌」(TSW)の意味があるが, 文脈から判断すると, ここは前者の意味でとるべきであろう。そのばあい sus は v.293 の vezindad をその所有者ととる。即ち「そこ(天界の住人たちの)永遠の

喜びにおいて」。

訳 (v.288-v.294)

あなたの力の抜けた手足を休められよ、
せめて眠り、横たわれよ。
その間に至福を受けた魂が
それらの責め苦を取り除くだろう。
そしてそのことは
永遠につづく喜びの中で
我らを更に喜びにあふれた住人とするだろう。

Por los justos decendió	295
a sacarlos del profundo,	
y para salvar el mundo	
el criador padeció,	
y pagó	
Cristo, nuestro Adán segundo,	300
lo que el primero pecó.	301

295-298) これらの行を1つの文とすると、述部を形成する定形動詞は v.295 の decendió と v.298 の padeció であり、両者の主語は v.298 の el criador 「神」という構造となっている。295) por los justos: por は para 「～のために」の意味にとる。形容詞 justo 「正当な」はここでは定冠詞を伴い、名詞として用いられている。「12-15 世紀 [の用法]、神の教えに従って生きること、名詞としても用いられる」(MED), 「(カトリック) 篤信家」(DEM)。295-296) decendió a sacarlos: decendió < decender 「descender (「下がる、降りる」) の古形」(RAE), cf. EG2, v.33。即ち、現代語では descendió が対応する。v.296 の前置詞 a も para に相当するととる。sacar 「救い出す」(TSW)。前接の無強勢代名詞 los は直接目的

格で、v.295 の los justos を受ける。「彼らを」。296) del profundo: profundo には「深さ、深海」の意味以外に、「地獄」（TSW）の意味もある。「地獄から（del infierno）」（DRCR, p. 32）。v.295-v.296 の訳は「篤信家たちのため、（el criador 「神」は）彼らを地獄から救い出しに降りた」となろう。298) padeció: <padecer 「(pasión 「受難を」) 被る」, vid. EG3A, v.10. 299) pagó: <pagar. ここでは「贖う」の意味, cf. EG2, v 161 及び EG3A, v.11. 直接目的語に相当するのは v.301 の lo que 以下の節。主語は v.300 の Cristo 「キリスト」。「キリストは lo que 以下のことを贖った」。300) Adán segundo: 「第2のアダム」、先行する Cristo の言い換え。「アダムとその子孫の罪を救済し、新たな救済の楽園（Paraíso）をもたらしたことにより、キリストは第2のアダムである」（PPCA, p. 127）。「エンシーナは〔新約聖書の〕『ローマの信徒への手紙』（5:12-5:21）、『コリントの信徒への手紙一』（15:22, 15:45）から引用したかなり一般的な1つの思想を広めている」（DRCR, p. 32）。尚 KDY には「最初の人アダム」、「最後のアダム」『コリントの信徒への手紙一』（15:45）とあり、対応するスペイン語は、BDJ によると el primer hombre, Adán 及び el último Adán（ちなみに『ウルガータ版聖書』ではそれぞれ primus homo Adam と novissimus Adam）となっており、「第2のアダム」という表現と対応していない。301) lo que el primero pecó: この箇所全体が v.299 の pagó の直接目的語に相当する。el primero は el Adán primero 「最初の（第1の）アダム」。「最初のアダムが犯したこと（を）」。

訳（v.295-v.301）

神を信じる者たちのため

彼らを地獄から救い出しに神は降りられ

そしてこの世の救済のため

神は難を受けられた。

そして我らが第2のアダム、キリストは、

最初のアダムが犯した罪を
贖ったのだ。

¡O, qué primer pecador, 302
culpa bienaventurada
que para ser desculpada
mereció tal Redentor, 305
vencedor
de guerra tan guerreada
con tanta pena y dolor! 308

302) ¡(...) qué primer pecador (!): quéは感嘆詞として用いられている。
primer pecador「最初の罪人」, つまり v.301 の(第1の)アダムのこと。
303) culpa bienaventurada: 直訳では「至福の罪」であるが, 語を補い,
受動態の文ととる。即ち, *su culpa fue bienaventurada*。bienaventura-
da は bienaventurar「他動詞, 古語, 至福を与える」(RAE)の過去分
詞。304) que para ser desculpada: DRCCR 版にあるように que の前にコ
ンマを補い, 説明的な理由の節を導入する接続詞ととる。「何故なら」。
desculpada→disculpada<disculpar「許す」の過去分詞, 不定詞の
ser との組み合わせで受動態を形成。「許されるために」。この意味上の主
語は v.302 の primer pecador。305) mereció tal Redentor: mereció<
merecer「値する」は, 「(目的語なしに)自分の真価を発揮する」(DEM),
「(自動詞)功績がある」(TSW)といった意味でも用いられるが, v.304
の que が導入する節の核となる。主語は後続の tal Redentor「そのよう
な贖い主」, つまりキリストのこと。306) vencedor:「勝利者」。v.305 の
Redentor の言い換え。307-308) 全体が de を介して v.306 の vencedor
にかかっている。guerreada<guerrear「(自動詞)戦う」の過去分詞,
女性名詞の guerra「戦い」と一致して修飾, 自動詞由来の過去分詞なの

で受け身の意味とはならない。con は様態，付随の意味ではなく，対立の意味の contra と同様ととる。したがって「con 以下と戦った戦い」。pena は「苦しみ，刑罰」，dolor「痛み」は pasión「受難」の意味。「それほど多くの刑罰と受難と戦った戦いの勝利者」。

訳（v.302-v.308）

ああっ，何とまあ最初の罪びとよ，
彼の過ちには至福があたえられたのだ。
何故なら彼が赦されたのは
あれだけの刑罰と受難に対して
戦った戦いにおける
勝利者である
あの贖い主のおかげ！

Tal dolor en cuerpo tal	309
fue para más alegría,	310
para luego a tercer día	
ressucitar inmortal	
de mortal.	
¡O, sola esperanza mía!	
¡O, misterio divinal!	315

309) tal dolor en cuerpo tal: この行には2つの tal があるが，それぞれ名詞 dolor「痛み」，cuerpo「体」を修飾する形容詞である。名詞に後置で用いられる tal について DEM は文語の用法としているが，もちろん脚韻のためでもある。現代スペイン語の散文であれば，tal dolor en tal cuerpo となる。「そのような」の意味以外に「そんなに大きな（=tanto, tan grande）」（TSW）の意味でも用いられる。「そのような体にそんなに大きな痛み」。この句の核となる dolor は，v.310 の fue の主語となる。

尚, v.309-v.313 の文の構造について, v.309 の dolor を核とする名詞句を主語とする定形動詞は v.310 の fue (<ser), それに後続するのが前置詞 para で導入されるのが v.310 と v.311 の 2 つの句というものである。310) fue para más alegría: 「(主語は) para 以下のためであった」。más は mucha (<mucho 「沢山の」) の優等比較級。「より多くの喜び」。311) para luego a tercer día: para luego には「ただちに, すぐに」(TSW) の意味もあるが, ここの para は v.310 の場合と同様に名詞句を導入するものとする。ただしこちらの場合, 後続するのは v.312 の不定詞 ressucitar。luego 「のちに」。a tercer día 「3 日目に」の前置詞 a は時点を表わす。尚, イエスが磔にされたのは金曜日であり, 復活した日に関して, 新約聖書の各福音書は「週の初めの日」と表わしており, それを日曜日のことと解釈するのが常のようである。『コリントの信徒への手紙一』(15:4) は, 「3 日目に復活」(KDY) としている。312-313) ressucitar inmortal de mortal: ressucitar→resucitar, ここでは他動詞として用いられているととる。即ち, (fue para) resucitar A de B 「A を B から蘇らせること (のためであった)」。inmortal は形容詞「不死の」であるが, ここでは名詞として用いられている。mortal 「死すべき」も形容詞ではなく, 同様に名詞として用いられている。「死せるものから不死のものを蘇らせる」。314) esperança: →esperanza. 315) divinal: 「(詩) あやにかしこき」(TSW), vid. EG3A, v.176。

訳 (v.309-v.315)

そのお身体にあのような痛み
それはより大きな喜びのため,
つまり 3 日ののちに
死せる者から
不死の神を復活させるためであったのだ
ああ, 私の唯一の望み!

ああ、何とも畏れ多き神秘！

¡O, muy sagrada pasión	316
de gozo muy infinito!	
¡O, misterio muy bendito	
de santa resurrección!	
¡O, gran don	320
de carta de fin y quito	
para nuestra redención!	322

316-322) この連の構造は、それぞれあまり複雑ではないが、語彙的な意味が問題となり、場合によっては専門用語の知識や舞台上の状況の理解が必要となるかもしれない。319) resurrección: →resurrección「復活」。
321) carta de fin y quito: fin y quito について PPCA (p.128) は finiquito「決算, 清算」としている。即ち「清算書」。

訳 (v.316-v.322)

ああ無限の喜びの
聖なる受難よ！
ああ聖なる復活の
いと尊き神秘よ！
我らが贖いのための
清算状の
ああ偉大な授かりものよ！

¡Qué pudiera aprovechar	323
que Jesucristo naciera	
que naciera y que muriera,	325
para no ressucitar	

y tornar

al hombre lo que perdiera

el primer hombre en pecar?

329

323-329) この連は v.323 の *pudiera aprovechar* を主節とする構文で, *qué* を用いた疑問文となっている。 *aprovechar que* + 節 (直說法) + *para* + 不定詞で, 「(v.326 の) *para* 以下するために (v.324 の) *que* 以下を利用する」 という構造である。 323) *¿qué pudiera aprovechar (...)?*: *pudiera* < *poder* の接続法過去, -*ra* 型であり, ここでは過去未来の意味で用いられているととる。その場合の意味は過去の推量。cf. EG3A, v.64-v.65。他動詞の *aprovechar* の直接目的語に相当するのが v.324 の *que* 以下の節であるため, 疑問詞 *qué* は主語「何が」の意味にとる。「何が *que* 以下を利用し得たのだろうか」。 324-325) v.325 は等位接続詞で結ばれた 2 つの節がコンマで挿入された表記となっているが, v.324 を言い替えたものととる。即ち *naciera* (< *nacer* 「生まれる」), *muriera* (< *morir* 「死ぬ」) の主語はいずれも *Jesucristo* 「イエス・キリスト」。そしてここで用いられている接続法過去-*ra* 型は直說法過去完了の意味, 即ち *naciera* → *había nacido*, *muriera* → *había muerto*。cf. EG3A, v.64-v.65。 326-327) *para* で導入される不定詞が等位接続詞で結ばれて 2 つ示されている。最初の不定詞だけが *no* を伴い, 文字通りの意味は「復活せず, そして戻すために」となるが, 本稿は *no* を伴う前者の不定詞を, *para* ではなく *sin* を伴った挿入句と読み替える。即ち, *para, sin ressucitar, tornar* 「復活することなく元に戻すために」。 *para* は後者の不定詞にのみかかるものととる。 327-328) *tornar al hombre lo que perdiera*: *al hombre* は間接目的語「人間に」, 他動詞 *tornar* 「戻す」の直接目的語に相当するのは *lo que* 以下の節, その核となるのが *perdiera* → *había perdido*, これの主語は v.329 全体。「(v.329) が失ってしまったことを人間に戻す」。 329) *el primer hombre en pecar*: 「罪を犯した最初の人間 (が)」, つまり v.301

と同義とする。

訳（v.323-v.329）

救い^{キリスト}主イエスが生まれ
 そして亡くなったわけだが、
 復活をともしなわなかったら、
 いったい何が
 罪を犯した最初の人間が
 失ったものを人間に
 戻すことを可能にすることが出来たというのか。

Crean todos ya conmigo 330
 su resurrección sagrada
 y no duda nadie nada:
 que yo vengo a ser testigo
 y lo digo,
 digo que está rematada 335
 cuenta con el enemigo. 336

330) crean todos ya conmigo: conmigo→conmigo。crean (<creer「信じる」, 接続法現在 3 人称複数) は todos「すべての者たち」に対する命令の形をとっているが, EG3A, v.129 の場合と同様に, 願望の主節が省略された従属節とする。即ち, *Deseo que todos crean*.「皆が信じるように私は望む」。crean の直接目的語は v.331 の su resurrección (→resurrección) sagrada「彼の聖なる復活 (を)」。

332) no duda nadie nada: duda (<dudar「願う」の直説法現在) の主語は nadie。nada が直接目的語とする。「誰も何も疑わない」。DRCR 版では dude と接続法現在の表記となっており, その場合 v.330 の crean と同様に, 同じ願望の主格が省略された従属節ととれる。即ち (*deseo que*) no dude nadie.「誰も何も疑わ

ないように（私は望む）。v.332 は y で導入される等位節ととれるので、接続法の *dude* を用いたこの後者の解釈の方が良いかもしれない。333): *que yo vengo a ser testigo*: コロン (:) を伴い、接続詞 *que* は説明的に理由の節を導入している。*vengo* (<*venir*) a+不定詞, 「(不定詞を) しに来る」。「なぜなら私は証人となるために来たからである」。334-335) PPCA (p. 128) は v.334 の行末の *digo* と次の v.335 の行頭の *digo* に関して、文体的な特徴を指摘している。これはエンシーナ自身が *encadenado* 「尻取り式の（詩体）」(TSW) と呼んでいるものである。v.337-v.338 及び, v.342-v.344 も同様の詩作の技法であるとしている。374) *lo digo*: 「私はそのことを言う」であるが、この *lo* は v.335 の *que* 以下を指すととる。335-336) *digo que está rematada cuenta con el enemigo*: *rematada*<*rematar* 「終える」の過去分詞で、*está* とともに述部を形成している。女性形であるので主語は v.331 の女性名詞 *resurrección* も想定できるが、その場合の意味は「復活は終わった」。もう 1 つの可能性は v.336 の *cuenta* を主語とするものである。その場合、語を補って語順を変えると、*digo que la cuenta con el enemigo está rematada* となる。*cuenta* 「考慮、意識 (=consideración)」(TSW)。enemigo は『ルカによる福音書』(6:27-6:28), 『マタイによる福音書』(5:44) 等で触れている「敵」のことか。「敵への配慮が終わっていると私は言う」。*contar con* で「有する」の意味があり、その名詞化ととれば、「敵を持つことは終わっていると私は述べる」。

訳 (v.330-v.336)

さあ皆の者、私とともに信じるのだ、
彼の聖なる復活を、
そして誰も何も疑うことなきよう。
なぜなら私は証人となるために来たのであるからで、
そして私は述べよう、

敵を持つということが
終わりをとげたということ。

Los que estáis desconsolados 337
consolad los desconsuelos,
que vuestros llantos y duelos
en gozo serán tornados 340
y aun doblados.
Subirá Cristo a los cielos
con sus siervos libertados. 343
Fin

337-338) 先に触れたように (v.334-v.335), ここは尻取り式の技巧が用いられている。337) los que estáis desconsolados: los que は関係代名詞, 「los que 以下する者たちよ」, v.338 の consolad の動作をおこなう主体として呼びかけている。desconsolado 「慰めようのない」 (TSW), 即ち desconsolar 「嘆かせる (=afligir)」 (TSW) の過去分詞。338) consolad los desconsuelos: consolad < consolar 「慰める, 和らげる」の命令形 2 人称複数。v.337 に対して呼びかけ, 後続の los desconsolados 「悲嘆」は直接目的語。「悲嘆を和らげなさい」。339), que: 理由の節を導入する接続詞。節の核となる動詞は v.340 の受動態の serán tornados 及び v.341 の (serán) doblados。主語は v.339 の vuestros llantos y duelos。340) en gozo serán tornados: serán tornados < tornar 「戻す」の受動態。ここは en 以下へと「変わる」の意味にとる。即ち, vuestros llantos y duelos serán tornados en gozo 「君たちの嘆きと悲しみは喜びへと変わるだろう」。341) aun doblados: doblados < doblar 「二倍にする」の過去分詞であるが, serán が省略された受動態ととる。「(君たちの嘆きと悲しみは) 2 倍にさえなるだろう」。342) cielos: 「(主に pl.) 天国」

(TSW)。343) liberado: <liberar「自由にする」の過去分詞。ここでは「救済された」の意味にとる。

訳 (v.337-v.343)

悲しんでいる者たちよ
それらの悲嘆を和らげよ。
何故ならあなた方の嘆きと悲しみは
喜びへと変わり
そして倍にもなりさえするだろうからである。
救われたしもべたちとともに
キリストは昇天するだろう。
おわり

A los cielos soberanos	344
subirá con su poder	345
que presto le esperan ver	
los celestes ciudadanos	
cortesianos,	
y avremos todos plazer.	
Andad en paz, mis hermanos.	350

345) subirá: subir「登る」の直説法未来, 3人称単数, 主語はイエスで昇天の意味。v.344のa以下がその方向。尚, キリストの昇天は復活のあとの出来事として福音書に記されている。345) con su poder: poderは「力, 能力」の意味ととる。conの解釈としては, 手段の意味での「彼の力でもって」か, 或いは同伴の意味の「彼の力とともに」が挙げられるが, 福音書を確認するとキリストの昇天は受け身で表現されている。即ち『マルコによる福音書』(16:19)では「天に上げられ」(KDY), スペイン語版聖書では fue elevado al cielo (BDJ), 『ウルガータ版聖書』(ラテン語)では

adsumptus [＜ad+sūmō (-ēre)] est in caelum とあり、『ルカによる福音書』(24:51) ではそれぞれ「天に上げられた」(KDY), fue llevado al cielo (BDJ), ferebatur in caelum (『ウルグータ版聖書』) といずれも受動(態)で表されているのが確認できる。したがって v.345 の con は同伴の意味ととることにする。「彼の力とともに昇るだろう」。346), que: 単なるつなぎ、或いは理由の節を導入する接続詞ととるのが妥当なところだが、ここは関係詞の en los que 或いは donde と読み替えることにする。その場合の先行詞は v.344 の los cielos。346) le esperan ver: le は「彼を」、つまりレイスモ。esperan ver 「見るのを望む」の主語は、v.347-v.348. 347-348) los celestes ciudadanos cortesanos: この箇所は v.346 の esperan の主語である。この名詞句の核となるのは ciudadanos 「市民」で、celestes と cortesanos はいずれも形容詞と解釈する。349) avremos todos placer: avremos に対応する現代語は habremos, 即ち haber の直説法未来 1 人称複数であるが、ここは助動詞ではなく、haber がかつて有していた「持つ」の意味。「我々は持つであろう」となるが、後続の todos が意味的に主語に含まれる。plazer (→placer) が直接目的語。「我々は皆、喜びを持つであろう」。350) andad en paz: andad＜andar の 2 人称複数に対する命令であり、後続の mis hermanos に向けられた言葉である。en paz は「安らかに、安穩に」(TSW)。

訳 (v.344-v.350)

至高の天国へと

彼はその力とともに昇るだろう。

そしてそこでは天の宮殿の

住人たちが、直ちに彼と会うのを

望んでいる。

そして誰もが皆、喜びを得るだろう。

安らかに歩め、兄弟たちよ。

Villancico

Esta tristura y pesar 351

en plazer se ha de tornar.

Tornarás esta tristura

en plazer, gozo y holgura,

que Cristo en la sepultura 355

no puede mucho tardar. 356

villancico: 「畳句 (estribillo) を頻繁に用いる短い民謡」(RAE)。EG2 の場合と同様に、このビリャンシーコにもメロディが伴っていたのだろう。vid. EG2, p. 211 の注 8。351-352) esta tristura y pesar en plazer se ha de tornar: →esta tristura y pesar se ha de tornar en plazer。即ち、en 以下は tornar の補完補語と解釈する。351) tristura: 「=tristeza 〔「悲しみ」〕」(TSW)。352) en plazer se ha de tornar: ha (<haber)+de+不定詞は義務の意味に加えて、未来の意味としても用いられる。cf. EG2, v.95, v.204。tornar に関して、v.340 の serán tornados は他動詞の tornar 「戻す」の受動態と解釈した。この v.352 の tornar もそれと同様に他動詞ととれば、まずこの se は再帰受動の用法ととれる。その場合 v.351 全体が主語で、「この悲しみと苦しみは(en 以下に) 変えられるだろう」となる。もう 1 つの解釈としては、訳はあまり変わらないが、se を無人称の用法ととるというものである。その場合 v.351 は直説目的語となるので、se ha de tornar esta tristura y pesar en plazer という語順が想定できる。3 つ目の解釈は、人以外の主語もとれる再帰動詞 tornarse 「変わる、～になる」(TSW) が用いられているとするものである。いずれの解釈も訳はあまり変わらない。353) tornarás: →se tornará, 直説法未来の 3 人称単数であるが、ここも v.352 の se ha de tornar で試みた 3 つの解釈が適用できるであろう。354) en plazer: v.352 と同様に、この en も tornar の補完補語を導入するものとする。354) holgura: 「歓喜

（regocijo）」（DRCR, p. 34）。355), que: 理由の節を導入する接続詞ととる。356) no puede mucho tardar: この puede (<poder)+不定詞は能力ではなく、可能性の意味にとる。即ち「（キリストは墓に）長くいないだろう（からである）」。

訳（v.351-v.356）

ビリャンシーコ

この悲しみと苦しみは
喜びへと変わるだろう。
この悲しみは喜びと
楽しみ、そして歓喜へと変わるだろう。
なぜならキリストは墓には
あまり長くいないだろうからだ。

En llegando a los tres días	357
gozaremos de alegrías,	
qu'el Redentor y Mexías	
tornará a ressucitar.	360
Ressucitará con gloria,	
vencedor de gran vitoria.	
Pongamos nuestra memoria	
en siempre le contemplar.	364
Fin	

357) en llegando: en+現在分詞で「～するやいなや」の意味となる。llegando の意味上の主語は、主節に相当する v.358 の gozaremos と同じだとすれば、定形動詞を用いた en cuanto llegamos に相当するであろう。その場合、「(a 以下に) 我々が至やいなや」の」意味となる。357) a los

tres días: 前置詞 a は時点の用法ととり, v.311 の a tercer día と同義ととる。即ち, 「3 日目に (至るやいなや)」。359), qu'el: →, que el。que は理由の節を導入する接続詞ととる。359) Redentor y Mexías: Redentor 「贖い主」も Mexías→Mesías 「メシア, 救世主」もイエス・キリストを指し, これらを主語とする v.360 の tornará が 3 人称単数であることから, 2 つでひとまとまりの意味ととる。「贖い主で救世主であるイエス・キリスト」。360) tornará a ressucitar: ressucitar→resucitar, ここでは自動詞で「蘇る」。自動詞の tornar+a+不定詞で「再び～する」という意味があるが, ここは本来の意味ととり, 「a 以下 (の不定詞) するために戻る」の意味ととる。即ち「蘇るために戻るだろう」。361) ressucitará con gloria: →resucitará con gloria。ここの前置詞 con も v.345 の場合と同様に, 同伴の意味にとる。即ち「栄光とともに」。362), vencedor: 底本とした PPCA も DRCE の版も同様に, vencedor 「勝利者」の前にコンマを伴っており, 先行の v.361 の gloria の内容を説明するようにもとれる。が, この vencedor はキリストを指しており, v.361 の動詞 ressucitará の主語ととるのが自然だと思う。コンマを用いて説明の句としているのを解釈すれば, 主語以外では呼格の可能性もあるかもしれない。その場合, 「勝利者よ」。362) vitoria: →victoria, vid. EG3A, v.157。363) pongamos: <poner 「置く」, 接続法現在 1 人称複数で命令の用法。364) en siempre le contemplar: →en contemplarle siempre 「常に彼を讃えることに」。MPL (§ 20.3.) が指摘している, 不定詞に前置詞が先行する際に無強勢代名詞が後接で用いられる中世スペイン語の用法については, EG1, v.120 及び EG2, v.191 を参照。contemplar の用法に関しては, EG3A, 前書き 4 番目の文で扱ったように, ここの「ほめ讃える」(MED) の意味ととる。つまり le はレイスモで「彼を」。

訳 (v.357-v.364)

3 日ののちには

我々は喜びを享受することだろう。
なぜなら贖い主で救世主であるイエス・キリストは
復活のために戻るだろうからだ。
栄光とともに蘇るだろう、
大勝利の勝者よ。
永久に彼を讃えることを
我々は忘れてはならない。
終わり

Pongamos nuestra esperanza 365
en la bienaventurança,
pues que Cristo nos la alcança
muriendo por nos salvar. 368

365) esperanza: →esperanza. 366) bienaventurança: →bienaventuranza 「至福, 繁栄」(TSW), vid. EG3A, v.185. 367), pues que: 説明的な理由の節を導入する。「何故なら」。367) nos la alcança: 直接目的格代名詞の la は v.366 の bienaventurança を指すととる。alcança→alcanza <alcanzar, ここでは他動詞として用いられ, 「近づける」。367) muriendo por nos salvar: →por salvarnos muriendo。muriendo < morir の現在分詞, 副詞的に「死ぬことにより」。por は代替の意味ととる。「～の代わりに」。後接の nos の位置については, v.364 を参照。

訳 (v.365-v.368)

我らの希望を
至福に託すことにしよう。
なぜなら我らの救済のため, 死ぬことにより
キリストは至福を我らにもたらしたからだ。

参考文献 (()) 内は引用文献の略号)

- Alonso, Martín (1986). *Diccionario medieval español: desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, Salamanca: Universidad Pontificia de Salamanca (=MED).
- Bello, Andrés (1847, 1984). *Gramática de la lengua castellana*, Madrid: EDAF
- Borrego, J. et al. (1986, 1989^s). *El subjuntivo valores y usos*, Madrid: Sociedad General Española de Librería
- Corominas, Joan et al. (1980–1991). *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico* (6 vol.), Madrid: Editorial Gredos.
- Encina, Juan del (1998). *Teatro completo. Edición de Miguel Ángel Pérez Priego*, Madrid: Cátedra (=PPCA).
- Encina, Juan del (2001). *Teatro. Edición de Alberto del Río*, Barcelona: Editorial Crítica (=DRCR).
- 原誠ほか (編) (2005). 『クラウン西和辞典』 東京: 三省堂 (=CDE)
- 廣澤明彦 (2011). 「ファン・デル・エンシーナ「牧人劇」に現れるレオン方言の特徴の考察 — 「牧人劇 I」 —」, 『拓殖大学語学研究』 125 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 101–147 (=EG1)
- 廣澤明彦 (2013). 「ファン・デル・エンシーナ「牧人劇」(Églogas)」に現れるレオン方言の特徴の考察 — 「牧人劇 II」 —」, 『拓殖大学語学研究』 129 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 173–225 (=EG2)
- 廣澤明彦 (2014). 「ファン・デル・エンシーナの戯曲における文法的特徴の考察 (『我らが贖い主の受難と死の上演』(1496))(上)」, 『拓殖大学語学研究』 131 号 (拓殖大学言語文化研究所), pp. 199–243 (=EG3A)
- ホセ・ガルシア・ロベス著, 東谷穎人, 有本紀明訳 (1976). 『スペイン文学史』 東京: 白水社
- Jones, R. O. et al. ed. (1975). *Poesía lírica y cancionero musical. Juan del Encina*, Madrid: Castalia
- 共同訳聖書実行委員会 (1992). 『新約聖書 詩編つき』 東京: 日本聖書協会 (=KDY)
- 宮城昇 (ほか) 編 (1999). 『現代スペイン語辞典 (改訂版)』 東京: 白水社 (=DEM)
- Menéndez Pidal, Ramón (1906, 2006). *El dialecto leonés (edición conmemorativa 1906–2006)*, León: El Búho Viajero (=MPL).
- 中岡省治 (1993). 『中世スペイン語入門』 東京: 大学書林 (=IEM)
- Pedraza, Felipe B. et al. (1980). *Manual de literatura española. II Renacimiento*,

- Estella (Navarra): Cénlit Ediciones.
- Real Academia Española (1963). *Diccionario de autoridades* (ed. fascimil), Madrid: Gredos.
- Real Academia Española (2001). *Diccionario de la lengua española* (22ª ed.), Madrid: Espasa-Calpe (=RAE).
- Real Academia Española (2009). *Nueva gramática de la lengua española sintaxis II*, Madrid: Espasa Libros
- Sullivan, Henry W. (1976). *Juan del Encina*, Boston: Twayne Publishers.
- 高橋正武 (1956). 『西和辞典』 東京：白水社 (=TSW)
- 田中秀央他編 (1937, 1993). 『ギリシア・ラテン引用語辞典（新增補版）』 東京：岩波書店
- 田中秀央 (1952, 1992). 『羅和辞典』 東京：研究社 (=LLJ)
- 寺崎英樹 (2011). 『スペイン語史』 東京：大学書林
- Ubieta, José Ángel ed. (1976). *Biblia de Jerusalem*, Bilbao: Desclée de Brouwer (=BDJ).
- Weber, Robert et al. ed. (1969, 2007). *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft. (=『ウルグータ版聖書』)
- 山田善郎 (監修) (1995). 『中級スペイン文法』, 東京：白水社

(原稿受付 2015年9月15日)

○拓殖大学 研究所紀要投稿規則

（目的）

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する、経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下、「研究所」という。）が発行する紀要は、研究成果の多様な学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

（種類）

第2条 研究所は、次の紀要を発行する。

- (1) 経営経理研究所 紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所 紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所 紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所 紀要『拓殖大学理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所 紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

（投稿資格）

第3条 研究所が発行する紀要の投稿者（共著の場合、投稿者のうち少なくとも1名）は、原則として研究所の研究員でなければならない。

2 研究所の編集委員会（以下「編集委員会」という）が認める場合には、研究員以外も、投稿することができる。

（著作権）

第4条 研究所が発行する紀要に掲載された著作物の著作権は、研究所に帰属する。

2 研究所が必要と認める場合には、投稿者の許可なく、著作物の転載や引用を許可する。ただし、事後に投稿者に報告するものとする。

3 研究所の紀要に掲載した著作物は、電子化しコンピュータネットワークを通じて、本学のホームページ等に公開するものとし、投稿者はこれを許諾しなければならない。

（執筆要領および投稿原稿）

第5条 投稿する原稿は、研究所の執筆要領に指示に従って作成する。

2 投稿する原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。

- 3 学会等の発行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、研究所の紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

（原稿区分他）

第6条 投稿区分は、別表1、2のとおり、定める。

- 2 投稿する原稿の区分は、投稿者が選定する。ただし、研究所の紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、研究所の編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。
- 3 研究所の紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3～5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。
- 4 研究所研究助成を受けた研究成果発表（原稿）の投稿区分は、原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けて、既に学会等で発表した研究成果（原稿）は、抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

- 2 投稿者には、掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は、超過分について有料とする。

（正誤の訂正）

- 第8条 印刷上の誤りについては、投稿者の申し出があった場合、これを掲載する。ただし、印刷の誤り以外の訂正や追加は、原則として取り扱わない。
- 2 投稿者の申し出があり、研究所の編集委員会がそれを適当と認めた場合には、この限りでない。

（その他）

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、研究所の編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

この規則は，平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

別表 1 原稿区分（理工学総合研究所以外）

(1) 論 文	研究の課題，方法，結果，含意（考察），技術，表現について明確であり，独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2) 研究ノート	研究の中間報告で，将来，論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。 新しい方法の提示，新しい知見の速報などを含む
(3) 抄 録	研究所研究助成要領第 10 項(2)に該当するもの。
(4) その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（判例研究，解説論文，調査報告，資料，記録，研究動向，書評等）については，編集委員会において取り扱いを判断する。
	また，編集委員会が必要と認めた場合には，新たな種類の原稿を掲載することができる。

別表 2 原稿区別（理工学総合研究所）

(1) 展望・解説，(2) 設計・製図，(3) 論文，(4) 研究速報，(5) 抄録（発表作品の概要を含む），(6) 留学報告，(7) 公開講座，(8) 学位論文

拓殖大学言語文化研究所 『拓殖大学 語学研究』執筆要領

1. 発行回数

『拓殖大学 語学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年2回発行する。
その発行のため、以下の原稿提出締切日を厳守する。

- (1) 9月中旬締切 — 12月発行
- (2) 11月末日締切 — 3月発行

上記の発行に伴い、言語文化研究所（以下、「研究所」という）のホームページにも掲載する。

2. 使用言語

用語は、日本語又は日本語以外の言語とする。ただし、日本語以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に編集委員会に申し出て、その承諾を得たときは、使用可能とする。

3. 様式

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿2部を編集委員会宛に提出する。

- (1) 数字は、アラビア数字を用いる。
- (2) 原稿の文量は、A4縦版・横書き・20,000字以内とし、本文と注及び図・表を含め、原則として、以下のとおりとする。
 - ① 日本語による原稿：1行33字×27行
 - ② ローマ字（及び欧文）による原稿：ダブルスペースで32行。1行の語数は日本語33文字分。
 - ③ 上記以外の言語による原稿：ダブルスペース、20枚

上記分量を超えた投稿原稿は、言語文化研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で、本紀要の複数号にわたって、同一タイトルで投稿することはできない。

ただし、編集委員会が許可した場合に限り、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

- (3) 上記以外の様式にて、投稿原稿の提出する場合には、編集委員会と協議する。

4. 投稿原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学 研究所紀要投稿規則」に記載されている種別のいずれかとするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。
- (2) 投稿原稿の受理日は、編集委員会に到着した日とする。
- (3) 投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿原稿数の関係で、紀要に掲載できない場合には、拓殖大学言語文化研究所長（以下「所長」という）より、その旨を執筆者に通達する。

5. 図・表・数式の表示

- (1) 図・表の使用は、必要最小限にし、それぞれに通し番号と図・表名を付けて、本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定する。図・表も分量に含める。
- (2) 図および表は、コンピューター等を使用し、作成すること。
- (3) 数式は、専用ソフト等を用いて正確に表現すること。

6. 注・参考文献

- (1) 注は、本文中に（右肩に片パーレンで）通し番号とし、執筆者の意向を尊重して脚注、後注とも可能とする。
- (2) 引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

7. 執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは、『拓殖大学 語学研究』執筆予定表を、指定された期日までに提出する。

8. 原稿の提出

投稿原稿と一緒に、『拓殖大学 語学研究』投稿原稿表紙に必要事項の記入、「拓殖大学言語文化研究所ホームページへ公表承認印」を捺印し、原稿提出期日までに提出する。

9. 原稿の審査・変更・再提出

- (1) 投稿原稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が決定する。編集委員会は、原稿の区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 提出された投稿原稿は、編集委員会の許可なしに変更してはならない。

- (3) 編集委員会は、投稿者に若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。
- (4) 編集委員会は、紀要に掲載しない事を決定した場合は、編集委員会名の文書でその旨を執筆者に通達する。
- (5) 他の刊行物に既に発表された、もしくは投稿中の原稿は、紀要に投稿することができない。

10. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出すること。

電子媒体の提出時には、コンピューターの機種名と使用 OS とソフトウェア名及びバージョン名を明記すること。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿のデータを保管しておくこと。

11. 校 正

投稿原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、編集委員会と所長が三校を行う。

この際の校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

校正は、研究所の指示に従い、迅速に行う。

校正が、決められた期日までに行われない場合には、紀要に掲載できないこともある。

12. 改 廃

この要領の改廃は、言語文化研究所会議の議を経て、言語文化研究所長が決定する。

附 則

この要領は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

付記：「その他」の区分・定義について

- ①調査報告：専門領域に関する調査。
- ②資 料：原稿区分の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
- ③書 評：専門領域の学術図書についての書評。
- ④紹 介：専門領域に関するもの。

以上。

執筆者紹介

- 浅井 澄 民 (外国語学部准教授, 中国語学, 中国語史)
木村 政 康 (外国語学部教授, 音声教育, 日本語教育)
小池 和 良 (外国語学部教授, スペイン語学)
久米井 敦 子 (商学部准教授, 中国近現代音楽史, 中国語教育)
平山 邦 彦 (外国語学部准教授, 中国語学, 現代中国語文法)
山田 政 通 (外国語学部教授, 語用論, 談話分析)
保坂 芳 男 (外国語学部教授, 英語教育史, 応用言語学)
廣澤 明 彦 (外国語学部准教授, スペイン語学, スペイン語文法研究)

編集委員／小池和良 (外国語学部教授), 阿久津智 (外国語学部教授), 遠藤裕子 (外国語学部教授), 松下直弘 (外国語学部教授), 末延俊生 (政経学部准教授), 永江貴子 (外国語学部准教授), 平山邦彦 (外国語学部准教授), 廣澤明彦 (外国語学部准教授), 藤本淳史 (外国語学部准教授), 佐藤明彦 (国際学部准教授), 大野英樹 (外国語学部助教)

拓殖大学 語学研究 第133号

平成27年12月20日 印刷

平成27年12月25日 発行

(頒布1200円)

編集兼発行人 小池和良
言語文化研究所所長

発行所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14

TEL 03(3947)7595(直通)

印刷 株式会社 外為印刷